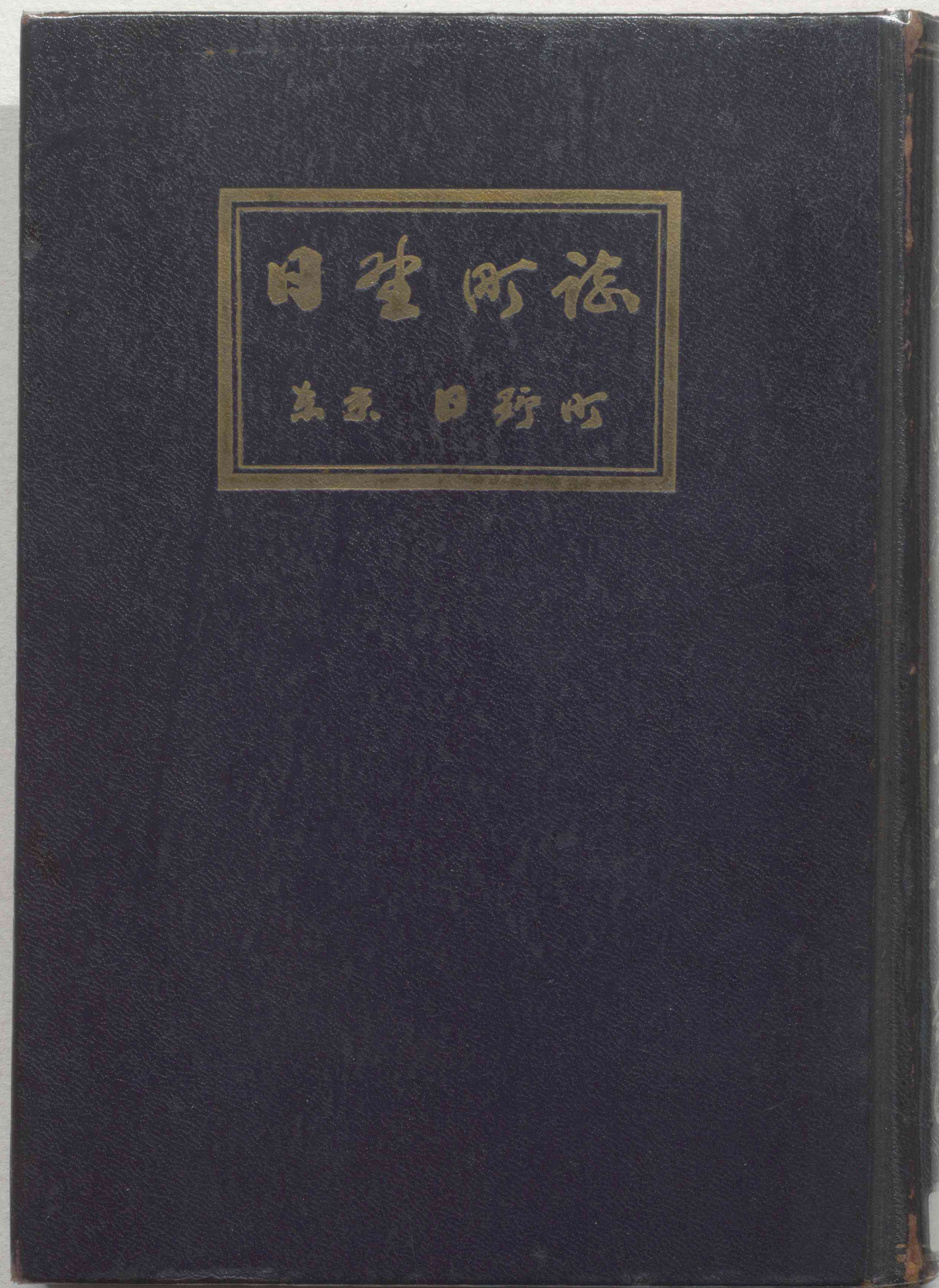
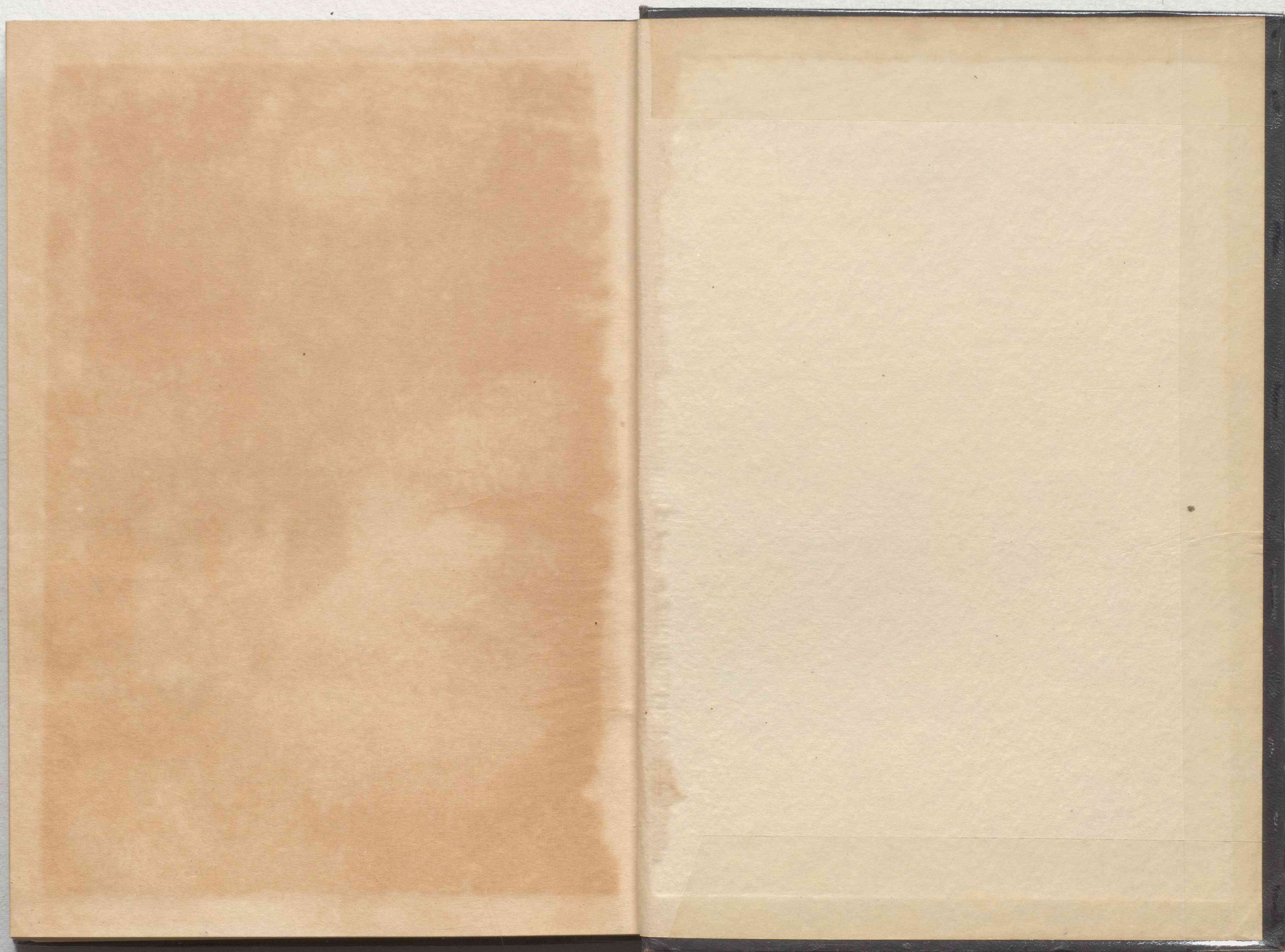


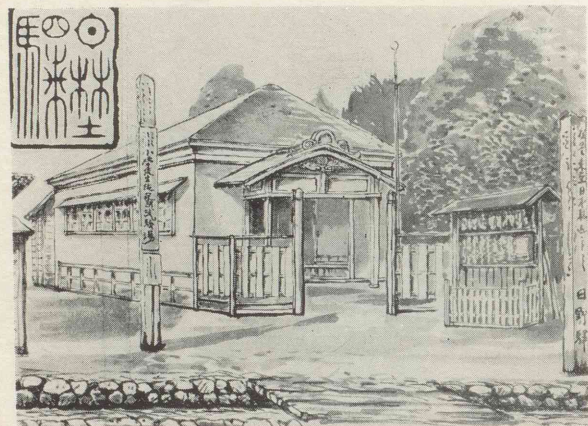




日野所誌

本京日野所

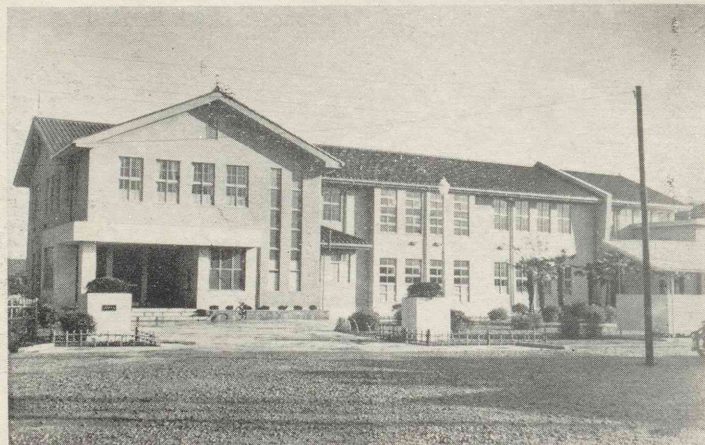
日野町の昔の役場庁舎と今の庁舎



(上) 明治初年新築の日野町役場。左上の印はその当時使った「日野町」の焼印



(中) 明治十年日野小学校の本館として建築。明治四十五年移築して役場庁舎に転用し昭和二十九年現役場庁舎のできるまで使用された小学校舎として三十四年間。役場として四十三年間の長きに互り使用されたものである。



(下) 現在の庁舎

歴 代 町 長



(上より)

古谷剛次郎

古谷 栄

渡辺 年

(上より)

佐藤 仁

斉藤文太郎

有山 亮

(上より)

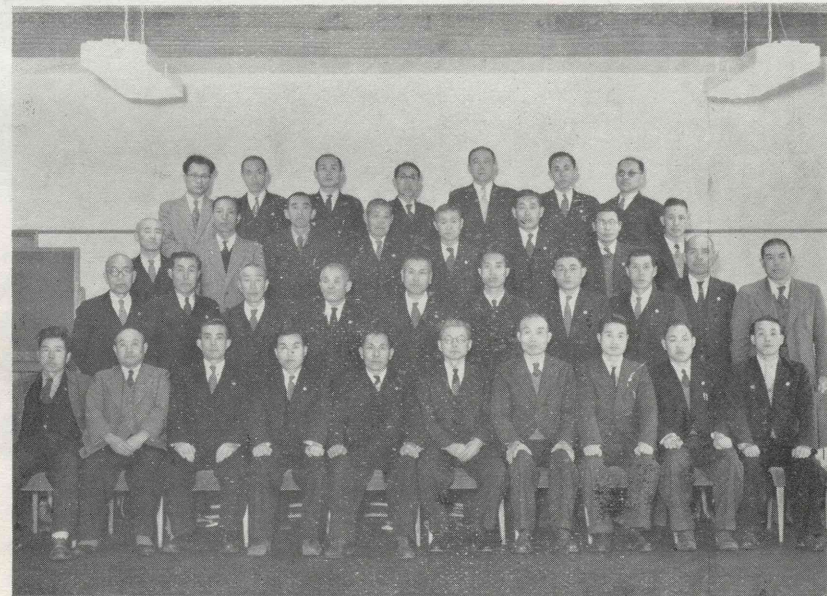
日野義順

佐藤信民

天野 清

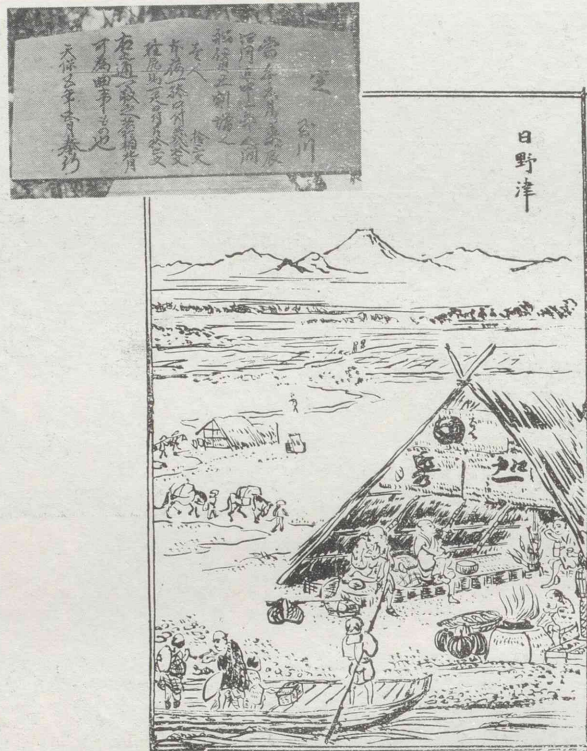


現町長 斉野次郎



町会議員と役場職員

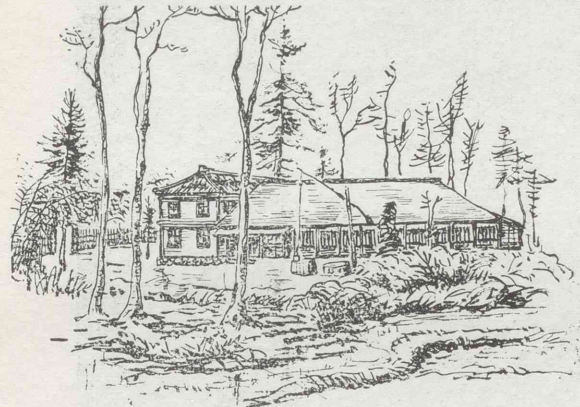
日野渡船場と高札



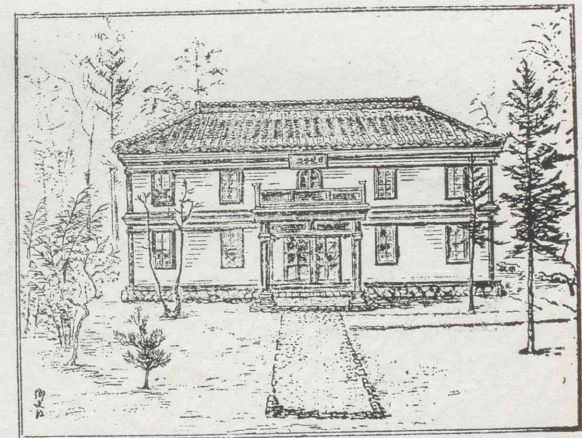
甲州道中 日野渡船場は他の渡場とちがつて幕府でも重要に見ていた。この絵は「江戸名所図絵」のさし絵を模したものである。「江戸名所図絵」は斉藤行雄が寛政年中に編纂をはじめ その子、幸孝、孫、幸成の三代にわたり文化年間にまもり天保二年に版にした。三十年かゝつた。全二十巻である。画もまた長谷川雪旦、雪堤父子の苦心になつたものである。

上は、渡し賃の高札。佐藤仁氏所蔵。現在日野小学校に寄贈。

昔の小学校



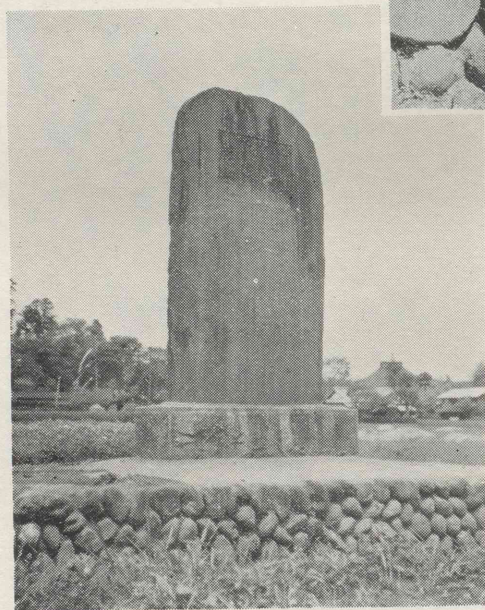
明治十年新築の日野小学校側面（東方より）



明治十年新築の日野小学校本館（南方より）

宝篋印塔（下田八幡神社境内）

宝暦十一年（183 年前）安養寺法
印周盛が建てたと塔身に彫つてあ
る。この種の塔はもと宝篋印陀羅
尼經の趣旨によつて建てられたも
のである。安養寺境内にも一基あ
る。日野町にあるのはこの二基だ
けである。

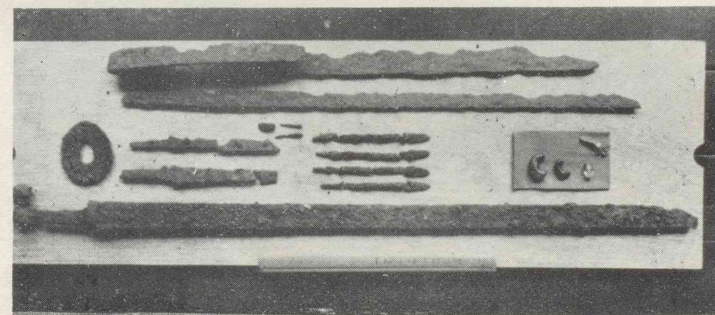


豊田耕地整理記念碑

東光寺上より出土の土器と石器



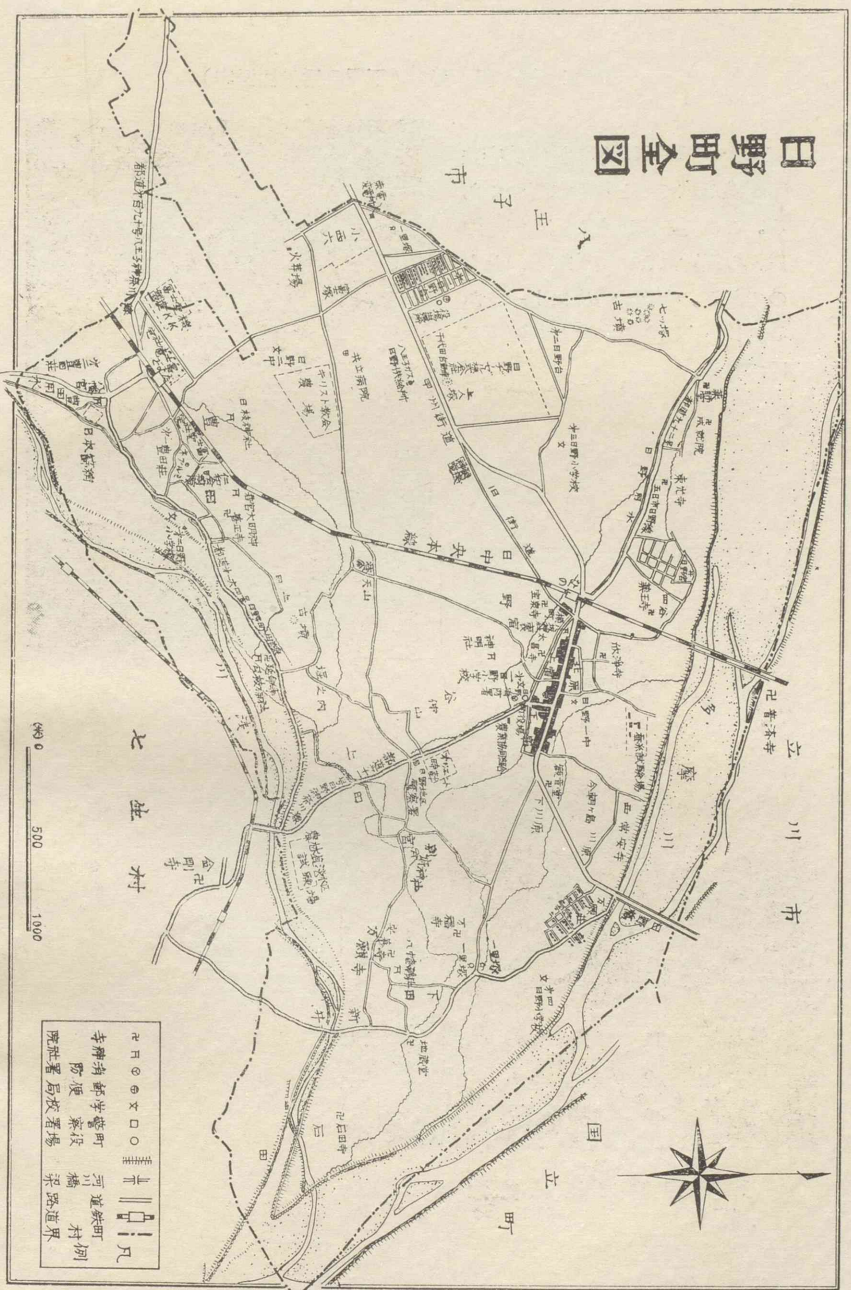
七ツ塚古墳出土品



○大刀 1. 刀子 2. 鉞 4. (昭和 29 年 6 月日野町史談会発掘の際出土)

○外に大刀 2. (以前発掘の際出土)

○曲玉, 管玉 (立川正次氏所蔵)



序

地方自治の発展は、その自治団体の執行機関たる首長と、議決機関たる地方議会の良識ある活動に俟つところ大なるものがあり、之に加うるに住民の、自治に徹したる協力を得ることが頗る肝要である。この三者相俟つて、はじめて真の自治の妙諦を発揮することが出来ると言うべきである。

然らば、その住民の真摯なる協力を得るの途は、一つにして足らずと雖も、先づ住民がその自治団体の行政並に其他に亘つて、よくその実態を理解し、それに基いて、正当なる判断をなし得るに至ることが最も肝要なことであると信ぜられる。

次に己の郷土の伝統を探究し、先人の残したる尊き文化に親しみ、その風物を楽しむところに日常の生活にもうるおいを増し、相互扶助のうるわしい自治精神が涵養されるものであると考えられる。

我が日野町は特に恵まれた美しい山河を有し遠く原始時代の昔から祖先がこゝに住みついた。以来数千年間多摩川浅川による幾多の大水害にも屈することなく、よくその自然の恩恵を善用し荒野をひらき田畑を耕し、道路を通じて、遂に今日に至つたものである。その間先人の勞苦は実に血と

汗と涙によつて、つづられたものである。太平洋戦争前後にあたり大小幾多の工場の設立を見るに至り、今や都南の一大工業都市としての土台が出来、又地勢環境は東都の衛星都市として発展すべき運命を有するもので、我等は本町の将来に多大の期待をよせるものである。

この希望に充ちたる郷土の、あらゆる方面について理解を高める第一歩として、今回新町舎の竣工を期して本町誌の刊行を企劃した。即ち本町発展の跡をたどり、行政、経済、教育、土木、交通産業その他各般の実相を調べ、更に悠遠なる史実に彩らる、神社、仏閣、史蹟等を探り、これが記述を補うに写真版を加え、以て郷土の描写につき努めて余すところなからしめんとした。

かくして郷土の実態を明かに認識し、祖先に対する追憶の念を深め、郷土愛培養に裨益するところ尠なからざるものあるを信ずるものである。

終りに本書編纂に当られたる編纂委員及び資料を提供せられたる各位に対し厚く感謝の意を表する次第である。

昭和三十年三月二十日

日野町誌編纂委員長
日野町長

齊 野 次 郎

目次

第一 総説

1	郷土展望	一七
2	沿革の概要	二〇
	先史時代の日野	三〇
	原史時代の日野	三三
	中世の日野	三六
3	土地と地質	三七
4	気象	四〇
5	人口	四三

第二 行政

1	行政の沿革	四七
2	歴代戸長・町長	四八
3	歴代助役	四九
4	歴代収入役	五〇
5	歴代町議会議長同副議長	五〇
6	町議会議員	五一
7	町役場機構	五二
8	職員配置	五三
9	町長・助役・収入役・評価員	五三

第三

財政

10	選舉管理委員		四
11	監査委員		四
12	教育委員		四
13	農業委員		五
14	役場課長		五
15	自治會		五

第四

産業及經濟

1	町財政の膨脹		五
2	昭和二十九年年度歳出歳入予算		六
3	町有財産		六
4	町税賦課現況		六
5	町民負担状況		六
1	総説		六
2	農業		六
(1)	水田		六
(2)	畑		六
(3)	大根		六
(4)	蔬菜の出荷		六
(5)	果実		六
(6)	畜産		六
(7)	農業の畜力化機械化		六
(8)	蚕業		六
(9)	農業戸數		六
(10)	利用別耕作面積		六
(11)	経営農地面積別戸數		六
(12)	畜産種類別飼養數		六

第五

土木

3	商		七
(1)	農業団体		七
4	工業		七
	業種別商業の數及び従業者數		七
	工業会社別表		七
	オリエント時計工業株式会社		七
	小西写真工業株式会社		七
	日野チーゼル工業株式会社		七
	富士電機豊田工場		七
	神鋼電機株式会社		七

第六

教育

1	道の路		七
2	排水路		八
3	灌漑用水路		八
1	学校の起り		八
2	寺小屋		八
3	小学校		八
4	中学校		八
5	学校図書館		八
6	教育行政及び社会教育		八

第七 交通・通信

1 鉄道	二三
2 郵便	二三
3 道路交通	一八

第八 治安

1 日野警察署	一〇
2 日野町消防署	一二
3 日野町消防団	一四

第九 厚生

1 公益質屋	一九
2 国民健康保健	一〇
3 保健衛生	一三

第十 農林省試験所

農林省蚕糸試験所日野桑園	一四
農林省淡水区水産試験場	一四

第十一 公共事業

電灯・電力	一四
-------	----

方
ス
.....
一四

第十二 日野町農業協同組合

一四

第十三 神社

一五

◎八坂神社	一五	◎八幡大神社	一六
◎日野宮神社	一五	◎若宮神社	一六
◎神明社	一五	◎日枝神社	一六
◎神明社	一五	◎天満神社	一六
◎別府神社	一五	◎八幡神社	一六
◎北野神社	一五	◎白鬚神社	一六
◎日枝神社	一五	◎坂上神社	一六
◎石明神社	一五		

第十四 寺院

一五

◎善門寺	一五	◎延命寺	一七
◎宝泉寺	一六	◎薬王寺	一七
◎大昌寺	一六	◎石田寺	一七
◎欣浄寺	一六	◎善生寺	一七
◎成就院	一七	◎薬師堂	一七
◎福養寺	一七	◎坂下地藏堂	一七
◎安養寺	一七	◎教會	一八

第十五 日野町郷土文化財

1	文化財の保護について	一八
2	第一次指定略解説	一八
	一、七ツ塚古墳群（史跡）	一八
	二、東光寺薬師堂（史跡）	一八
	三、旧東光寺のあと地成就院（史跡）	一八
	四、東光寺大橋の碑	一八
	五、竹間加賀入道の墓（史跡）	一八
	六、坂下地藏本尊 鎗金座像（史跡）	一八
	七、八坂神社本殿（建造物）	一八
3	日野町史跡其他（文化財第一次指定以外のもの）	一八
	一、西党日奉氏居館址（史跡）	一九
	二、石器土器の集積	一九
	三、四谷神社（史跡）（日宮大権現）	一九
	四、姫 森	一九
	五、坂上神社（飯縄大権現）	一九
	六、八坂神社境内櫓の林叢	一九
	七、筆 塚	一九
	八、皇太子殿下お手植の松	一九
	九、明治天皇御小休所	一九
	十、竹間が加賀入道等署名竹木伐る儀停止の舳書	一九
	十一、日野渡船場址	一九
	十二、多摩川昔の堤防のあと	一九
	十三、下万願寺の開墾	一九
	十四、豊田若宮神社狛犬（建造物）	一九
	十五、日野台の富士塚	一九
	十六、上 人 塚	一九
	八、大昌寺開山、讃誓上人墓、同説法色葉集	一九
	九、玉川居祐翁墓碑	一九
	十、甲州街道万願寺一里塚（史跡）	一九
	十一、安養寺本尊木造阿弥陀如来座像	一九
	十二、延命寺の板碑	一九
	十三、梵天山横穴古墳（史跡）	一九
	十四、豊田耕地整理	一九
	わが日野町の年表	一九
	編纂を終えて	一九

日野町誌

第一 總 説

1 郷 土 展 望

中央線は、立川までは武蔵野の平坦地を西へ真直ぐに単調に走っているが、それから南方に転ずると多摩川の河原に出て、眼界が急に広がる。富士箱根の峻嶺、関東秩父の山脈もその全容が眺められ、広々とした豊かな田園中に工場がいくつも建っている。この美しい環境がわが日野町である。日野・豊田の二駅があり、国道第八号線（東京―甲府）は北方立川市から日野橋の大鉄橋を渡り、町の中央部を北東から西南に貫いて八王子市に入る。

人家は主に国道沿いに連り、また日野台をめぐる低地に聚落を作っているが、戦前大工場が相ついで建つたので住宅が集団的に日野台、川原、万願寺、豊田などに建設されたので、従来の農村風景が、にわかに様相を改めて新興的様相を呈することになった。

住民登録の世帯数は四、三六六、人口は二〇、〇八四である、戸数は四、二一八世帯、人口は一九、四七七人を数え、なお農家の総戸数は六七九戸となっている。

町の広さは九、二九七反で、その、内訳は、水田二、六三二反、畑三、八〇四反山林九七七反、宅地五一五、三九一坪である。

位置

日野町は東京都の西南、南多摩郡の西北部にある。東経一三九度二二分——一三九度二六分。北緯三五度三九分——三五度四二分。

東端は多摩川、浅川の合流点で、西に行くに従い次第に幅員を増して八王子市に接している。

産業的位置 本町は西に都下第一の商業都市八王子市を控え、北に新興都市立川市を持ちその中間にある。

これら都市との交通、物資の需給関係が多い。近年各種大小工場の設立されるにつれて東京都心との関係も頗る増大している。

交通的位置 中央線は上下線の往復計百回に近く、都心へは電車で一時間、バスにより甲州街道を走り新宿まで一時間余、京王線高幡駅から一時間で新宿に達することが出来る。

地勢

大体は平坦であるが西部の台地と東部の平地とに分ける事が出来る。

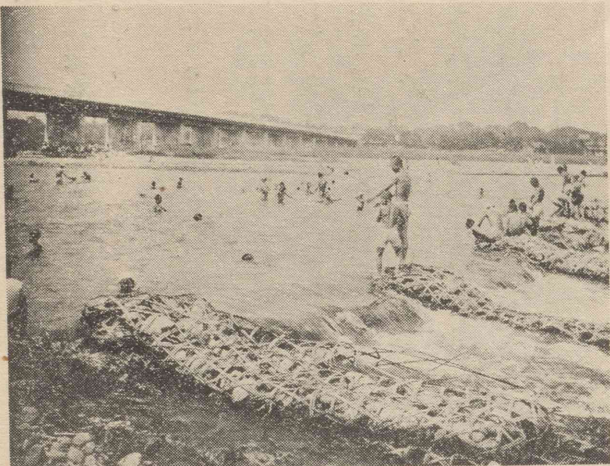
台地 この台地は、多摩丘陵に属し小宮加住一帯の丘陵に接続している。平均の標高は一〇五米で主に畑地として利用されている。この台地に昭和十四五年頃から大工場が相次で四つ設立された。台地からは武蔵野を一目に収め

ることが出来る。又台地の南側に沿って川辺堀ノ内から豊田に通ずる段丘がある。豊田駅の東方から黒川が源を発して、日野台と段丘との境を流れ、堀ノ内用水堀に注いでいる。

平地 平地は台地との差約二〇米から三〇米、標高は七〇米から七五米を示している。この平地は主として水田で、多摩川・浅川の水を数条の用水堀で導き、灌漑している。旧来の部落は、この平地にあつたが、工場が建つと共に数多い住宅が建てられた。

河川

多摩川 源を山梨県東山梨郡神村萩原山に発し、一の瀬川となつて南流し数多の川を合して丹波川となり、左岸に小袖川を右岸に小管川を入れ東に向い都内に入り小河内ダムを作る。日原川と氷川町地内で合流、青梅市を貫き、更に拝島に至つて南方からの秋川を合せ漸く平坦地に出る。ついで日野町東方で浅川を合せ多摩丘陵東北部の断層涯下を東南に流れ六郷川となつて東京湾に入る。水は清く飲料に適するから西多摩郡羽村堰から村山貯水池に送水している。沿岸は風光の美あり夏期は鮎漁を以つて知られている。大正時代迄は西多摩の材木を東京へ流す筏が数多く通つたものである。



(多摩川日野橋)

浅川 浅川の源は二つあり、一つは恩方村案下から、一つは小仏山から何れも東南に流れ八王子西部で合流し、日野町南部を東流して七生村との境をつくり字石田地先で多摩川と合流する。このあたりの川幅は凡そ百メートルである。

2 沿革の概要

日野町の沿革を記する上に、先づ忘れてならないことは、日野だけが独立して存在したものではなく、最少限度の範囲として、昔の多摩郡を一単位として考へなくてはならない。多摩郡とは、北多摩、西多摩、南多摩及び豊多摩郡を含めたところで、現在の渋谷区以西で、武蔵野市、三鷹市、立川市、府中市、昭島市、八王子市、青梅市を含めた地域である。次に時代については次のように区分して記すことにする。

- (一) 先史時代——人類が地球上にあらわれてから三、四十万年の間。
- (二) 原史時代——大和朝廷ができて、日本国が、かたまりかけた時代。
- (三) 中世——大和朝廷がかたまつて、京都に都ができてから、江戸幕府ができるまでの時代。
- (四) 近世——江戸に幕府ができてから以後明治になるまでの時代。
- (五) 現代——明治以後の時代。

一、先史時代の日野

何十万年かの遠い昔、われわれの祖先である人類は、火を使うことを考え出し、又石を材料として石斧・石鏃・石棒・石皿など各種の利器や道具などを使うことを工夫した。その時の人間の喜びはどんなであつたであらうか。これ

は人類文化史上の大発明であつて、これによつて他の動物を征服することが出来たのである。それから金属を使用することを知らるまでの、長い長い時代を、学者は石器時代と呼んでいる。この石器時代は大変長い時代をひつくるめて言うので、その極く古い方を旧石器時代と言い、それに次ぐ新しい方を新石器時代と言つて、時代を区分している。

現在の日野を中心とした地方に石器時代に人間が住んでいたことはつきりして、新石器時代は勿論のこと、旧石器時代にも人間が住んでいたことが、証明されている。例えば、現在お互が住んでいるこの日野に、人間生活のはじまつたのは、ずいぶん遠い昔だと言ふことができるわけである。

日野町で、この石器時代に人間が住んでいたところは、大体日野台の周辺である。そのうちでも、東光寺上、川辺堀之内の原村、黒川沿いの地、豊田駅の南方及び西方である。このあたりには、今から凡そ四千年も前から人間が住んでいて、そのころ人間が使つたと思われる石器や土器が沢山出ている。又その頃の住居の址も埋没していると考えられる。何千年も何万年も時がたつと、いつの間にか、住居址などは土にうずめられて、上から見ると全く、そこが住居址であつたことは、分らないようになるものである。こんなところから、歴史は地下にあるなどと言ふ言葉が生れたのであろう。

次に土器は、やはり石器時代の人たちの使つたもので、食糧を入れたり、あるいは、食物を調理するのに使つたりしたものだと考えられる、土を焼いて造つたものである。このあたりで発見される土器は、大きく分けて、縄文式土器と彌生式土器との二種類である。

縄文式土器とは、縄目の模様がついているところから名付けられたものであるが、初期のものには、模様のないものもある。この土器は、北は北海道から南は九州まで、ほとんど、日本全国にわたつて、発見され、比較的厚手で、

円筒形を基準として、かなり大形のものもある。最盛期のものには、独特の雄大な模様がいつて居り、原史時代の芸術品として、世界に誇るに足るものと称せられている。

彌生式土器は、縄文式土器よりも、色があかく、土の粒も細かく、焼く温度も高かつたらしく、土器としては、一段と進歩したものである。肉は薄く小形で、形はふくらみを持った壺形のものが多い。装飾も幾何模様を主として、あつさりしたもので、縄文式土器に較べると非常に優しい感じがする。この土器は西日本に発達したものであつて、関東地方には割合に少いのであるが、幸に、日野地方には縄文、彌生両式の遺跡が併存しているので、研究上まことに都合がよい。

さて、この石器時代の人々が、日野町附近に移住してきたのは、今から少くとも、数千年前であるが、彼等は、どんな生活をしていたであろうか。住居は浅く地を掘つて、周囲から柱を中心に向つて立て、結び合せ、これに草を、ふいて屋根と壁とを兼ねたようなものとし、出入口を一カ所造つた。床には、草を敷いたが、その下に河原の石を敷いたものもある。床の中央には炉を切つて、火をたいて暖をとつたり、炊事をしたりした。衣服は、獣の皮も着たりし、また粗末な織物も作つたらしい。

この時代の森林には、キジ、山鳥、イノシシ、シカなど鳥獣がたくさんすんでいたもので、これらを弓矢や、やりなどをを用いて狩りとつて食料とし、また、川や海にも魚貝が豊富にいたので、これも容易にとつて食べることができた。現在貝塚といつてゐる遺跡は、これらのごみを捨てた所で、この貝がらの積み重なつた中に、鳥・獣・魚の骨とか、器具の破片などが混つていて、研究上重要な資料が発見される。

縄文式の後期から彌生式の時代になると、よほど文化も進んで、単に自然物をとるばかりでなく、農業を行い、穀

物を栽培するようになったことが、はつきり分るような遺跡や遺物が発見されている。ここで、我等の考えることは、縄文式の文化を作つた人々が、現在の日本民族と血縁があるかどうかと言う問題である。これは、大変興味ある問題であるが、容易に解き難い学界のなぞである。彌生式の人達の方は、大体我々の先祖であろうと考えられている。

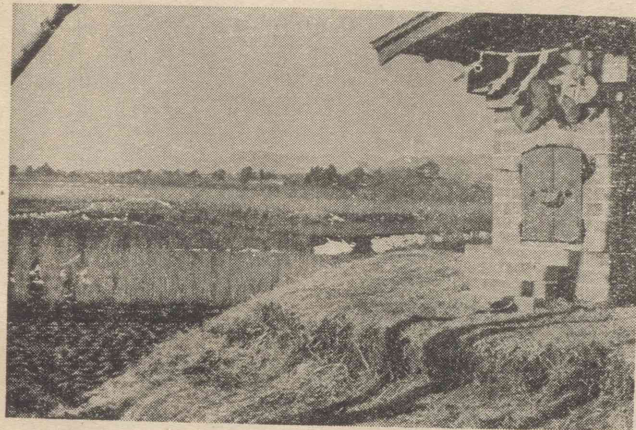
二、原史時代の日野

この時代は、ずつと時代が下つて、大和に日本の国家が形成され、中央政府が成立してから、京都に都が移るまでの間のことである。

この時代になると、大陸との交通も盛になつて、文化がおいおい高くなり、かすかながら文献による記録も見られるようになった。又この時代になつて、古墳ができたので、古墳時代とも呼ばれる。大和をはじめ、日本の中心地には、規模においてエジプトのピラミッドをしのぐ、まるで小山のような大きな古墳も営まれ、また、これらの古墳からの発掘品によつて、当時の文化が相当に高かつたことをしのぶことができる。

古墳は、土を盛り上げて、その中に死体を納めたものであるが、その墳丘の形から (一)円墳 (ボールを半分に分けて伏せたようなもの) (二)前方後円墳 (円墳の前に方形の墳をつけたようなもの) (三)方墳 (平面が正方形のもの) (四)上円下方墳 (方墳の上に円墳を重ねたもの) などに分けられる。この中、円墳は最も普通のもので、数は他のものよりはるかに多い。また前方後円墳は、これを横から見ると、ちょうど、ひょうたんを縦に切つて伏せたように見えるのでひょうたんとも呼ばれている。この形式は日本独特の発達をしたもので、貴族を葬つたものであるから、規模の雄大なものがある。

七ツ塚古墳群 東光寺上の七ツ塚はなお多数あつたのが整理されて七基となつたものと思われる。塚は高さ七尺、長さ十八尺、横十二尺位あつただろう。明治廿四年その中の二基を発掘した。錆びた鉄の直刀一尺五寸から二尺八寸



(七ツ塚古墳群) (前方になお数個見える)

位のものが五本出た。昭和二十九年六月日野町史談会が西端の一基を発掘、太刀一、刀子二、鉄鏃四本を得た。

七ツ塚の北方見晴のきく地域は、そこから石器土器が出るので、原住民の住居していたことがわかり、また前記七ツ塚を築いた一墳時代に於ける氏族の居住地であり、なお其後源平時代に日奉氏^{ひまかり}が西党の本拠^{じもと}として居館を構えたところである。

七ツ塚の他に、古墳と認められるものは、堀之内原村の南方字林際にあるもの、駒形前にあるもの、及び豊田の矢崎にあるものなどである。又、梵天山一帯にあるものは、横穴古墳で、山の中腹に、横穴を掘つて作つたもので、今でも穴の口が開いたままになっているのがある。

この古墳の存在することによつて、このあたりに、かなり人口がふえて、大和朝廷の勢力が強く及んで来たことがうかがわれるわけである。また、古墳の中には、死体にそえ



(昭和29年七ツ塚古墳の発掘)

て、埋められた色々のものがあり、これによつて相当高い文化を持っていたことが立証される。

この地方が、日本の一部をかたちづくるようになった時、武蔵国がたてられ、現在の府中市に国府をおき、国司が都から下つてきて、政治をするようになった。「続日本紀」によると、文武天皇の大宝三年に引田朝臣^{おし}祖父が武蔵の国司に任ぜられたと出ている。これが国史に初めて見える人である。

その頃、武蔵国には、二十一郡あつて、その中の多摩郡と言うのが、現在の多摩地方一帯であつたのである。

この時代の一つの特筆すべきことは、この頃朝鮮半島から沢山の人が武蔵国に移住して来たことである。これは、はつきり書物にもつており、又地名としても残っている。埼玉県の高麗郡というのは、朝鮮から移住してきた人達の一番沢山住んだところである。又多摩川下流の粕江なども、移民の村であつた。これ等の人は、織物を伝え、日本の文化の発展に大役を立つたのである。

今一つは、この時代に仏教が大変に盛んになつたことである。仏教はこの頃中央政府では、国の宗教とも言つてよいほどの信仰ぶりで、聖武天皇の頃が一番盛であつた。天皇は、日本全国に国分寺を置かれた。武蔵国は日本でも一番大きな国であつたから、国分寺も立派なものが出来た。今の国分寺町につくられたのである。大きな金堂、高い七

重塔などが完備して、大勢の僧侶たちは、国家鎮護のため朝夕続経し、鐘声は海のように広い武蔵野の末遠くまで響いていった。私たちの祖先も、参詣したことであらうし、宗教の大本山として、武蔵国の信仰を一堂に集めた徳のあつたところである。これもその後の戦争によつて灰じんに帰したが、その頃の信仰の中心地であつたことは忘れることのできない事である。

三、中世の日野

この時代は、都が奈良から京都に移り、政権は全く藤原氏の一門に帰し、そこにけいんたる文化の花が咲き乱れた。しかし中央の貴族たちは、政治を怠り、地方のことなど全くかえりみなかつた。国司は任用されても任地に下らず、ただ重い租税をとりたてるばかりであつたから、地方農民の生活は、都のはなやかなのに較べて、まことにあわれな状態であつた。

中央で藤原氏に圧迫されて、志を得ない人の中には、地方官になつて下り、任期が終つてもそのまま止まつて、広く土地を開拓して、莊園を開くものが多かつた。もともと関東は、蝦夷に接していたので、自ら武備に心を用い、また広い草原が多いので、名高い牧場があつて、ここで馬を飼ひ、騎馬戦に上達したから関東の人は武勇をもつて知られるようになった。それ故東国の男たちは大陸からの攻略に備えるため防人として召集され、九州まで派遣された程である。この武勇にすぐれた人々を家の子郎党とし、莊園の富を併せ持った豪族が各地にあらわれた。これが武士の起源である。中でも、天皇の一家から分れた平氏と源氏が最も大きな勢力をもつた。

武蔵国には、武威をふるつた武士団は、非常に数多かつたが、その中でも、秩父氏及び武蔵七党と世に称せられた

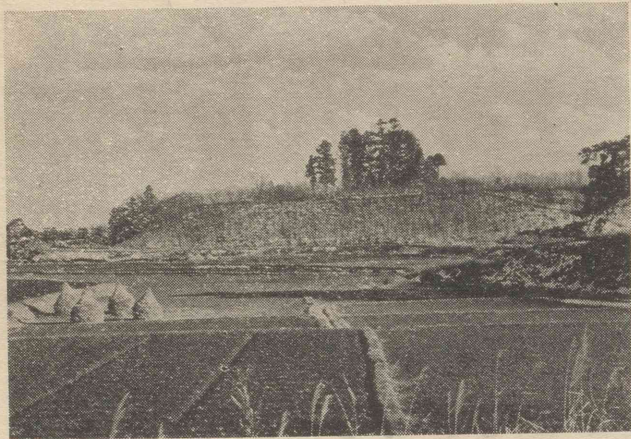
ものが名声が高かつた。七党の一つに西党がある。日奉連から出て、宗頼が武蔵守となつて下り、任満ちて土着したものである。その本拠は多摩川をはさんだ、百草・平山・関戸・日野・立川であつたが、日野が中心であつた。ここに我が郷土に一番関係の深い日奉氏について詳しく述べる。

武蔵七党 西党日奉氏 日奉氏は武蔵七党の雄、西党の首領

で、その祖先は、日奉宗頼である。宗頼は京都から武蔵国守として、国府に下つてきたものであるが、任期がすんでも京都に帰らず、土着したのである。

これは、単に宗頼に限つたことではないので、もともと、太化の改新以後は公民公地となつて、国民は土地を私有することは出来ないことになつていたけれども、これも、表面上のことです、新しく開墾した土地は、私有するようになって、次第に豪族が出来たのである。力の強いものが、弱いものを併合して、次第に強大になつていった。

日奉氏は、日野の土淵に居住して、次第に近隣を領有し、由井の牧や、小川の牧などを併せて、一大勢力となり、多くの一族郎党を養つていた。その一族は、多摩川沿岸の平山・百草・関戸・稲毛・立川・狛江・二宮・小川・平井から遠く神奈川県



(日奉城址) (お茶屋松より眺む)

の橘樹・都筑にまで及んでいた。

宗頼の子宗親は、保元平治の乱の後、平氏に従い、ついで、その長子宗忠は、源氏に属して、功労があつた。宗忠は西党の首領として、日野東光寺の上に居館を構え、一族を指図していた。この地は多摩川に臨み谷地川に接し、眼界遠く開けて最も景勝の地である。

源頼朝が鎌倉に幕府を開くに当つて、西党は挙つて頼朝に従い、その勳功を認められて次第に繁栄し、その支族を合せて、二十一家を数うるに至つたが、後に和田義盛が北条義時を排撃しようとした企てに参加したため、遂に義時のために亡ぼされた。そして、一族の中、義盛の挙にあづからなかつた平山・立川の二氏は、その後なお久しく栄えたが、足利氏の末に小田原の北条氏に属していたため、北条氏の滅亡と運命を共にした。

日野の名の起り 「日野」と言う名はどうしておこつたのであろうか。全国に「日野」と言う地名は随分多い。近いところでは品川区の国鉄五反田駅附近にも「日野」と言はれるところがある。さてこの名の起源については、色々の説があつて、はつきりしていないが、そのうちの二三をとつて説明しよう。

「武蔵名所図絵」によると、昔この地を多摩郡石津郷飛火野と呼んだとある。この「飛火」とは「のろし」のことで、非常の事態が起つた時に、通信の手段として用いられたものである。「のろし」と言うと、「ドン」と音をたてて、うちあげる花火の様に思われるかも知れないが、そんなものではなく、単に火をたいて、煙をあげるのである。一ヶ所に非常事変が起ると、先づその近くで火をたいて、煙をあげる。次のところではそれを見て、直ぐ火をたく、と言うように順次伝えて行くのである。従つて、どんなことが起つたと言うことは分らないので、何か分らないが、とにかく変事が起つたのだと言うことだけが分るのである。

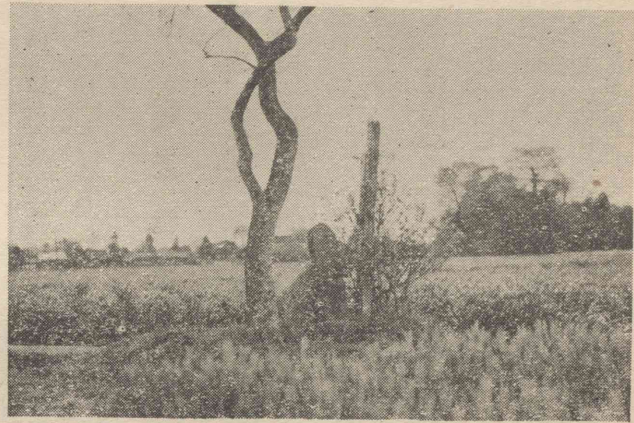
この日野の高台は、四方の眺めのよいところで、「のろし」をあげるのに適していたので、「のろし」の台が築かれていたことから、飛火野と言う地名がつき、その後和銅年間には、「火野」と改められ、次いで「日野」となつたのだと言う説である。

次の説は、「新編武蔵風土記」によると、応永三三年、日野中納言資頼の玄孫、宮内資忠が移り住んだので、「日野」と名付けたとも言はれている。又同書に、武蔵七党の中の西党の子孫、日奉宗頼が先祖をまつるために建てた鎮守を「日の宮」と呼んだことから日野という地名が生れたのだとも言はれている。

四、近世の日野

近世では、大体江戸時代のことについて記する。応仁の乱以来百年ばかりの間、日本中が強い者勝ちの戦国時代となつて、至る所大名小名が相争つていた。その頃、日野は小田原北条の支配をうけていたが、その一部将竹間加賀入道、福島右近、福島豊後守などが治めていた。その後小田原北条も亡んで八王子も亡び、同時に武蔵七党も亡んだ。その時亡んだ、竹間加賀の墓が薬王寺の南方田甫中に今猶残つている。町中に、この頃の残つて居るものの一つである。その後国内はようやく統一されるに至つた。早雲以来強豪を誇つていた小田原の北条氏も、秀吉の軍に包囲されては、たちまち亡びて、天正十八年八月一日、江戸の城は新たな主人として徳川家康を迎えることになつた。

慶長八年に、家康は將軍に任ぜられ、事実上天下の権を掌握したが、大阪の豊臣秀頼が亡びて後は、名実共に江戸は日本の政治の中心となつた。そして、日野地方は、幕府の直轄領、武士の知行地及び寺社領などに細かく分割された。



(竹間加賀入道の墓)

徳川幕府の隆盛と共に、江戸の城下も益々發達して、ついに享保年間(十八世紀のはじめ頃)には人口百万を越えて、世界第一の大都会となつた。幕府は江戸町奉行を置いて、江戸府内の政治を行い、府外の郡村は関東代官に支配させた。代官所は日本橋馬喰町にあつて、郡代屋敷と称えた。代官は行政権と警察権とを兼ね持ったものである。配下の村々には一領主毎に一人ずつの名主が選ばれ、その下に組頭及び百姓代があつてこれを補佐し、村内の事は一切責任を以つて、自治的に処理する権能を与えられていたので、その役目は重大であつた。

江戸時代は、封建制度が確立し、武士は治者、農工商は被治者と身分が動かすことの出来ぬものとなつてしまい、武士は絶対的權威をふるうようになつて、「家康遺訓百箇条」に

「士は民の司で、農工商の輩は士に対して、無礼を致す可からず、(中略)士に対して慮外いたす者は、士はこれを討つに

於て妨げず。」

といつてゐるのでも、その一般は知る事が出来よう。世の中が太平になつて、戦備の必要がなくなつても、彼等武士は以前のように、自ら農業を営まないで、完全な消費階級になつてしまつた。農民は生命をつなぐ食糧を生産す

るものとして、「農は国のもとなり」といい、商人や工人よりはつと重んぜられたが、「ごまの油と百姓は、しばればしほる程出るものなり」というような暴言をはいた人もあるように、四民六公あるいは五民五公といつて、生産の半分以上を租税として課せられ、その上何かと雑税や付加税が多かつた。そして滞納は絶対に許されないで、一般農民の生活はたいそう苦しいもので、とうてい文化的享樂など、考え及ばないところであつた。

このように、農民の生活はなかなか楽なものではなかつたが、日野地方は江戸に近く、交通も甲州街道によつて、割合に便利であつたから、肥料を得る便利もあり、また町の人を相手に蔬菜類や日用品などを売ることも出来たので他の地方に較べれば幾分とも恵まれていた。江戸幕府治下の太平の二百六十余年、平和な農村であつた日野地方は大きな盛衰もなく過ぎて来て、明治維新を迎へたのである。

江戸時代の郷土に特記すべきこととして、「日野農兵隊」「百姓一揆打払い」「新撰組の土方歳三」の三つを略記する。

日野農兵隊 江戸時代の終り頃、尊王攘夷といい佐幕討幕といい、人心のさわがしい折柄、代官江川太郎左衛門は管下に令して農兵を組織した。我が日野に於ても奉公の一念から、佐藤彦五郎等率先尽力、初め兵員三十人、後次第にふえて六十人となり操銃術の稽古を始めた。多摩川堤防内の芝原を演習地とし、普門寺、宝泉寺を習練場と呼び事務所とした。ここから河原に出て練兵又は射的を演習したのである。伊豆韭山の江川太郎左衛門は日野領の代官で、名主彦五郎は代官の御手附役柏木徳蔵又は御手代三浦剛蔵等を介して公用に仕え、精勤を認められ度々その揮毫にかかる詩書や絵画をもらつた。

此の農兵隊指揮者として、佐藤源之助と隣家佐藤隆之助(後ち信氏)兩名が之を勤め外にオランダ式操銃練兵術も

江川代官より春秋二回、長沢、妻田、太田の三教官が派遣され、共に教育に従事した。銃はゲーベル銃といい、八匁玉の元込めであつた。当時横浜から二十挺購入した新式なものであつたと言う。後官軍に分捕られ今唯一挺残つてゐる外に当時使用したシンヘル銃と言うのが二挺残つていたが、内一挺は日野小学校に寄贈した。

百姓一揆 日野には、かねて農兵隊が組織されて、万一の場合に備える役目をもち、相当の勢力であつた。日野の農兵が次第に整つて来た折柄、慶応二年六月十五日小宮村粟の須の井上忠左衛門から飛報が来た。「埼玉県秩父方面名栗谷戸から蜂起した百姓一揆、其先頭隊が今小宮村多摩川北岸に現はれて来た」と。時恰も江川代官の手附役増山蔵六が日野宿に出張中であつたので同氏に謀り、即刻農兵隊総動員六十人、かねて着馴れた筒袖だんぶくろ、撃剣組は二十余人、うしろ鉢巻、胴垂れ袴の腿立ち取つて、一斉武装、増山氏と彦五郎が之を統監し、丸に「の」の字の農兵旗を先頭に鱗がえし、北風豪雨の中をその築地河原目指して進軍した。

遙か西の方上平村下から同じく河原を指して二三十人の一隊が、築地渡船場に向け進んで来る。我が農兵は一步早くその渡船場に至り陣立をした。その隊は駒木野御所附きの番兵と其の地の剣鎗組で、防禦援助に出動して来たもので日野の鈴木金平氏が指揮者であつた。日野隊も大いに意を強くし交互氣勢を上げて、対岸の一揆集団に対して示威をした。彼方暴徒は蒔旗や紅白吹流數十本を押立て、法螺貝を吹き鉦太鼓を打ち鳴らし、鉦・鋤・鎌・鎗或は丸太を振りかざし、百鬼夜行の風体で虚勢を張る有様はなかなか凄まじい。

稍々あつて暴徒の二人が向う岸に出て水を呑んで居た。その時彦五郎は西に陣立てした駒木野隊へ打合せに行つて居て、之を指して貴隊にて彼等を狙撃して手練の程を見せて呉れと言つた。そこで二兵進み出て膝射に構え、川流數十間を距てた対岸の生きた人間の的をねらい打ちし、その第一弾は空しく、第二弾が命中し体をグルグル廻して転倒

したので東西両軍どつとときの声を挙げた。

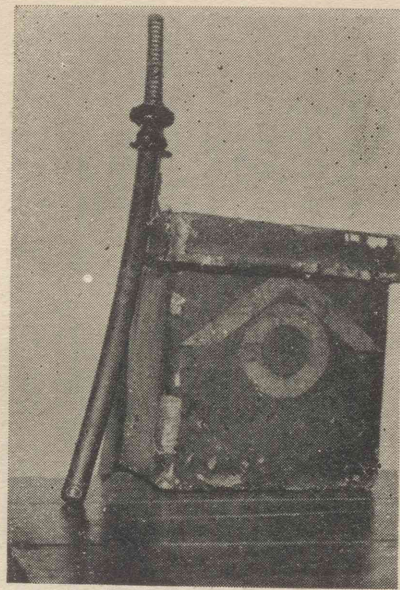
日野隊は粟の須忠左衛門の斡旋に依る同村よりの炊き出し握り飯のあばれ喰いに腹こしらえをし船二艘に分乗し、雨中敵前渡河をやつた。北岸に近付くや否や皆水中に飛び込んで堤下に迫る。農兵二隊に分れ、右小隊は隆之助の指揮、東に廻り堤上に登る。左半小隊は源之助が号令して正面堤下に肉薄、忽ち十字火の一斉射撃を開始した。暴徒は約二千名と言う大集団、彼等をはじめ嚇しの空鉄砲位に見て居たらしかつたが、仲間がばたりばかりと打倒れるのに驚いて堤上堤下混乱狼狽、総崩れとなつて逃げ出した。

中野村の中久という酒蔵家に至れば、門戸破壊、酒蔵の大樽は裁ち割られ酒は流れて庭に満々。福生村の重兵衛方を訪えば災害は更に残虐、表門は鋸引きにされて転倒、住宅建具はめちやめちや。進んで夕刻箱根崎村に至り、欲待を受けて一同旅舎に入つた。築地河原の捕虜六十余人は出張の代官役人に引渡した。

それから隊列を整え八王子宿に出た。暴徒二千の襲撃目標は八王子宿であつて、桑都の財宝を屠つた後、横浜を廻つて江戸に侵入するのだと叫んで居たという。されば全町挙つての大歓迎。名主川口氏は、砂糖水の大樽に用意して接待大いに努め、八王子市中を奪略の地獄より救つた義挙を感謝し且つ日野の勇武を賞讃して止まなかつた。

小憩の後農兵は例のピーヒャラドンドンの笛太鼓の行進で撃剣組も後につづいた。この時、凱旋将士の気持は、実に筆舌に尽し得ない得意の極みであつたという。

新撰組の副隊長土方歳三 幕末新撰組の参謀として、隊長近藤勇と共にその勇名を天下にとどろかせ、薩長の諸藩をして畏縮せしめた土方歳三は、日野町石田の産で、天保六年の生れである。彼は生るるに先だつ数月に父を失ない、また三才にして母に別れ、兄嘉六の手で養育せられた。



(土方歳三愛用の佩刀とつづら)
(函館五稜廓の陣中より小姓に托して
生家に届けたもの。つづらは若い頃剣
道修業しながら家伝の石田散葉を行商
した時に使ったもの)

十一才の時江戸の商家に丁稚奉公をしたが、やがて家に帰り、専ら文武に志し、天然理心流の剣法を学び、義兄、日野町佐藤俊正の道場に入出し近藤勇と兄弟の義を結び、共にその技を練磨した。資性沈着、大度あり、風格高く、頗る気概に富んでいた。年は勇より二年少く、身の丈五尺五寸眉目秀麗の偉丈夫であつた。

安政仮条約が幕府の独断で結ばれると、世は騒然となつて、尊王攘夷の声高く、その時將軍家茂、孝明天皇の詔を奉じて上洛したが、この時、幕府は新徴組を組織し、勇士を募つた。歳三は近藤勇等二百六十人と共にこれにに応じて、上京した。然るに幕府はやがて新徴組を解散して江戸に帰らしめた。

ところが、勇、歳三等は相謀つて、昨今志士と称する者大むね、みだりに勤王を唱へ暴行を恣にする。よつて我等は京都に留まつて輦下を警護せんと同志相携えて幕府に請うた。幕府はこれを許し改めて新撰組と称した。勇が隊長となり、歳三が副隊長となり、守護職松平容保の下にあつた。二人の威名は日に盛んとなり、新撰組に加盟するもの又甚だ多かつた。歳三は常に惟慤に謀をめぐらし、勇は外に戦つて、剛勇を以つて人を畏れしめた。厳に宮門を守護常に隠謀をさぐりいち早くその徒党を成敗する等数々の勳功をたてた。

後、伏見鳥羽の戦に幕軍敗るるや、慶喜等と共に海路江戸に帰つた。明治元年勇・歳三は甲州鎮撫隊に将として赴

甲州街道を行軍して日野の佐藤家に休憩した。この時佐藤俊正は、多数の青年が行を共にせん事を要請するや、遂に已み難く、その請を入れて、同志中より三十人を撰び一隊を組織し、春日隊と称して、甲州鎮撫に同行した。本町現住佐藤仁氏はその孫に當つてゐる。勝沼の一戦に敗れて、下総の流山に逃れ、勇が縛につくや、歳三は切齒兵を募り、下野に入り遂に北海道の五稜廓に榎本武揚と共に立籠つた。ここで官軍の大挙しての攻撃にあい、遂に馬上にたおれた。時に年三十五才であつた。

尙春日隊を組織した佐藤俊正は、難をのがれて日野に帰り、明治の維新となるや武をすてて文に就き、明治三年日野郷養を創設し、維新時代の子弟に教育を施した。その後學制の頒布せらるるや小学校を起し、第九代の区長となり、ついで南多摩郡初代の郡長となり郡政上多大の功勞があつた。

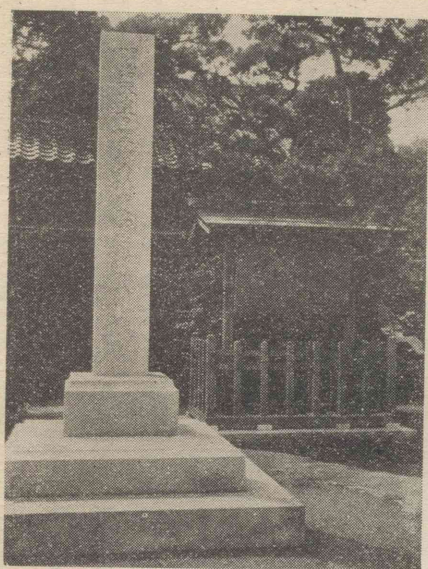
五、現代の日野

明治維新の大業が成つて、江戸は東京と改まり首都となつた。東京府の範圍は、大体今の特別区の広さであつた。明治の初め頃は、行政区画が度々変り神奈川縣、品川縣に所屬した時代もあつた。明治十一年多摩郡を東西南北に分けて、日野は南多摩郡の一村であつた。

幕末から明治の初めにかけては、甲州街道は、時代を反映して、何となくせわしく、物騒な空氣がみなぎり、飛脚や早かごが東へ西へ乱れとぶ有様であつた。当時日野は甲州街道に沿つて旅館十余軒、多摩川の渡船場をもつた街村であつたが、明治二十三年に至つて、甲武鉄道(今の中央線)が新宿から八王子まで開通するに及んで全く様相を一変するに至つた。かくて、次第に戸数も増加し、明治三十六年には、町制が施行せられて、現在に及んでいる。

明治天皇と日野 明治天皇は、明治十三年六月十六日、甲州路から木曾路を京都へ御巡幸の途次、強い雨の中を、お馬車で午後三時五十分日野の佐藤俊宜方へお着きになった。二時間半ほどお休みになつて八王子へ向い御出発になつたが、日野町民が、お顔を拝したのはこれが初めてであつた。

翌十四年二月二十日、かねて八王子、恩方方面で狩猟をなさつていた明治天皇は、この日連光寺へ向われ重ねて佐藤邸でお小休みされた。その時の御様子を児玉四郎翁著「お若き日の明治天皇」に次のように誌している。時に明治天皇は二十九才であらせられた。



(明治天皇御小休所)

二月二十日夜来の雪は、はれわたり、白皚々たる甲州街道を聖上は午前八時に八王子行在所御發轡、午前九時四十五分日野駅の佐藤俊宜氏宅にお着きになった。俊宜氏は、急の御駐轡に感激、表門の軒が低いので、路面を掘り下げ、御乗馬のまま御通りになれるように工作し、家族一同は台所に差控えてお迎え申上げた。玄關から奥座敷に通りになる足音が台所にいた家族の耳にまで響いたので、何ともいえない心強い気持ちになつて、目頭が熱くなつたという。

暫くすると山岡大書記官(鉄舟)が主人に「聖上にお酒を差上げる用意を」という。「お召料になるような上酒は土地にございませんが」と申上げると「イヤ地酒でよい。酒器も当家で使用しているものでよろしい」といわれた。

早速酒屋和泉屋(宇津木氏)から最上の地酒を取りよせて差上げた。しばらくすると御座所から聖上のお笑い声が聞えてきた。俊宜氏は、何が感興になつてか、または粗忽でもあつてのことかと案じながら、後で侍臣に伺つたところ「あれは襖の蜀山人の自画自賛の狂歌が御感に達つてお笑いになつたのだ」ということで、俊宜氏は思はぬ光榮に胸がおどつたとのことであつた。聖上は、ここから御愛馬金華山にお乗りになり、雪の残つた細い野路を連光寺へと向われたのである。

3 土地と地質

その土地の地質がどんなになつていのかと言うことは、第一に農業の上に大きな関係があり、又果樹や養鶏のようなことにも関係が深いのである。例えば、梨のような果樹は、多摩川べりのような、土地の下部に砂礫があつて上部も砂の多いところが、水はけがよくて、その梨の木の育つのに大変よい土質であり、又養鶏なども、やはり、多摩川沿岸のような水のはけのよいところが適するのである。

ところが、このような表土の下に直ぐ砂礫層があると、漏水過多によつて、塩基の溶解が見られ、夏頃までは、大変よく出来ているように見える水田が、秋になつて急に見おとりがしてくる場合もある。

第二には、大建築をするような場合にも、ずつと深く、土質の検査をして、下層部がどんなになつていのかを調べないと、あとで思はぬ失敗を招くことが多い。

さて現在では、日野台地は、標高百米前後のところにあり、又日野低地でも八十米の高さにあるが、大昔からこんな高いところにあつたのではない。何万年か前、地質学上、第三紀と言はれる時代には、日野町は全部海であつたの

である。従つて日野から北部及び東部は東京湾まで、ずつと海であつた。現在の北多摩から東京特別区は、全部海であつたことになる。

この頃は、日野からもつと上流も海であつて、大体、現在の八王子市と青梅市を結ぶ線まで海が入り込んでいた。これは、この地方の古墳や貝塚から、海でとれる貝類の多量に出てくることから容易に知られるところである。その頃にも多摩川はあつたので、関東山地の奥から流れ出た多摩川は、青梅、八王子の線で海に注いでいたのである。この多摩川は上流の関東山地から盛に土砂を運び、海岸に三角州を次ぎ次ぎに作つていつた。そして、川は自分で作つた三角州を浸蝕して、その前面に又一段と新しい三角州を作つて段々新陸地が出来たのである。

これと共に、見のがせないのは日本の太平洋岸は、常に土地が隆起していることである。これは現在でも、日々隆起しつづつあるので、百年や二百年では、目立たないが、何万年と重なると、はつきりとこれが分るのである。

この土砂の運搬と、土地の隆起とによつて次ぎ次ぎと新陸地が出来て、遂に現在のように東京湾のところまで陸地となつて、ここに東京都が生れ、世界で二番目と言うような大人口をもつた都市が発達したわけである。

そこで、又八王子、青梅の線に目を注ぐと、多摩川の土砂運搬と土地の隆起によつて、最初に出来た三角州のきれはしが、今日の加住丘陵である。南の方では多摩丘陵がそれである。日野台は、その頃に加住丘陵につづいて出来たものである。従つて、日野町全部は大昔は海であつたので、その時代の地質は現在の東京湾の海の中の地質と同じで、青色粘土から構成されている。これには化石を多く含んでいる。東京層と云う。

かくして、一応陸地になると、多摩川は次ぎ次ぎと土砂を運んでくる。それが沈積して砂礫粘土を含んだ層が出来た。これを成田層と言うが、相当の厚さである。これには貝殻やさんごの化石などが含まれている。

次にその上にローム層が出来た。これは、赤土と称するもので、日野町も台地では六米から十米位いの厚さで被われている。これは西は富士・箱根、北は榛名・妙義・浅間などの大火山から噴出した灰が積つて出来た層である。これは現在では一寸想像しても理解に苦しむことであるが、何万年か前にこれらの火山は大活動をしたもので、現在のこれらの山も其の時に出来たものであらうし、遠い関東地方を何米と言う厚さに灰で被つてしまつたのである。尤も、日野地方では厚い層になつてゐるが、東に進むにつれて段々薄くなり、東京都の北の方では二三米のところもある。今はこれらの火山は殆んど活動をやめてゐるが、それでも浅間山などが一寸噴火が甚しくなると、東京の家の屋根が灰で真白になることがあるのは、珍しいことではない。このローム層は、塩基性の安山岩に属する火山灰である。

このローム層の上に、何万年かの間に、埴土質の部分が堆積している。これは、黒土と言つてもよく、腐植含有量も多く、従つて養分保有量は概して豊富である。

以上は、日野町の地質を下の方から順序にその成因によつて記したものであるが、しかしどこも、以上述べたように規則的にきちんと層をなしているわけではない。それは、土地の出来る迄に永い年月を経ているので、これ等に入りまじつて不整合に重なり合ひ、ところによると赤土のローム層が上の方まであるところもあれば、その間に砂礫の混じつてゐるところもあると言うわけである。特に多摩川に沿つた低地の部分は数年に一度は必ず大洪水に見舞われていたことであらうから、これらの層の間に、又砂礫が入りまじつたり、複雑な地質になつてゐる。然し、大体から言うと、一番上は、黒土壌土で、その下にローム層の赤土があり、その下に砂礫層があると言うのが、標準となつてゐる。

これで日野町の地質について、一応の成因を述べたわけであるが、この地質も、決して全部が同じ標準で出来たわ

けではなく、長い間には隆起しつつある地盤が、急に或る部分が陥没することもある。そうすると河川や低地をつたつて、海水が浸入してくることになる。現在でも低地の方々に貝殻の層があらわれているのは、この時代に出来たものである。浅川平山橋の北岸にこの層が露出しているのは、この好例である。

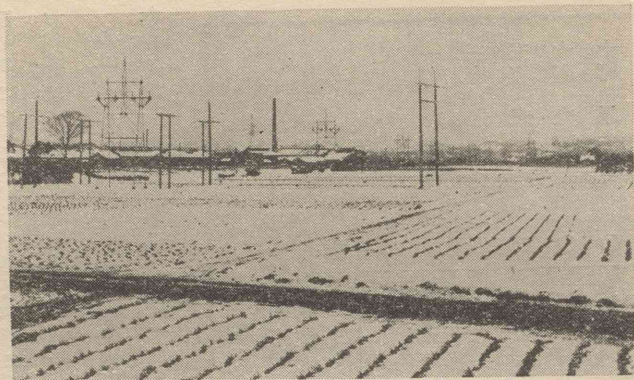
一度陥没した地盤も又或る時期になると上昇してくる。現在多摩川、浅川の沿岸に存在する段丘は、この運動のために出来たもので、日野段丘、或は南部豊田駅附近を境として出来ている二重段丘は、その好例である。

土地利用の現況 さて、日野町は約壱千町歩近い広さをもっているが、これが現在どのように利用されているかを調べて見ると次のようになっている。(昭和二十九年年度税務課調)

宅地	五五一、三九一坪五、七勾
畑	二六三町二反九畝 九坪
田	三八〇町四反五畝二七坪
山林	九九町七反三畝二一坪
原野	七町四反七畝二二坪
雑種地	八町六反九畝〇一坪
沼地	三反〇畝二一坪

これを見ると、我が日野町の土地は、極度によく利用されていると言つて過言でない。田畑及び宅地として、殆んど九割近く利用され僅に一割余が山林・原野・雑種地等となつてゐる。従来の農業本位の形態から言へば、山林原野が少ないこととなり、農業には、必ず山林原野が必要なのであるが、現在のように、日野町が工業都市として発展し、又将来この方面での発展が望まれる以上は、最早理想的な農業経営の方式は、幾分変態のものとなつても已むを得ない

こととなる。



(日野台の遠望)

尚、首都の衛星都市として、本町は将来必ず大発展をなすべきことを期待するものである。

農地改革 農地改革は第二次大戦後世界各国で行はれたもので、日本でも民主化の基礎として終戦後いち早く取上げられた。即ち昭和二十年十二月九日のGHQ指令に基づき、政府は同年十二月二十八日「農地調整法」を改正してこれを法制化した。それは全国平均五町歩以上の小作地解放、小作料金納化等を主たる内容とし、いわゆる第一次農地改革案といわれるものである。然し乍ら当時の情勢は此の程度の改革では満足せず、やがて第二次農地改革が実施された。その法制化は、昭和二十二年十月二十一日の再度の農地調整法の改正、及び自作農創設特別措置法であり、その内容は第一次案の五町歩の保有限度が一町歩に切下げられ、小作料はただ金納一本となつたのみならず、その最高限度の決定を見る等、より進歩的性格を有するものであつて、第二次案では二百万町歩の小作地を二年間で自作地化することになった。この解放予定地は、計画通り二十二年二十三年の両

年にほぼその解決を完了し、又残された小作地においても、その実質小作料は五十%から一%に引下げられた。この第二次農地改革は農地委員会の手によつて行はれ、農業協同組合設立と相まつて、わが国農村の民主化に大きな成果

をもたらした。

しかし乍らこの農地改革が唯一の原因ではないが、ただでも零細な日本の経営面積が改革後一層零細化しこの点今日問題になつてゐる。さて本町に於てもいち早く農地改革に着手し大体二十四・五年頃、その殆んどを完了し現在なお部分的に問題を残している個所もあるが、先づ完了したといえるであらう。

今日野町に於ける改革前の農地所有状態を表示すれば左の如くである。なお対比的に改革後の現在農地の所有状態を自作地及小作地別にかかげて見る。

改革前の耕作地の所有状況					
	地主不在所有面積		地主在住所有面積		自作者所有面積
	戸数	町反畝歩	戸数	町反畝歩	
五反未満	一九二	三四、七、一、二	一〇	二、一、〇、〇	五六
一町未満	三六	一七、六、四、一六	一一	八、一、三、〇	六六
三町未満	一〇	一五、五、九、八	二七	七九、一、六、〇	四三
五町未満	五	一六、四、三、四	一九	三七、九、六、〇	一
十町未満	〇		六	三七、九、六、〇	〇
十町以上	〇		四	八一、五、〇、〇	〇
合計	二四三	八四、三、八、〇	七七	二四六、八、一、〇	一六六
					一三七、六、七、〇

改革後の耕作地の所有状況			
	自作地面積		小作地面積
	戸数	町反畝歩	町反畝歩
三反未満		一一町二反六畝四歩	一〇町七反六畝一歩
五反未満		三〇、九、一、二	七、七、六、一
一町未満		一四二、四、四、七	二六、八、八、一九
一町五反未満		一五八、六、二、一八	二二、八、五、一四
二町未満		五八、一、一、一	三、九、七、一六
合計		四〇二、一、一、一	七二、二、三、二一

この表の通り改革前は、自作者所有面積が一三七町六反七畝であつたのが、改革後は四〇二町一反一畝歩となり、自作面積が二倍半に増加している。改革前は耕地総面積の約三分の一が自作地であり、残りの三分の二が小作地であつた。それが改革後に於ては八割五分までが自作地となり、残り一割五分が小作地となつた。

耕作地面積別	農家戸数
五反未満	一六〇
三反以上 五反未満	九三
五反以上 一町未満	二一九
一町以上 一町五反未満	一六八
一、五町以上 二町未満	三八
二町以上 三町未満	二
計	六八〇

このようにして本町に於ても自作農創設特別措置法に依る目的に沿ひ耕作者の地位を安定しその労働の成果を公正に享受させるため、自作農を急速且つ広汎に創設し、又土地の農業上の利用を増進し、以て農業生活力の発展と農村に於ける民主的傾向の促進を図るを目的とする精神に

合するものである。次に耕作地面積別農家戸数を見ると上の様になつてゐる。

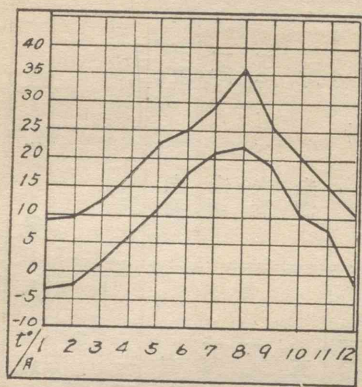
4 気 象

(一) 気温 日野町に於ける気温を調べて見ると一年を通じて一番低い気温を示すのが一月二月であり、いちばん高いのが八月である。

一月二十一日は大寒の入であり、八月八日は立秋である。立秋から以後を「秋」と云う事になり、その後の暑さを残暑といっているが、立秋は関東地方では暑さの盛りである。

日野町の気温をグラフに示すと八月に最高気温を示し、最低は一月を指している。次に昭和二八年度に於ける月別最高温度最低温度図表をかかげて見る。

月別気温表二八年度 (最高最低)



(農林省蚕糸試験場日野桑園調)

(二) 降雨

降雨に付いては、昭和二八年度に於ては最低雨量を示した月は一月で最高が十月であつたが統計的に見ると、降雨量は年に依つてかなりの変動があるが、九月十月が最も多くそれについて六月となつてゐる。次に二八年度に於ける月別降水量を図に書いて見る。

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
降水量	三六・七	五八・四	四一・〇	二九・七	二二・〇	二四・四	一〇・五	一九・二	二五・〇	一四・二	六・九	六・九

(三) 霜

霜の下りるのは大体十一月初旬から中旬にかけて初霜があり

一九年	二〇年	二一年	二二年	二三年	二四年	二五年	二六年	二七年	二八年	二九年
二月三日	二月九日	十月九日	二月三日	二月六日	三月七日	二月六日	二月九日	二月二日	二月八日	二月三日

此の様に十一月中が一番多いことが判る。これ等霜の降りる時期を知る事は農作物に対する霜害防止に大いに役立つことである。

5 人 口

日野町の人口は、ここ十五年余りの間に非常に増加し概数式万人となつた。もともと、日野町は農村であつたので、明治、大正、昭和十五年頃までは、大体五六千人であつた。然るに昭和十六年頃から急激に増加して、十六年には、壱万二千人となり、年々減ることはなく遂に現在概数式万人となつたのである。

このようにここ十五年の間に急激に人口の増加した理由は、言うまでもなく、日野町の工業の発達と密接な関係があるので、日野町は全く、近代工業都市として成長したわけである。

明治、大正時代までは、国道に沿つた市街地的住宅が最も人口の多いと



(日野駅東方国道沿い)



(日野山の住宅街に出来た日用品店)



(住宅つぎとなつた東光寺八丁田甫)
(右手近くにあるのが藤野製パン工場中央のが七和精機工場である)

ころであつたが、昭和の中頃からは、新興住宅地として、日野台、万願荘、豊田荘その他会社の住宅地等に集中的に大部落が出来て、人口の分布状態が昔と違つてきた。特にこれから新興住宅地に住む人は、大部分は他府県から移つて来た人や本籍を他府県において、住所だけを日野町に移した人々であつて、我が町の工業に力を尽される人々である。

現在、本町で職業を持つて居る人々の数は、凡そ六千九百人であるが、これを職業別に見ると、農業従事者は一、八四一人で大体二七％に當つて居る。工業従事者及びその他の労務者、サラリーマンは、四、一六二人となつて居つて、全体の六〇％に當る。又商業従事者は、五三七人で約八％に當つて居る。

第二 行政

1 行政の沿革

古昔多摩郡石津郷飛火野と称し、和銅年間日野本郷と改称したという。平安朝の中頃、日奉宗頼が武蔵守として下向し、府中に在つて国司の任に就いたが、任期満ちた後も帰京することなくして土着し、郷内土淵の地に住し近郷を支配した。これが日奉氏である。組織だつた行政の最初とも考へてよからう。日奉氏はつぎつぎに子孫がこの土地を支配して、四百年間鎌倉幕府の中頃までに及んだ。

それから、北条氏の支配を受け、次いで足利氏の支配の下にあつた。室町時代の中頃になつて小田原北条氏が関東を領するようになつては、又その支配下にあつた。徳川時代になつてからは、この土地を支配した人々のことも、はつきりして来る。寛永十四年徳川氏代官近山与左衛門、高室四郎左衛門検地して高二千二百二十五石二斗五升三合とした。

貞享元年五月幕府の老中阿部豊後守の命に依り近郷三十八ヶ村を伝馬組合とした。よつて俗に之を日野領と称した。享保十九年高倉野秣場を開墾し、代官上坂安右衛門之を検地して七十九石六升八合とし、以後田口五郎左衛門、川崎平右衛門、野田文蔵、江川太郎左衛門相次で代官として支配した事は新編武蔵風土記稿にも記されている。

明治維新廢藩置縣の制度により多摩郡の地は明治元年一旦品川及韭山の二縣に分属したが明治四年神奈川縣の所轄

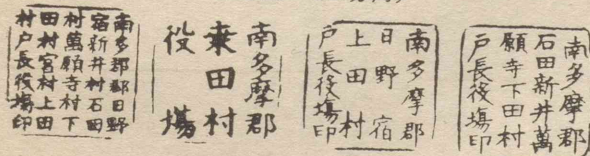
となつた。

明治十一年十一月多摩郡を分割し東西南北四郡となるに及び南多摩郡下に入り、日野宿と称した。
明治十七年七月当宿及宮、上田、新井、石田、万願寺を合せ戸長役場を置いた。明治二十六年四月所謂三多摩が東京府に移管せられた時当宿は他と分離して日野町と称し、他六ヶ村は豊田を合せて桑田村と称した。
越えて明治三十四年四月一日、桑田村を合し現日野町を形成して今日に至つた。

2 歴代戸長・町長

(就 職)	(退 職)	(戸長・町長氏名)
明治五年 九年八月		佐藤 彦右衛門
" 十一年		佐藤 信三
" 十二年		佐藤 俊宜
" 十四年		佐藤 民宜
" 十六年		天野 清助
" 十七年八月		石川 昌男
" 二十五年四月		中村 弥一郎
" 三十三年七月		有山 伝之助
" 三十三年十月		日野 義彦
" 三十九年五月		齊藤 文太郎
" 三十九年十二月二十七日		佐藤 信民
	明治三十九年四月一日	
	大正五年一月十二日	

(日野町行政の変遷を示す戸長役場の印)
(大きさ約一寸五分角)



3 歴代助役

(就 職 年 月 日)	(退 職 年 月 日)	(助 役 氏 名)	(備 考)
大正五年一月二十九日	大正九年一月二十八日	天野 清	五期満期
大正九年二月二十二日	大正十年一月二十九日	佐藤 仁	死亡
大正十年三月八日	大正十四年三月七日	齊藤 文太郎	五期満期
大正十四年三月八日	昭和二十年三月七日	有山 亮	五期満期
昭和二十年五月三日	昭和二十一年四月二十三日	古谷 剛次郎	町長当選に依る
昭和二十一年七月十日	昭和二十二年四月四日	古谷 剛次郎	町長当選に依る
昭和二十二年四月五日	昭和二十三年六月三日	渡辺 栄年	依願退職
昭和二十三年八月二日	昭和二十六年三月二十九日	古谷 次郎	依願退職
昭和二十六年五月十日	現在	齊藤 次郎	依願退職
明治三十四年六月二十九日	大正十年三月七日	齊藤 文太郎	五期満期
大正十年十一月十六日	大正十四年二月十九日	古谷 太助	死亡
大正十四年四月二十二日	昭和十七年九月十二日	土方 賢一	五期満期
昭和十七年十一月七日	昭和二十年五月二日	古谷 剛次郎	町長当選に依る
昭和二十年五月十一日	昭和二十一年七月十五日	古谷 良次	依願退職
昭和二十一年八月一日	昭和二十二年四月五日	中島 年	町長当選に依る
昭和二十二年五月十四日	昭和二十三年八月三日	渡辺 義	依願退職
昭和二十三年八月二十六日	昭和二十六年六月十一日	平島 秋	依願退職
昭和二十六年六月十二日	昭和二十七年五月十四日	須藤 準一	依願退職

4 歴代収入役

(就職年月日)	(退職年月日)	(収入役氏名)	(備考)
明治二十四年六月二十九日	大正二年六月二十九日	佐藤 大助	三期満期
大正二年六月三十日	大正九年二月六日	佐藤 仁	二期満期
大正九年六月二十一日	大正十年十月二十六日	中島 四郎	依願退職
大正十年十一月七日	大正十四年二月二十六日	有山 亮	町長当選に依る
大正十四年七月二十八日	昭和二十年七月二十七日	土方 謹一郎	五期満期
昭和二十年七月二十八日	昭和二十一年七月十五日	佐藤 京次郎	依願退職
昭和二十一年七月十六日	昭和二十二年三月三十一日	土方 実	依願退職
昭和二十二年八月一日	昭和二十七年四月十四日	榎本 英次	依願退職
昭和二十七年十一月二十七日	現在	古谷 良次	

5 歴代町議会議長同副議長

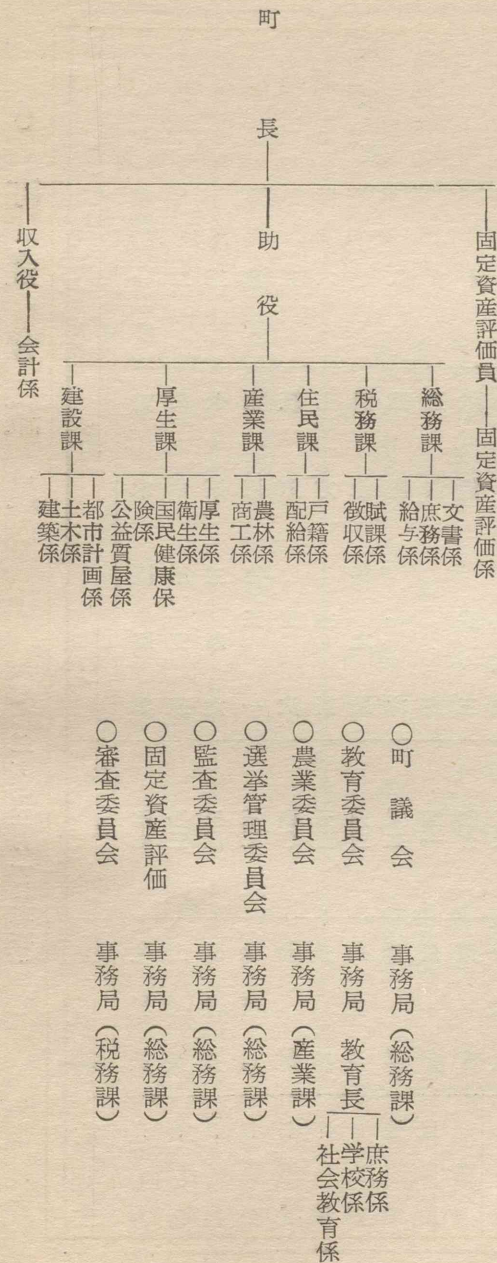
選挙年度	区分	(就職年月日)	(退職年月日)	(議長名)	(副議長名)
昭和二十一年		昭和二十一年十二月四日	昭和二十二年四月二十九日	生沼 久作	土方 彦太郎
昭和二十二年		昭和二十二年五月九日	昭和二十六年四月二十二日	山崎 亮一	清水 祿之助
昭和二十六年		昭和二十六年五月十六日	昭和二十八年二月二十六日	滝瀬 武三	出口 祿之助
"		昭和二十八年二月二十七日	現在	安西 信	清水 祿之助

6 町議會議員

(昭和三十年三月一日現在)

(職名)	(議席番)	(氏名)	(年齢)	(職業)	(住所大字)
議長	第一番	荒田 中木	四七	会員	日野
副議長	第二番	永田 原	四三	会員	日野
	第三番	桑原 正	三四	会員	日野
	第四番	萩原 計次	三三	会員	日野
	第五番	清水 主	四〇	会員	日野
	第六番	遠藤 一之	四三	会員	日野
	第七番	遠藤 壽	四二	会員	日野
	第八番	瀨藤 三	四一	会員	日野
	第九番	宮山 武	三八	会員	日野
	第十番	安西 梅	五五	会員	日野
	第十一番	篠崎 雅	五五	会員	日野
	第十二番	天野 弥	五八	会員	日野
	第十三番	山崎 亮	五四	会員	日野
	第十四番	馬場 末	四七	会員	日野
	第十五番	出谷 久	四八	会員	日野
	第十六番	吉雄 一	四三	会員	日野

二十 十六	二十 十五	二十 十四	二十 十三	二十 十二	二十 十一	二十
阿 川	立 川	阿 部	平 部	欠	三 浦	高 橋
石 治	正 次	忠 男	信 吉	員	重 春	春 吉
六 一	五 一	四 一	四 六		三 七	四 二
農 業	農 業	會 員	農 業		經 理	會 社
堀 之 内	日 野	日 野	新 井		日 野	豐 田



合 計		消 防 署	計	農 業 委 員 會	教 育 委 員 會	公 益 質 屋	各 出 張 所	建 設 課	厚 生 課	產 業 課	住 民 課	稅 務 課	總 務 課	課 名
三〇			三〇	一	一		二		五	三	六	七	五	(事務吏員)
五			五					三		二				(技術吏員)
一五	一五													(消防吏員)
三三	一		三一			四	一	五	七	四	一	七	二	(雇員)
一一			一一		九								二	(傭人)
四			四			二		一		一				(囑託)
九七	一六		八一	一	四	二	三	九	一	二	一〇	七	一四九	(計)

職名	氏名	年 齡	住 所
町長	齊 野	四 九	日 野
助役	古 谷	五 二	日 野
収入役	賢 一	六 七	日 野
固定資産 評価員			

10 選舉管理委員

職名	区分	氏名	職業	住所
委員長	土方	賢一	公吏	日豐日
委員	大貫	作賢	農業	野田野
同員	小島	安藏	洋品雜貨販売業	

11 監査委員

職名	区分	選出区域	氏名	住所
監査委員		學識経験者有資格者より選出せるもの 町議會議員より選出せるもの	後藤泰	日野
"			三浦重春	日野

12 教育委員

職名	氏名	年齢(二九年)	住所
委員長	天山野	五五	日豐日
副委員長	瀧瀬内	五四	日野
委員	谷口	五四	日野
委員	梅喜重	五九	日野
委員	雄夫	五〇	日野
委員	敬滋	二	日野

13 農業委員

職名	氏名	年齢(二九年)	住所
委員長	渡平	五五	上新田
副委員長	井高	二五	日下
委員	上野	五五	宮日
委員	佐藤	五五	日豐
委員	谷水	四八	日豐
委員	清川	四八	日豐
委員	立川	四八	日豐
委員	阿平	四四	新堀
委員	内藤	五五	萬願寺
委員	遠藤	五五	豐田
委員	井上	五五	豐田
委員	天木	五五	豐田
委員	岩川	五五	豐田
委員	古川	五五	豐田
委員	古川	五五	豐田
委員	落合	五五	豐田
委員	奧住	五五	豐田

教	建	產	住	厚	稅	總
育	設	業	民	生	務	務
課	課	課	課	課	課	課
長	長	長	長	長	長	長
本	市	石	竹	立	小	杉
川	井	內	川	林	浦	
田						
	晴	顯	深	俊	仲	俊
					太	
弘	夫	信	敬	雄	郎	裕

(日野町役場豊田出張所)
(消防署派出所併置)

(二九、一一現在)

— 57 —

第三 財 政

1 町財政の膨脹

本町の財政は、従来は急激な変化を示すことなく、ゆるやかな増加を見せていた。ところが昭和十五年度から急に増大し、更に大戦後は一層の膨脹を告ぐることになった。

この増大は、人口の増加と諸工場の設立による課税の対象倍加によるの外貨幣価値の低下に伴う物価騰貴によるものである。

支出の面では、行政、教育、社会施設、警察消防、土木等の経費増加が認められる。

次にかかげた累年日野町歳入出予算について見ると、明治二十年頃は僅かに二千円程度の町経済であつたが、明治三十四年日野桑田合併の年の予算は町の予算及び日野尋常高等小学校及下田、豊田各尋常小学校別の予算が組まれてあり、又四月より六月まで、七月より翌三月までと分割して議決されていた。明治三十五年度は校舎増築等の臨時費も含めて四千七百六十一円三十四銭とあり内三小学校費合計は二千四百十六円五十四銭で町予算の半額以上を占めている。明治四十年には六千円、四十五年には、一万円を超え、大正五年には一万数千円、大正十年には約三万円、大正十五年は四万四千円となり昭和十年まではその程度で落付いた（これはその間不景気が続き緊縮財政が叫ばれ実行されたからである）がそれよりは毎年一万円前後増額しつつ昭和十五年には遂に十万円と上昇した。（昭和十五年二

月優良納税町村として都より表彰）

それ以後大東亜戦争による諸物価の上昇並びに、終戦後の急激なインフレに伴い、本町財政の膨脹著しく二十九年度に於ける歳入出予算は実に一億円を突破するに至つた。

日野町歳入出経費比較（大体五年毎の数字をあげた）

(年 度)	(常 経 額)	(臨 時 費)	(計)
明治二十年度	二、〇〇〇円		
三十五年度	四、七六一		
四十 年度	五、六二二		
四十五年度	一一〇、八六一		
大正 五年度	一二、〇〇〇		
大正 十 年度	二九、六三〇		
大正 十五年度	四四、〇〇〇		
昭和 五年度	四四、五三九		
十 年度	四四、五七三		
十二年度	四三、〇四八	一八、二二三円	六一、二七一円
十三年度	八七、八一七	八、七九二	九六、六一〇
十四年度	五六、〇九三	六、五一七	六二、六一一
十五年度	九〇、九二一	七、五八三	九八、五〇四
十六年度	一一〇、九二二	七九、〇〇六	一八七、九二八
十七年度	七六、〇四四	二四九、一九四	三二五、二三八
十八年度 (予算)	一一、六四〇	二二六、五二〇	三三八、一六〇

(歳 出)		(本年度予算)
(款 項)		
1 議 会 費		2,400.500
(1) 町 会 議 費		2,400.500
2 役 場 費		53,731.220
(1) 役 場 職 員 費		8,194.220
(2) 營 繕 費		40.000
(3) 諸 費		1,497.000
(4) 新 庁 舎 建 設 費		34,000.000
3 警 察 消 防 費		8,371.760
(1) 消 防 委 員 会 費		43.400
(2) 消 防 費		8,328.360
4 土 木 費		4,500.000
(1) 道 路 橋 梁 費		4,491.900
(2) 区 画 整 理 費		8.100
5 教 育 費		21,277.990
(1) 教 育 委 員 会 費		4,424.100
(2) 日 野 小 学 校 費		2,033.140
(3) 豊 田 小 学 校 費		1,255.500
(4) 日 野 台 小 学 校 費		1,387.170
(5) 日 野 第 一 中 学 校 費		1,817.620
(6) 日 野 第 二 中 学 校 費		848.060
(7) 社 会 教 育 費		912.400
(8) 日 野 第 二 中 学 校 増 築 費		8,600.000
6 社 会 及 勞 働 施 設 費		1,251.550
(1) 民 生 委 員 会 費		215.200
(2) 児 童 福 祉 費		765.000
(3) 児 童 遊 園 費		104.350
(4) 生 活 改 善 指 導 費		17.000
(5) 貸 付 金		50.000
(6) 遺 家 族 援 護 及 調 査 費		90.000
7. 保 健 衛 生 費		4,051.000
(1) 伝 染 病 予 防 費		762.500
(2) 予 防 接 種 費		100.000
(3) 昆 虫 駆 除 費		474.500
(4) 結 核 予 防 費		66.400
(5) 墓 地 費		5.000
(6) 共 立 病 院 費		400.000

(歳 入)		(本年度予算)
(款 項)		
1. 町 税		82,964.880
(1) 法 定 普 通 税		82,922.280
(2) 旧 法 に よ る 税		42.600
2. 地 方 財 政 平 衡 交 付 金		1.000
(1) 地 方 財 政 平 衡 交 付 金		1.000
3. 公 営 企 業 及 財 産 収 入		1.550
(1) 公 営 企 業 及 財 産 収 入		1.550
4. 使 用 料 及 手 数 料		1,604.500
(1) 使 用 料		104.500
(2) 手 数 料		1,500.000
5. 国 庫 支 出 金		1,365.000
(1) 国 庫 負 担 金		750.000
(2) 国 庫 補 助 金		615.000
6. 都 支 出 金		778.500
(1) 都 負 担 金		316.000
(1) 都 補 助 金		416.500
(3) 都 交 付 金		1.000
7. 寄 付 金		300
(1) 寄 付 金		300
8. 繰 入 金		15,595.100
(1) 特 別 会 計 繰 入 金		100
(2) 財 産 金 繰 入		15,595.000
9. 繰 越 金		1,000.000
(1) 前 年 度 繰 越 金		1,000.000
(2) 物 品 売 払 代 金		1.000
(3) 繰 替 金 戻 入		6.000
(4) 雑 入		282.000
10. 町 債		300.000
(1) 町 債		300.000
歳 入 合 計		106,652.830

2 昭和二十九年歳出歳入予算

町有建物は、従来役場庁舎、小学校、豊田分教場、下田分教場其の他二三のもので約八百坪ばかりだったものが、昭和十五年頃より戦後の期間に於ける急激な社会情勢の変化及人口増加に伴い、日野小学校、豊田小学校、日野台小学校、消防署、教員住宅、第二中学校等の増築或は新設があり、町有建築物は激増し之を建物別に記せば次の如くなっている。

3 町有財産

建物	(名 称)	(坪 数)	(評 価 額)	(名 称)	(坪 数)	(評 価 額)
町役場庁舎	第一日野中学校	四五六、八五	二五、〇〇〇、〇〇〇	川原教員住宅	五八、七五	三八七、七五〇
第一日野中学校	第二日野中学校	七四六、六三	五七二七、一〇九	火 葬 場	一一、二五	五〇、六二五
第二日野中学校	日野小学校	五〇〇、〇〇	一一、九八〇、〇〇〇	下田教員住宅	二二、五〇	一四二、五〇〇
日野小学校	日野台小学校	八五〇、四九	一〇、七一一、一七四	消防豊田分署	一八、〇〇	一七三、四〇〇
日野台小学校	豊田小学校	四二〇、七六	四、七一一、五二二	公益 質 屋	二四、五〇	二五一、一〇〇
豊田小学校	豊田分 校	二七二、九五	二、九四七、八六〇	豊田小学校新校舎	二七六、〇〇	五五二〇、〇〇〇
豊田分 校	日野町消防署	七二、二五	二六〇、一〇〇	豊田小学校新校舎	二七二、〇〇	六七八〇、〇〇〇
日野町消防署	下田分 校	三八、五〇	四三三、一二五	日野台出張所	三三、八一	九五〇、〇〇〇
下田分 校	西町教員住宅	一一三、七五	一、〇六二、一八七	下田小学校校舎	二八八、一五	九、五〇〇、〇〇〇
西町教員住宅		三三、〇〇	一五三、六〇〇			
土地						
第一日野中学校	(名 称)	(坪 数)	(評 価 額)	日野小学校	(名 称)	(坪 数)
		一一、一七七、〇〇	五八八、五〇〇			五、九六二、〇〇
						一七七七、八〇〇

(款 項)	(本年度予算)
(7) 汚 物 掃 除 費	2,242.600
8. 産 業 経 済 費	2,378.530
(1) 農 業 委 員 会 費	799.430
(2) 農 林 生 産 増 強 費	907.600
(3) 商 工 奨 励 費	190.000
(4) 主 要 食 糧 配 給 調 査 費	16.000
(5) 失 業 対 策 費	420.500
9. 財 産 費	40.550
(1) 基 本 財 産 造 成 費	550
(2) 財 産 管 理 費	40.000
10. 統 計 調 査 費	104.500
(1) 農 林 統 計 調 査 費	21.000
(2) 商 業 調 査 費	10.500
(3) 学 事 統 計 調 査 費	7.000
(4) 工 業 調 査 費	8.000
(5) 住 民 登 録 調 査 費	58.000
11. 選 挙 費	311.300
(1) 選 挙 管 理 委 員 会 費	172.400
(2) 選 挙 人 名 簿 調 査 費	63.000
(3) 常 時 啓 発 費	29.000
(4) 農 業 委 員 会 委 員 選 挙 費	46.900
12. 公 債 費	960.130
(1) 元 利 償 還 金	760.130
(2) 一 時 借 入 金 利 子	200.000
13. 諸 支 出 金	6,973.800
(1) 渉 外 費	50.000
(2) 徴 税 費	4,810.000
(3) 繰 出 金	1,200.000
(4) 繰 替 金	6.000
(5) 固 定 資 産 評 価 委 員 会 費	10.800
(6) 雑 支 出 金	796.000
(7) 過 年 度 支 出 金	1.000
(8) 貸 付 金	100.000
14. 予 予 備 費	300.000
(1) 歳 備 出 費	300.000
合 計	106,652.830

豊田小学校	四四〇、〇〇	八八、〇〇〇	豊田小学校新校舎	五〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇〇
日野台小学校	二四〇、三五	四八、〇七〇	第二中学校敷地	五八七、〇〇〇	一四六七、五〇〇
豊田駐在所	八〇、〇〇	四八、〇〇〇	役場新庁舎敷地	一三〇〇、〇〇〇	一、〇四〇、〇〇〇
共立病院敷地	一一九〇、〇〇	一九、〇〇〇	下田小学校敷地	四五〇〇、〇〇〇	六七五、〇〇〇
記念樹敷地	九、〇〇	九〇〇			

基本財産

(名 称)	(金 額)	(名 称)	(金 額)
日野町基本財産	九一七、〇〇〇	御大典記念百年据置貯金日野小学校基本金	一、五七三、二五
日野小学校基本財産	一、〇九二、〇〇〇	罹災者救護基金	九九九、八四
御大典記念据置貯金	二、二〇三、三一	日野町役場新庁舎建設基金	二、八五〇、〇〇

4 町税賦課現況

(税 目)	(調 定 額)	(収 入 額)	(未収入額)
市町村民税	四四四八七、〇一九	二四五一一、七五三	一九九七五、二六六
固定資産税	二八四九六、一二〇	一六〇七〇、九二〇	一二四二五、二〇〇
自転車税	五一八、二五〇	三五七、五五〇	一六〇、七〇〇
荷車税	三〇七、〇〇〇	二一四、八〇〇	九二、二〇〇
電気瓦斯税	七八四四、〇八七	七八四四、〇八七	〇
事業税附加税	二、一五八	二、一五八	〇
滞納繰越金	九一七五、二八七	五〇七七、四八四	四〇九七、八〇三
合計	九〇八二九、九二一	五四〇七八、七五二	三六七五一、一六九

5 町民負担状況

(年 度)	(世帯数)	(人 口)	(一人当負担額)
二四年	三、八八八	一七、八〇四	六九九、九五銭
二五年	三、九八五	一八、三六五	一六二二、〇〇
二六年	三、九八六	一八、七二七	二〇三六、〇〇
二七年	四、〇六九	一九、〇二九	三〇三八、〇〇
二八年	四、一五二	一九、三五七	四二一八、〇〇

第四 産業及経済

1 総説

日野町には、現在尅万九千人の人が住んでいる。この人々がそれぞれ産業にいそしみ、一日一日と経済をのばしているのである。明治の終り頃までは、大部分が農業で、僅に商業や手工業を専業にしている人或は副業にしている人々があつた程度で、その頃は、直接東京との結び付きはうすく、八王子や近隣の町村との取引が主であつた。

ところが、大正の中頃から昭和にかけて日野町には、産業大変革が起つた。それは中央線が出来て、直接東京と連絡するようになつてから、取引も大きくなり、特に種々の工場が日野町に出来て、工業が盛になつたためである。

この二つの原因に加うるに大東亜戦争の結果は一層工業都市として盛になることになり、今や南郡第一の工業都市として、いよいよ将来に光明を認めるようになった。

然し、農地のある限り、農業も行われ又中小商工業も次第に盛となり規模も大きくなり着実に行われている。巻末に記した「日野町商工名鑑」は日野町の有名な商工業家の一覽表とも言ふことができるもので、日野町の産業経済の大半を担つて居られる方々の名鑑と考えてよい。

2 農業

(1) 水田 本町は多摩川及び浅川に挟まれ、水田開発の諸条件に恵まれたため、早くから水田耕作が盛んであつた

近年工場や住宅の要地として、多少の転換を見たが、なお現在水田二百四十町歩を有して、米の生産高は都下随一を占めている。

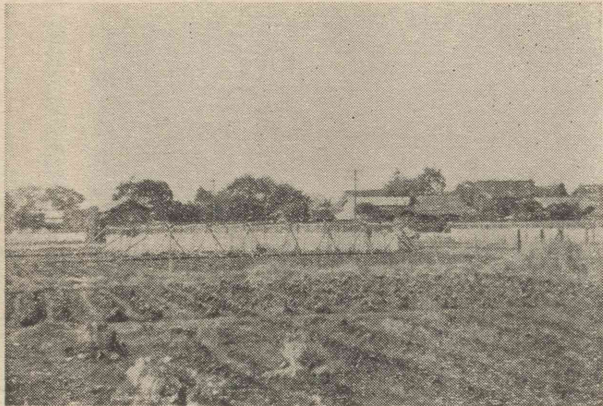
(2) 畑 畑は主として日野台丘陵地に開けているが、その他に各地聚落等に散在するものがある。麦類及び蔬菜の栽培に適している。近來諸工場や住宅の進出のために日野台及び道路沿いの耕地は其の敷地として、漸次変換する向

きがある。畑面積約二百三十町歩で、麦百十二万貫、雑穀八十八万貫を産している。現に栽培されている主な蔬菜は甘藷、馬鈴薯、南瓜、西瓜、真桑瓜、メロン、トマト、玉葱、玉菜、大根等である。南瓜、真桑瓜、メロン玉葱、トマト、玉菜、キャベツ等は割合新しい栽培物である。それを凡そ栽培当初の年代順に記して見ると次の様である。

(1) 南瓜 (2) 真桑瓜 (3) メロン (4) 玉葱 (5) 白菜 (6) キャベツ

明治時代には何れも栽培する事は無く、大正中頃に至るまで他から運搬し來つたものである。一般に新しい作物の栽培は、自然的又は有意的に栽培しはじめたのに加うるに、学校に於ける実習は之が普及に役立つたものである。

(3) 大根 大根は明治廿六年頃、東光寺部落に板橋から葉売が種子を持つて來た。之を栽培してみると、柔く長大で且つ風味も良いので、忽ち栽培がひろまり売値も高まつた。殊に干大根は、多摩川の水で洗いがよく光



(東光寺の干大根)

沢よく干し上るので、練馬の本場をしのぐようになった。昨今は工場住宅などのために耕作地もせばめられ、一方農業経営も多角的になった関係もあり、隣接の八王子市高倉町での産額が多くなつて来た。

(4) 蔬菜の出荷 明治の中頃までは、北多摩の砂川辺りの農家では、出来秋に蔬菜を荷車に積んで八王子の市場に出荷した。(日野では蔬菜は殆ど出荷しなかつた。朝、日の出ないうち

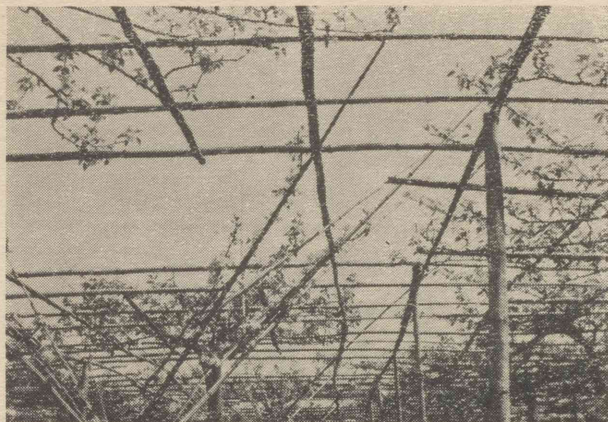
多摩川の渡船場を渡り、甲州街道を後押つきで掛け声かけて通つた。まだ暗いので提燈をつけているものもあつた。多摩川の渡船を呼ぶ声が通り筋の方までも響いた。

甲武鉄道が開通しても之を蔬菜運搬に利用することは無かつた。これは要するに駅積が不便であつたからである。

今は自動車で各方面へ自由に運搬する。日野町産出の蔬菜は、日野町青果市場に出荷している。種類等によつては八王子及び立川に出荷し、稀には新宿方面に自家用車で運搬する向きもある。

(5) 果実 果実の栽培は主として梨で、桃・葡萄も漸次産している。栽培面積は僅少ではあるが、約三町歩、梨十六万貫を産している。

本町は土壌が梨・桃・葡萄等に適しているので、従来多摩川下流六郷あたりに栽培されていたのであるが、漸次上流に溯り「稲城の梨」と永年云われそれから昭和になつて下の四谷あたりから万願寺方面に移り、これが町の広範囲に拡がり万願寺・上田・新



(梨園の整枝)

井・石田・北原・四谷方面まで栽培されるようになった。

(6) 畜産 近年多角経営法の普及に依り、合理化の一端をなう畜産も畜産協同組合、畜力利用研究会、乳牛組合、養豚養鶏組合など各組

織を整え、その発展に努めており現在役牛二百三十、山羊三十二、

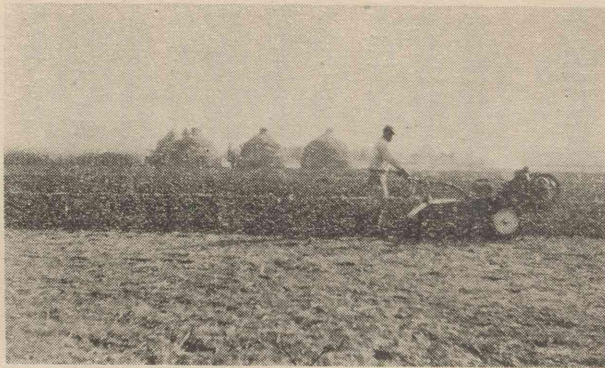
役馬五十、乳牛五十、豚百五十を数えている。

(7) 農業の畜力機械化

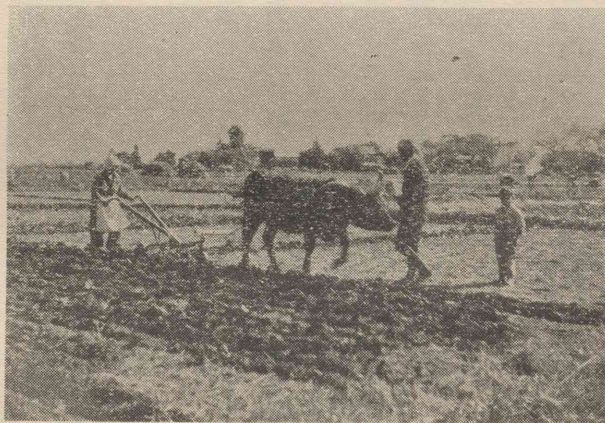
農業経営合理化の為に必要欠く事のできない機械化は、農民殊に青

壮年の時代感覚により

又農業機具の展示会に依る啓蒙などで、従来人力のみによつていた時代から脱脚し、漸次機械力及び畜力利用の方向に進みつつある。時間的に余裕の無かつた農家には一大福音といわねばならぬ。



(機械をつかつての耕作)



(牛をつかつての耕耘)

(8) 蚕業 蚕業は戦前は農家の主要生産物であつたが、戦時に際し食糧生産の重点化したがい、桑園の整理断行のため百五十町歩から十七八町歩に激減した。然し、戦後食糧事情の好転や経済事情などから、また農家の副業として復興してきた。それでも桑園町歩は戦前最盛期の四割位の現況である。

日野町は、風土の關係もあつて、良質の蚕が出来るので養蚕には適して居り、広く、関東山麓の養蚕地帯と共に、一大養蚕地帯の一部をなしていたものである。養蚕の盛であつた時代には、生糸の輸出も莫大であつたので、農家の現金収入は大部分養蚕に頼つていた。

日野町養蚕業協同組合は、都下に於ける模範組合として、養蚕経営合理化の普及を目ざして努力している。これまでに実現しにくかつた共同稚蚕飼育も実行の域に進み、そのため土室飼育施設を各支部に設置中であり、稚蚕用桑園も増設中である。

昭和二十四年二月には、農林大臣から繭の増産並に供出の優良なる故をもつて表彰され、又同二十九年四月には、蚕糸業復興進展に貢献多大の旨を以て高松宮蚕糸会長より賞状を授けられた。

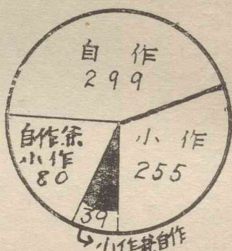
東京都蚕業技術指導所が日野に設けられ、南郡下の技術指導に当り、又日野町には、蚕業技術指導員が常駐している。

日野に設けられている農林省蚕業試験場日野町桑園でも、以上に述べたような点を考慮して、飼育の改善に研究を進め、昨今、人工で随時霜をつくる設備を完成して、それが桑の葉に及ぼす害やその予防についての、世界唯一の研究室を特設した。

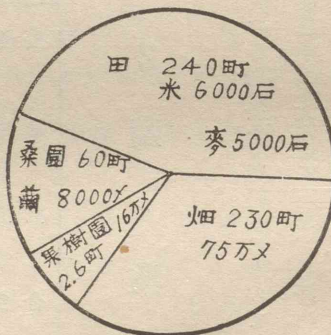
(9) 農 業 戸 数

(1) 自小作農家数

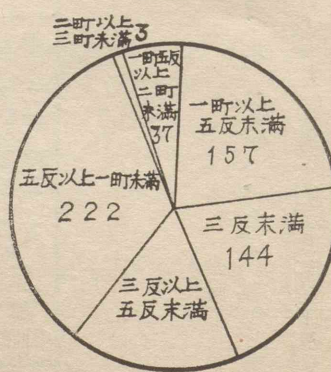
自作	二九九
小作	二五五
小作兼自作	三九
自作兼小作	八〇
合 計	六七三



(10) 利用別耕作面積

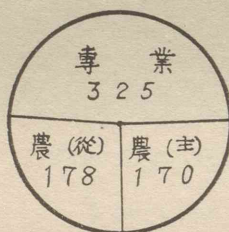


(11) 經營農地面積別戸数 (六七三戸)

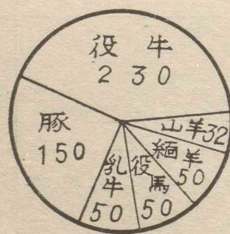


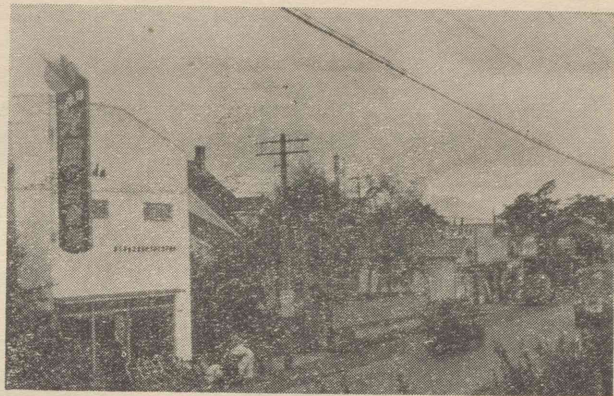
(2) 専兼業別農家数

専業	三二五
兼業	三四八
農(主)	一七八
農(従)	一七〇
合 計	六七三



(12) 畜産種類別飼養数





(日野台国道沿いの新しい商店街)

2 商業

(13) 農業団体 (昭和三〇、三、二〇)									
(団体名)									
(員数)									
(代表者氏名)									
養鶏	養豚	乳牛	梨	畜産	養蚕	農業	農業	農業	
組合	組合	組合	組合	組合	組合	組合	組合	組合	
二一	八三	二〇	二三	二〇	三六	一五六	二〇		
土方主計	安西	谷辺	渡辺	谷所	本所	平国	同	同	斉野次郎
		長一	新助	光藏	俊一	藏			

江戸時代わずかに甲州街道の駅次として、旅人の日用諸式販売程度のものであつた。以来明治、大正、昭和と時代の変遷につれ人口の増加に伴い、八王子及立川の画期的な発展に対し、日野町は多摩川、浅川の両河川に依り交通を妨げられ商業地としての条件を甚だ欠いている。其の様な条件の為、現在に至るも第八号国道沿い旧宿場の部分と、日野台地の新興市街地の発展を見るに過ぎない。しかし業者は時代の進運に伴い近代店舗の改装、顧客本位のサ

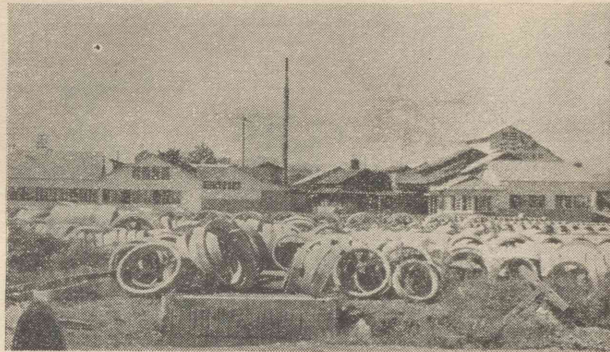
ビスに、商業地としての達成に努めている。一方都市計画も進められる機運にあり今後の発展が期待される。

業種別商業の数及従業者数

(業種別)	(軒数)	従業員数	(業種別)	(軒数)	従業員数
医薬品化粧品	五	七	飲食店	二一	四
呉服品	四	四	鮮魚品	二	二
洋品	六	一	食料品	二	一
自転車	九	一	飲料	二	一
金具	二	一	菓子類	二	一
家具	四	一	酒類	一	一
時計	三	一	菓子類	一	一
鍛冶	二	一	菓子類	一	一
電機	四	一	菓子類	一	一
旅行	二	一	菓子類	一	一
洗濯	二	一	菓子類	一	一
写真	二	一	菓子類	一	一

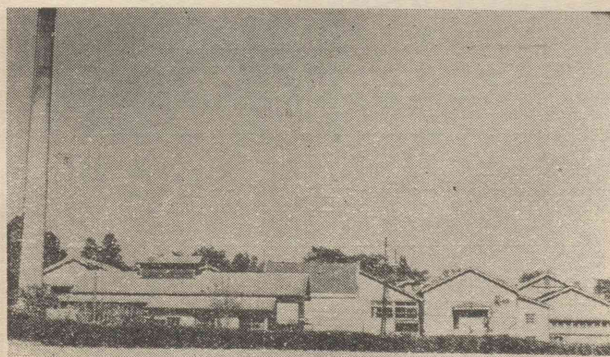
3 工業

工業 日野町には従来工業と称すべきものも、小規模ながら、かなり多くあつた。明治時代に下町に煉瓦製造、万願寺に瓦焼、豊田にビール醸造、下町に製糸組合、下川原に製糸器械製造等の工場を設け五年から十年位操業をつづ



(羽田ヒューム管株式会社)

ヒューム管、神鋼電機工業、其の他多数の大小工場が建設され、久しく静寂を保っていた農村風景も急に、工業都市としての様相を呈するに至つたのである。現在日野町にある工場のうちその数例を掲げて見る。



(篩 絹)

けたが、いずれも好成绩をあげるまでには到らなかった。これは日本も資本主義経済が政府の保護に依り次第に成功し、大規模な工場が営まれるに至り所謂産業革命の域に入つて来たので、家庭工業的なこれらの工場は、先づ金融方面の窮屈などがあつて発達するまでに至らなかつたのであらう。ただ挽家土木建築家具木製具製造、また精米麦(はじめ水車利用)方面の業種は永く継続し拡張を見つゝあつた。其の後、昭和九年に篩絹工場が豊田に建ち続いて同年吉田時計店が仲井に工場を設けたのを始めとし、十年七和精機、小西六写真工業、日野デール工業、富士電機、羽田ヒ

(会社名)	(資本金)	(製造品目)	(従業員数)	(建坪)	(敷地)	(日野に於ける 設立年月)
篩絹	四〇〇万	篩絹製造販賣	七五	一、三二〇	二、七三七	昭和九年十一月
オリエント時計	五〇〇〇万	時計製造	六六八	四、一二九	一三、三三七	" 二十五年七月
小西六写真工業	四億	フィルム・写真	九七四	一〇、三一一	三三、六七八	" 四年 十月
日野デール	一〇億	自動車製造	一、八八八	二六、九四〇	一〇四、一一五	" 十七年五月
神鋼電機	二億	強電機器製造	一九〇	一、九三八	三、一三五	" 十八年十月
富士電機	一五億	一般計器製造	五八〇	一、六六一	一八、五七五	" 十八年五月
羽田ヒューム管	五〇〇〇万	ヒューム管製造販賣	二五七	九五五	九、〇〇〇	" 十五年十月
七和精機	九〇万	精密機械製造	二二	一四八	四〇六	" 十年四月
藤野罐詰	一〇〇万	食品製パン	二〇	四〇四	一、〇〇〇	" 十三年八月
日野セメント	五〇万	セメント製品製造販	三〇	二四四	一、〇三〇	" 二十一年六月

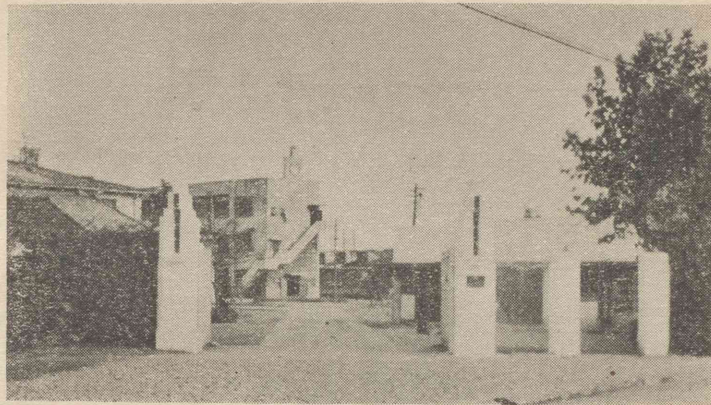
オリエント時計工業株式会社

所在地 本社、東京都中央区京橋三丁目四番地

工場 東京都南多摩郡日野町日野三四七番地 創立年月日、昭和二十五年七月十三日。

沿革 当社は時計工業に五十年の歴史を有し、我国時計産業に重きをなしていた。

東洋時計が昭和二十四年十二月事業休止により多年会社に於いて製造に従事していた技術経験者及び従業員百五十名が相俟り、昭和二十五年七月資本金一百万円の多摩時計器株式会社を創立し、東洋時計日野工場の施設一切を借受け腕時計の製造を開始、昭和二十六年四月社名をオリエント時計会社と改め内部改革と経営の改善を図つた。二十七年九月現工場の施設土地一切を買収、機械の増設、施設の整備等に依り日本三大メーカーの一つとして劃期的な進展を

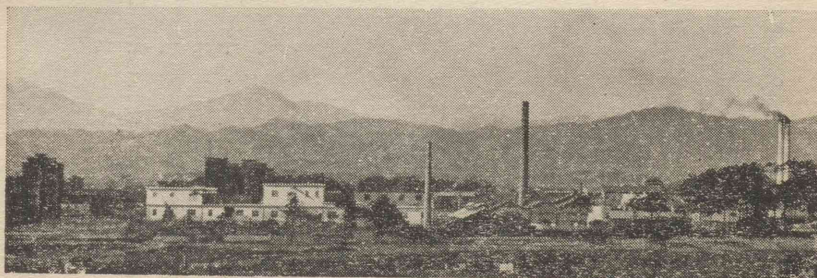


(オリエント時計工業株式会社)

見るに至った。生産高は腕時計（十型八型）二万個（昭和二十九年現在）外に高級八日巻置時計等である。

ている。本社は東京都中央区日本橋室町三丁目であり、東京を中心として地方各都市に営業所、出張所が多数ある。生産品目及び写真用機の全般にわたっている。

小西六写真工業株式会社 昭和四年十月、多年研究の「さくらフィルム」を完成発売するに至ったので、事業の規模を拡張する為、昭和十二年七月清浄な空気と水利に恵まれた武蔵野の一劃日野台に「さくらフィルム」の製造工場として当日野工場が設立された。沿革 明治初年現社長先々代杉浦六右衛門写真機械及び石版機械の輸入を始む。昭和十一年株式会社小西六に改組、昭和十八年現社名小西六写真工業株式会社と改称現在に至つ



(日野合小西六写真工業株式会社)

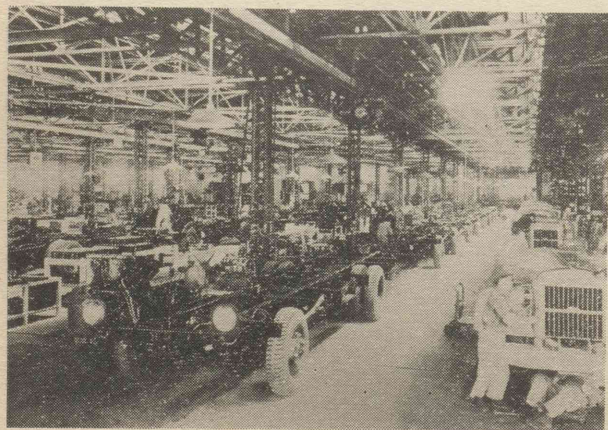
従業員九一七名。敷地面積四五、一〇六坪五一。工場建物面積八、六四四坪五九。
日野ディーゼル工業株式会社



(日野ディーゼル本社)

沿革 昭和十七年五月日野重工業株式会社を設立、軍用装軌車輛の製造を開始したが、終戦と共に昭和二十年八月事業を停止し工場を閉鎖、翌二十一年一月連合軍司令部より転換許可を受け、大型ディーゼル自動車の製造に着手し、日野産業株式会社と改称した。

改称し、翌年にはトラックバス大型ディーゼル車の製造も始めた。其の後、二十六年にはトラクター、二十七年には仏国の、ルノー社の小型



(ディーゼル工場組立ライン)

乗用車組立の開始、次いで製造等劃期的な發展經營が行われている。

富士電機豊田工場

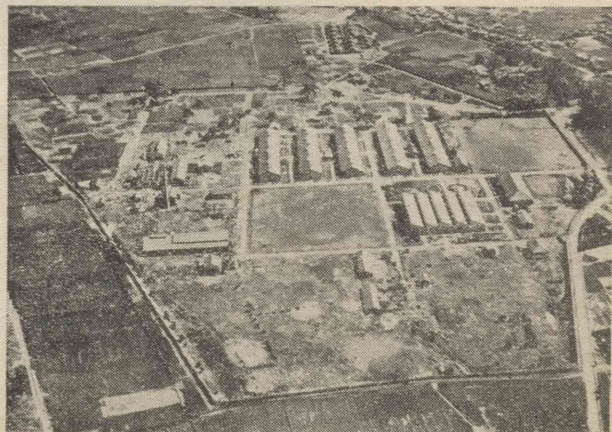
所在日野町豊田一八〇〇番地

沿革 昭和十六年一月、軍当局の特殊兵器増産の指示により、現在地に工場を建設し、昭和十八年五月十七日操業開始。終戦と同時に民需産業に転換し、当初は主として電熱器などの家庭用品から順次農事用单相モーターの製造、扇風器、人絹工業用ボットモーターなどの製造、その後工業計器の需用増加に伴い昭和二十五年秋、松本工場より工業計器部門を当工場に移管、全面的工業計器専門工場として現在に及んでいる。昭和二十七年五月には、戦後一時中絶していた西独シーメンス社との提携が復活され、当社の技術とシーメンス社の技術を加えて、近代工業の合理化に依る富士の計器を製造している。

工場附帯施設として工員の寮舎を設け其他福利方面に力が注がれている。

神鋼電機株式会社

昭和十八年十月 株式会社神戸製鋼所の電機部門の試作研究を主目に東京研究所として発足し、航空機の機上機器の試作研究を行った。



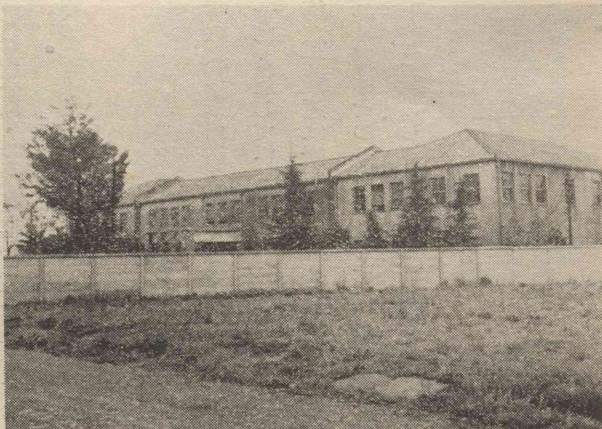
(富士電機製造株式会社豊田工場) 西方上空から。右に正門がある

昭和二十年十一月 東京工場と改称し、柱上変圧器、発変電所用大型変圧器、誘導電圧調整器及び諸機器の修理並に油入開閉器、計器用変成器、配電器具、電球等の製作を開始し、昭和二十四年三月当時の商工省より(電)の重要工場として指定された。

昭和二十四年八月 神戸製鋼所の再建整備計画に基き電機部門が鉄鋼及び金属の二部門より独立し、神鋼電機株式会社東京工場として新発足した。

昭和二十七年に、米極東空軍と電気機器の修理契約を締結し、昭和二十八年には米国シントロン社と技術提携を行い、電磁振動器等の製作を開始した。

従業員は二〇〇名である。



(神鋼電機株式会社)

第五 土 木

土木と言えはあらゆる工事を指すことにもなるが、今は便宜上道路・灌漑用水路・排水路について記すことにする。尤もこの内工事の性質によりそれぞれ国、都、町で施行するの別がある。

1 道 路

当町には第八号国道（旧甲州街道）が北東より西南に貫き都道日野川崎線（神奈川街道）・日野五日市線（五日市街道）が分岐し、更に八王子稲城線（稲城街道）が南方を西へ通つて八王子にと達している。

これら国道、都道を根幹として村道、農道が其の間を連絡している。第八号国道は新宿から甲府までを連ねる大道で、もと甲州街道と称え慶長年間江戸幕府で五街道の一つに数へ上げられ日野はその一駅となつていたものである。明治以後三回少改修が行われたが、大正十五年五月二十五日渡船場の下流に新しく日野橋が開通し、国道の附替も行われた。越えて昭和六年国道一帯に大改修が行われ、舗装が施工された。

又町村道も産業道路と市街道路とに分けられるが、産業道路としては最近新設が三ヶ所有り又改修も行われているが、市街地道路は従来の砂利道を舗装して近代的道路にしたいと云うのが町としての希望である。今のところ改修をした砂利道は全体の約四割で、残りの六割程度が改修を要するものである。

道 路				橋 梁			
(種 別)	(延 長)	(面 積)		(種 別)	(個 数)	(延 長)	(面 積)
	(米)	(平方米)			(米)	(平方米)	
国 道	三、九九五・〇〇	五九、九二五・〇〇	国 道	一	三八〇・〇〇	四、一八〇・〇〇	
都 道	一〇、五〇四・〇〇	五一、二六〇・〇〇	都 道	九	五〇・〇〇	一三二・〇〇	
町 村 道	八七、七九四・八〇	二七四、六二二・八七	町 村 道	七五	二四二・七〇	二・八〇	
町 村 農 林 道	九三、九八七・〇〇	一五四、〇七〇・六〇					

2 排 水 路

排水路は衛生面から近代都市に不可欠のものであり本町としても其の建設に力を注いでいる。現に町として行つて居る排水路新設工事は、日野台の南部方面と豊田の一部との排水を浅川に落す工事で三十年九月完成予定で進行中である。

又日野台坂上周辺の多摩川に落す排水路も詮考に属している。現在「吸込」という不完全な溜池を作つて一時を凌いでいる向きがあるが、住宅の増加と共に、排水路問題も重大さを加えて来た。

都市計画も本町は東京都市計画の一環として立案はされているが、現在の処具体的な方策決定に至っていない。近き将来に実現を要する案件である。

3 灌 漑 用 水 路

日野町は、從來三百町歩の水田があると称され、その反別は都下第一位であるが、その灌漑用水も多摩川から二ヶ所、浅川から三ヶ所の取入口を設けて取水している。日野、豊田、下田、中島の各々に用水委員を設けて、堰堤築造作業、用水堀さらえなどの管理に当っている。近年特に川敷から砂利を土建用に採取するので、水位が低下し引水に困難をきたしている。

日野用水路には、上堰下堰の二つがある。

上堰は、八高線下、栗ノ須川原から取入れ途中谷地川を合せて、東光寺・四谷・日野・宿裏・谷仲山・日野万願寺方面に灌漑して末は多摩川に落ちている。

この取入口のため、昭和八年救農工事として、多摩川横断の基盤堰堤を築造した。然るところ河床の低下は年々其の度を増すに至り引水上危懼に堪えない状態に至つたから遂に、多摩川を横断する堰堤を築造することとなつた。即ち、八高線上流五百米の地点に堰を作りその附近に樋門を設けて、現在の水路に導入するのでに三ヶ年の継続工事である。この総工費は七千二百万円でその九割三分は国及び都にて支出することになっている。

下堰は東光寺成就院下から取入れ、東光寺の一部と四谷下・上下仲田・北原・下川原及び下万願寺を経て上堰と合流して多摩川に落ちている。

上田用水は堀之内延命寺下より取入れ上田・宮・下田を経て、新井・石田・北川原を抜け多摩川に落ちている。

豊田用水は平山大名淵から取入れて、豊田耕地一帯及び堀之内に互り灌漑の後下田用水に合流して多摩川に出る。中島用水は高幡先より取入れ、新井の向島・中島東耕地を灌漑して浅川に落ちている。

第六 教 育

1 学 校 の 起 り

日本で学校のはじまつたのは天智天皇のときで、十年百済人鬼室集斯を以つて学職頭とした。また百済人僧詠を大學頭とし、博士学生等を置き學業を教授した。是れが学校のはじめである。天智天皇・文武天皇の朝漸次学校の制定まり、大宝元年律令を定め、大学、国学、典業、陰陽、図書、雅楽諸寮の制を定め、各業を講習せしめた。桓武天皇の代、和氣清麿の子広世が私立学校弘文院を起してからは勸学院、学館院奨学院、綜芸種智院等の私立学校相次で起り、隆盛となつて極めたが、醍醐天皇以後は漸く衰え保元平治の乱後文教は愈々衰え学校は姿を消した。室町時代に入つても同じく学校は置かれず、独り足利学校は上杉憲実の力によつて整備された。江戸時代に至り學問を奨励し、幕府には江戸に昌平校あり、諸藩に学校を設けるもの多く、幕末には百有余の学校があるに至つた。又朝廷では仁孝天皇天保十三年学習院を置いた。

2 寺 小 屋

江戸時代には一般商家・農家の子弟に習字・読書・算盤等を数えるところが多くでき、おもに寺院で教えたから寺小屋といった。教師を手習師匠、生徒を寺子、入学を寺入といった。

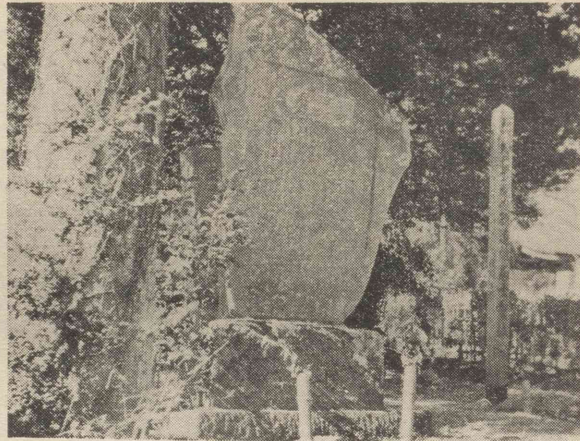
はじめ鎌倉時代に稀に僧侶等が附近の子供らにを読書など授ける事があつたが、室町時代から桃山時代に至り稍發達し、江戸時代に至つて漸く完全な姿になり、都市鄉村に至るまで普く設けられるようになった。教師は幕臣、藩士、浪人、商人、農民、医師、神官、僧侶等であつた。安政の頃最も隆盛となつたが、爾後世間が騒しくなつたので衰えた。後小学校が設けられてから寺小屋の多くは廃止され、中には私立小学校に変つたものもあつた。寺小屋の教場は寺院、民家で、天神机を列べ男女の席を分け、教師は側面に位置していた。学課は習字を主とし、手本は六論衍義、女今川、江戸方角、国尽し、口上文、請願書、手紙の文、商売往来、番匠往来、庭訓往来等を用い同時に読書、作文、地理、修身等の内容を含んでいた。此外読書、算術、裁縫、などその望みによつて授けたところもあつた。

習字は一日に三時間もあることがあるので習字用紙が墨で真黒くなつた。

読書は男児は、実語教、童子教、古帖摘、三字経、四書五経等、女児は百人一首、女今川、女大学、女庭訓往来等であつたが大方は只素読のみであつた。算術は八算、見一、相場割等で、裁縫は妻女が教えた。

田舎等では寺小屋の数も少く、また寺入する者も多くなく、殊に女児の授業を受ける者は甚だ少なかつた。また農繁期には多くは休みとした。中には寺小屋というほど無く、臨時的に近隣の乞ひにまかせて農閑期数人の子弟に教授するむきもあつた。日野町における寺小屋の主なるものは、次の通りである。

土方四方作氏の寺小屋 下田村、現土方主計氏の先々代で、村名主を勤め後家塾を開き子弟を教えて二百人に及んだ。明治五年下田小学校創設せらるるや第一代校長となり、明治九年年七十歳で没せられた。現在安養寺に日野小学校第一代の校長日野義順氏の撰になる墓碑が建てられている。



(寺 小 屋 の 碑)

阿川丈参先生の寺小屋 先生は甲州の産であつたが、堀の内阿川家をついで医業のかたわら寺小屋を開いて子弟を教えた。先生は酔医伯と謂はれ、常に酒を楽しんで居たが、一度患家から来診を乞われるや恰も別人の如くになつて、深夜もいとわず往診したので、村民から深く敬愛せられた。

佐藤信三氏の寺小屋 佐藤氏は名主であつたが仲町で家塾を開いて子弟を教育した。明治十一年門弟が相集り建てた大きな墓碑が大昌寺にある。

日野嘉三氏の寺小屋 嘉三氏は義貴と号して江戸に學んで帰り、組頭などを勤め、家塾を開いて子弟の教育をした。業を受けるもの三百人と言はれ、文久三年六十三歳で病歿した。欣浄寺に門下生によつて建てられた碑がある。

落合滝水氏の寺小屋 滝水氏は俳句をよくし、手習師匠として子弟を教えた。日野学校創設に当り、最初の教員となつた。明治二十九年五十二歳で病歿した。顕彰の碑が宝泉寺に門下生の手によつて建てられた。

其の他、寺小屋と言わなくとも、子弟を随時集めて、手習を教えたものも各所にあり、又寺院では、東光寺の成就院、四ッ谷の薬王院、北原の欣浄寺等でその住職が手習師匠として檀家の子弟を集めて教えていた。

維新後も寺小屋は各所に開かれていた。当時は「手習い」「読み書き算盤」そろばん「学問」ということは、大体同じ意味に
つかわれていた。

◎ 剣道天然理心流の道場

幕末嘉永年間佐藤俊正の幹旋で、南多摩小山の出身で、剣道天然理心流の宗家第三代を継いだ近藤周助を聘して、
撃剣の古稽を始め青少年を集めて修業させた。同氏老年に至りその後継者近藤勇が指導に当り益々盛んになった。遂
に佐藤宅門側に道場を設け、維新直前には此処に剣道を学ぶ者隣接の村邑に及び百八十名を数えた。

今、佐藤方に剣道入門の神門帳という巻物が残つて居るがはじめに剣道修業の心得が記してあり、門生は之を厳守
すると誓つて、各々宿所氏名を自筆し血判が捺してある。

◎ 日 野 郷 費

明治三年前記佐藤俊正の主唱により日野郷費と称する塾を起し、北原の欣淨寺を塾舎に充て儒者村岡笠城を聘し漢
字を教授し傍ら英語を学ばせた。又宇野為三郎を聘して筆算の教授を始めた。当時之を和算にかわつて洋算といい、
横文字の書き算盤ともいつて珍らしがられた。

村岡笠城は岡山の出身で、詩文に巧に書も雄揮、「日野郷費開講に際し佐藤賢契に呈す」「秋日日野渡頭遠望」
「安養寺桜花之賦」などの詩を残した。鶴川の小野路の郷費を度々訪問したことがあるがその途すが数篇の詩を詠
ずるのが常であつたという。

3 小 学 校

日野小学校創立

明治四年七月文部省が設置され、全国の学制を統轄し、大中小の学校を管掌することになった。越えて五年八月二
日には大政官布告第二百十四号に依り、学制頒布され、我国の教育制度が小学・中学・大学まで統制的な制度が発表
された。此の布告に依り日野町に点在する寺小屋、塾を統合して小学校を創立しようとする町民の教育的意識が盛ん
になり、翌六年五月風薫る端午の節句に、日野小学校が創立されたのである。校舎には北原の土淵山普門寺の本堂を
充て校長に日野義順氏教員に落合齊氏が就任した。

下田小学校は日野小学校と日と同じうして開校され、校舎に安養寺本堂を充て校長に土方四方作氏が就任した。豊
田小学校は翌七年三月二十五日創立され、山口平太夫氏の長屋を校舎に充て大沢範之助氏が校長に就任した。

日野小学校開校当時は学制に則り、尋常小学校とし、上下二等級に分け、下等小学校は満六歳より満九歳までの四
ヶ年、上等小学校は満十歳より満十三歳までの四ヶ年計八ヶ年の課程を設けた。学科目は読物・算術・習字・書取・
作文・問答・復読・体操の八科目で内容には修身・歴史・地理・理科が含まれていた。

校 舎 新 築

就学者が増加するにつれて校舎校地共に狭隘を告げるに至り、明治十年一月三十日校舎新築の工事を起した。即ち
普門寺の敷地を折半して校舎を新築拡張した。建物は西洋風二階建が二十四坪、日本風平屋造りが、九十四坪であ
る。

当時校舎の建築は洋風が流行したのであるが、その建築について、深い知識や技術をもっているものはなかった。で、土地の建築業者などが、横浜の洋風建築を視察し、苦心の結果完成したものであった。前の町役場庁舎はそれを移転改築したものである。

下田小学校の校舎は明治十一年九月現在の下田分教場の場所に新築され、同時に通学区域を新井・石田・万願寺・下田の五字と定めた。(明治十八年四月字上田を加えた)。

豊田小学校は翌明治十二年二月豊田一、三二〇番地善生寺の西隣に新校舎を建築した。

就学義務年限の延長

明治三十七・八年の戦役以後において教育全般の著しい拡充を見たが、小学校に関しては、明治四十年三月の小学校令改正によつて義務教育年限が延長されることになった。すなわち従来の尋常小学校四年を六年に改め、これを義務教育としたのであった。この義務教育年限二ヶ年の延長はわが国初等教育史上画期的な改革である。この改正された小学校令は一年の猶予期間において翌年から実施されたので、当日野町に於いては明治四十一年四月一日より尋常科を六年、高等科を二年の課程に改正した。この制度は昭和十六年までなんらの変化もなく三十年間以上続けられてきたのであつて、初等教育が六ヶ年の尋常小学校をもつて一段落し、それ以後は各種の上級学校に進学するというわが国の学校制度の構成がここに於いて決定されたと云うことができる。

町内小学校を一枚に統合

明治四十一年三月下田小学校・豊田小学校を共に日野小学校の分教場とし、下田分教場は尋常科四年まで収容し五年以上の課程は本校で受けることとなつた。豊田小学校は五年まで収容し六年以上は本校に通学することとなり従来

町内にあつた三小学校は一枚に統合されたのである。児童数男子三六四名、女子三三三名計六九七名。職員一四名。

校舎の増改築及び校地の拡張

日野小学校は逐年就学児童が増加し、明治四十一年三月には男児三六四名女児三三三名計六九七名の多きに達し、校舎校地共に甚だしく狭隘を告げるに至り之が拡張工事を起し凡そ一年間で完成を告げた。現在の日野第一中学校の敷地並びに校舎がこれである。

下田小学校歴代校長 創立(明治六、五、五)より分校(明治四一、三)となるまで

(氏 名)

(就任年月日)

(備 考)

土方 四方作

明治 六、五、五

柴田 直養

九、四

姫井 頼浦

九、九

平尾 賢

一〇、六

吉谷 宗也

一六、九

小宮 弥一郎

一九、九

奎代 郡治

二三、九

岡本 藤吉

二八、四

山本 初太郎

三三、五

豊田小学校歴代校長 創立(明治七、三)より分校(明治四一、三)となるまで

(氏 名)

(就任年月日)

(備 考)

大沢 範之助

明治七、三

今井 匡之

横尾 養雞
八木岡 寛制
小宮 多之助
二宮 僚十
増田 勘十郎
李代 郡治
藪内 勝繁

一六、五
二二、九
三二、四
三三、二

退職明治四十一年三月 (日野小学校の分校となる)

校舎を襲用したのは明治三十六年に増築した分だけである。尙この増改築に依り、明治十年建築の西洋風建物は町役場庁舎に明治三十一年増築二階建は教員住宅に改築移転した。明治四十一年二月十一日にこの増改築の落成式を挙行し同時に校歌、徽章を制定した。

校歌

作詞 岩淵 孝氏 (東京青山師範教官)

作曲 森山 保氏

(1) 南に仰ぐ富士の高嶺

北にめぐる多摩の流

教への庭の朝な夕な

鏡と見まし山と川と

(2) 名もうるわしき日野の町は

入素直にて地味こえたり

我等は学びの業をはげみ

楽しき此の地を榮へまさん



皇太子御使日野小学校を視察さる。

大正十年十一月陸軍特別大演習の際今上陛下は当時皇太子に御在し、大正天皇の御名代として、この朝横浜の神奈

川県庁内に置かれた大本営を御進發横浜線中央線により日野駅下車。御乗馬で傘松附近で御統監遊ばされた。翌十八日教育御奨励の思召を以つて御使として河緒侍従を日野小学校に御遣しになった。河緒侍従は教育状況を聴取され、各教室につき授業も巡視され、また校庭の体操も委細に視察された。

下田・豊田分教場改築

下田分教場・豊田分教場共に、校舎は明治十一年の建築で已に三十年以上を経過し改築の必要に迫られたので、下田分教場は昭和三年五月元の場所に、又豊田分教場は昭和十七年に現在の豊田小学校の場所に新築した。

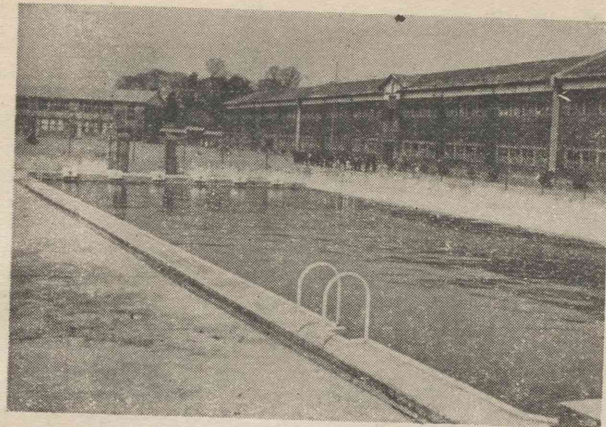
日野国民学校と校名変更

昭和六年の満洲事変以来戦時下の教育改革で最も大きな変化が現われ、それが全般の改革に対して基本となるものを示したのは、初等教育であつた。昭和十六年三月国民学校令が公布されたので同年四月一日、七十年間町民に親まれて来た日野小学校を日野国民学校と改称した。国民学校令第一条に「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シテ国民ノ基礎的練成ヲ為スヲ以テ目的トス」と明示されている。「皇国ノ道」とは端的に言えば皇道扶翼の道で国民学校では教育の全般に亘つて皇国の道を修練させることをめざしたのである。国民学校は制度上に於いては義務教育年限が八年に延長されたことが特に注目される。内容に於いては国民学校の本旨とする皇道の道にのつとて行われるべきものとのたてまえから、従来の小学校の教科が根本的に再編成されることになったのである。

戦時教育令の公布

昭和十六年十二月からの太平洋戦争は急速に戦時の教育体制をとることを要請したので情勢は変つてきた。さらに十八年からは決戦体制をとることが必要となり、教育全般が非常時に備えるものとなり昭和十九年二月十五日国民学

校戦時特例として「国民学校令第八条ノ規定ニ拘ラス就業年限ヲ初等科六年ヲ以ツテ終リトナス」となり、さらに戦争の激しさが本土の近くに迫るとともに、昭和二十年五月二十二日戦時教育令が公布され学校教育はほとんど停止されるという措置がとられるまでになった。しかも授業停止による学徒動員は従来のお手伝の域を脱しなかつたのに対し、戦時教育令では全く意味を異にした積極性をもつに至つた。



(第一日野小学校)

日野小学校に於いては高等科第一、二学年が吉田時計、富士電気、日野デーズル、神戸精鋼、東京水産等の各工場で仕事に従事し、又初等科児童も第三学年以上は農家へ赴き増産に努めた。

校舎新築

昭和十五年頃に至り日野町に大工場新設が続出したため、児童数も急激に増加し其の数千二百名を突破した。従つて教室も甚だしく不足を来し低学年は二部授業のやむなきに至つた。

よつて新たに南裏日野二、八〇〇番地に地を卜し校舎新築の大工事を起した。敷地は三町余畝歩、校舎は二階建新様式とした。現在の日野小学校本館と附属建物がそれである。

然しながらこの建築は戦争のため工事半にして中止の已むなきに至り昭和十九年十月には軍部の徴用により中島飛行機株式会社工場に充当された。翌二十年八月戦争終結と共に日野町の管理に還つたが、当時資材

の入手困難のため依然として工事は進まなかつた。しかも二十二年四月学制改革により所謂六三制が布かれ、新制中学の発足をみ旧校舎に同居していたのであるが、その間の教室不足は特に甚だしく二部授業三部授業尙他の役所の建

物を借用して出張授業を余儀なくされたのである。

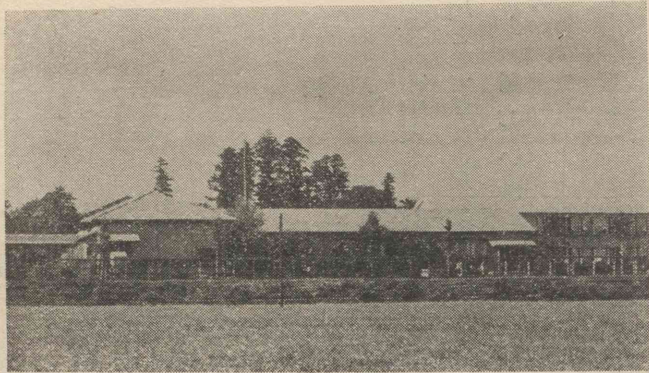
その後ようやく諸工事は進捗し、昭和二十三年四月二十五日新校舎に移転した。これによつて児童の学習状態は一応安定したものの、教室はなお不足を告げ三学年までは二部授業を実施する状態であつた。

日野台に分教場を置く

大工場新設に伴う就学児童数は益々増加した。特に日野台地区は甚だしきため、昭和二十一年四月同地区に分教場を設置し、ここに日野台地区の児童三学年までを収容し、逐次六学年までに及ぼすことにした。

豊田小学校設置

豊田分教場は児童数次第に多くなつたので、昭和二十一年五月十六日豊田分教場の位置に豊田国民学校を設置した。当時の児童数は男子一八〇名女子一六九名計三四五名で校長には豊田分教場の主任であつた訓導小山茂平氏が就任された。豊田国民学校創立により日野小学校の児童は男子九百八十三名女子は八百八十七名計千八百七十名となつた。



(日野第二小学校)



豊田小学校校歌

作

詞 高麗弥助氏
曲 鈴木 猛氏

(由木村小学校教諭)

一、鳥が呼ぶ朝の梢に声高く
みなはまたいて新らしい
希望の光らん／＼と
空に輝け我等が母校
あゝ豊田 豊田小学校

二、水が呼ぶ多摩の流れに雲遠く三、友が呼ぶ学の庭に音高く
富士もそびえてたくましい
心の芽生えらん／＼と
空にのびゆけ我等が母校
あゝ豊田 豊田小学校

三、民主の国をらん／＼と
空に陽もてる我等が母校
あゝ豊田 豊田小学校

校名変更

昭和二十二年四月一日法律第二十六号並びに文部省令第十一号に依り日野国民学校を日野小学校、又豊田国民学校を豊田小学校と、それぞれ再び小学校という名称にかえた。而していわゆる六三制の最初の六ヶ年の課程になる学校として構成され、従来の高等科は廃止された。

新しい教育

昭和二十年八月の終戦はわが国の政治・経済・文化および生活の全般に亘り見なかつた著しい変化をきたした。敗戦、それに続く占領、国内の混乱、さらに外地に於けるあらゆる活動の停止は、教育に対しても考え及ばなかつた変動を与え、しばらくはこれがどの様に收拾されるのか見通しもつけられなかつた。その中で終戦が与えた教育への最も大きな課題は戦時教育体制の終止と、戦時中に実施されたあらゆる教育実践の処置であつた。この終戦による教育の処置がなされるとともに、教育は占領軍によつて管理されることになつた。教育を管理するために、総司

令部内に民間情報部が設けられ、ここに於いて教育の基本となる方策の指導がなされることになつた。戦時下の教育を処理するために、昭和二十年末までに三つの重要な指令が発せられた。それとともに新らしい、教育を実施するという方針が明らかにされて、文部省は新教育の方針を編集してこれを小冊子として全国に配布した。

その際民主社会をつくるための新しい教育が実施されねばならないことを明示した。戦後の新教育はここから発足して居る。全国の学校も漸時秩序を回復して、新しい教育体制を作るといふ方向に進む気運が認められることとなつた。この時教育改革に対して大きな力になつたものは、昭和二十一年三月に到着したアメリカ教育使節団の活動であつた。この使節団は日本側委員に迎えられ一ヶ月にわたる視察と会議によつて、報告書を作製してこれを提出した。司令部はこれを公表して、戦後わが国の教育改革に対する根本指針としたのである。

文部省は同年八月教育刷新委員会を設け、総司令部と密接な連関を保つて、教育改革のため基本方針や具体的の方策を決定したのである。この委員会がこれから数年にわたる占領下の教育体制を決定したのであるから、その審議内容はきわめて重要な意義をもっている。この委員会は昭和二十四年六月に教育刷新審議会となつたがこれが任務を完了するまでの間に、戦時教育の体制はまったく切換えられ、民主社会形成のための教育方策の展開を見ることがなつたのである。新しい教育体制をつくるために根幹となつたものは学校制度の改革であつた。昭和二十二年三月に教育基本法と学校教育法とが公布されて、新しい学制が実施されることとなつた。

初等教育については教育の実際を改善するために方策が示され、教育の内容が、学習指導の方法が著しく改められた。学科課程を改めて従来見られなかつた社会科を成立させたほか全学科にわたつて教育内容の再編を行つた。そのために学習指導要領を編集してこれを示し、各学校はこれを基準として学科課程を編成するように要請した。全体と

して自学主義による教育法が重視されたので、新しい観点からその学習効果が評価されることとなり、学校の経営全般が改められた。特に学校文庫や視聴覚教具の導入など生徒の自律活動を促進させるに大きな力となった。かくして初等教育の分野に於いて最も活発な新教育運動の展開を見たのである。

下田分教場複式を解く

下田分教場は従来第一・二学年を一学級、第三・四学年を一学級に編成してあつたがこれは実際教育上から考えた場合、非常な不便があるので、昭和二十四年四月から各学年毎に学級を編成して永年つづいていた複式を解いた。

日野台分教場増築

日野台分教場は其の後児童数が増加し、教室の不足が甚だしいので、昭和二十四年平屋五教室を増築した。

日野小学校東京都実験学校となる。

昭和二十五年四月日野小学校は東京都の実験校に指定された。与えられた研究題目は、東京都編教育課程試案を日野小学校に施して其の可否の点を究明することであつた。

研究目標は、与えられた研究題目に対して数次に及ぶ慎重な協議により、次の目標をたててその解決に向うこととした。即ち

- (1) 本校教育課程の正しきあり方の究明。
- (2) 本校の教育目標は本校の教育計画に如何に表わすべきか、又各科課程は教育の目標に如何に展開して行くべきかを明らかにすること。
- (3) 都案教育課程を検討すること。

日野台小学校設置

昭和二十一年に設置された日野台分教場は、其の後児童数が増加し、又四年以上の児童が本校に通学する

ことは交通上危険も考えられるので昭和二十五年六月十日、日野台分教場は独立し、日野台小学校として発足した。児童数男子三三八名女子三三八名計六九六名で校長には高野忠正氏が就任した。

日野台小学校々歌

作 詞 高麗弥助氏
曲 鈴木 猛氏

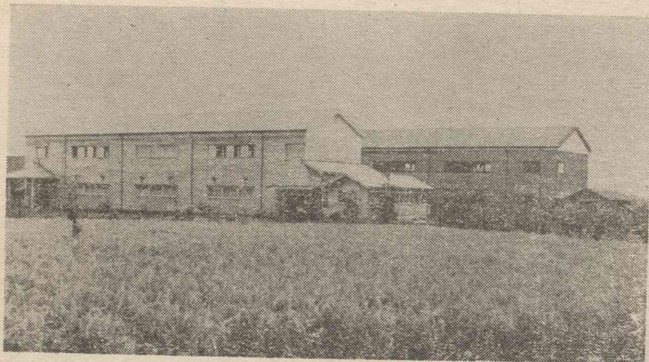
一、武蔵野原の朝風に
希望の光あびながら
まなびのあしなみたくましく
心とからだきたえよう
あゝ日野台に日は昇る
二、さゝやき交す多摩川の
流れを裾に引くところ
力をあわせむつまじく
働く町を育てよう
あゝ日野台のわが母校
三、サイレンひびく丘の上に
揚げば富士の嶺はるか
まことの道をふみわけて
平和の旗をかげよう
あゝ日野台よ栄えゆく



(日野第三小学校)

各学校児童数 (昭和二十五年六月十日現在)

(校 名)		(児童数)	
		(男)	(女)
日野小学校	七〇二	六九三	一、三九五
豊田小学校	二三〇	二五二	四八二
日野台小学校	三三八	三五八	六九六



下田分校増築

下田分校は昭和二十四年度より複式級を解いたが元の教室を仕切つて使用していたので当然増築をしなければならなかつた。二十六年三月二教室新築落成し、教室の不足を解消した。

日野台小学校増築

日野台小学校は独立後も教室少なく二部授業を実施していたので、二十五年に二階建四教室、二十六年に二階建六教室を新築した。これに依つて待望の二部授業解消は実現したのである。

日野小学校増築

日野台小学校独立後も日野小学校の二部授業は依然としてつづいていた。昭和二十七年新校舎八教室が落成したので多年の念願であつた二部授業は解消されたのである。

豊田小学校増築

豊田小学校校舎は昭和十七年に建築したままであつた。しかるに児童数は次第に増加して二部授業を実施しなければならぬ状態であつた。そのため昭和二十七年二階建八教室を新築して二部授業を解消した。

日野小学校八十周年記念式典挙行

日野小学校は、昭和二十八年創立八十周年を迎え、十月二十五日記念式典並びに日野小学校八十周年記念事業協賛会（昭和二十八年二月結成）に依るプール落成式を挙行了した。

歴代の校長

日野小学校

氏名	就任年月日	出身別	備考
日野 順学	明治六、五、五	三重県	
小川 則也	一九、四、八	宮城県	
鈴木 宗松	一九、五、四	茨城県	
八上 寛制	一九、五、九	加賀市	
佐野 鶴松	二一、一、一	日野町	
古谷 平次郎	二五、四、一	日野町	
河合 剛次郎	一五、三、一	日野町	
古川 海蔵	一八、一、二	由良村	
宮井 嘉一	二三、九、四	日野町	
小貫 池		現川口村 山入小学校	
日野 義順			
小川 則也			
鈴木 宗松			
八上 寛制			
佐野 鶴松			
古谷 平次郎			
河合 剛次郎			
古川 海蔵			
宮井 嘉一			
小貫 池			

(昭和二十一年独立以後)

氏名	就任年月日	出身別	備考
小島 茂平	昭和二一、五、七	川口村	
増山 光一	二七、一〇、七	七生村	
現横山村 横山第二小学校長			

日野台小学校 昭和二十五年独立以後

氏名	就任年月日	出身別
高野 忠正	昭和二五、〇六	日野町
尾崎 半次郎	" 二七、一〇	恩方村

児童数の推移 卒業者数(除高等科)

年度	校名	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
明治	二二	二四	二四	四八									
大正	三三	三三	六六										
昭和	九四	九四	一八八										
	三	三	六										
	四〇	四〇	八〇										
	三七	三七	七四										
	三五	三五	七〇										
	三二	三二	六四										
	三〇	三〇	六〇										
	二七	二七	五四										
	二四	二四	四八										
	二二	二二	四四										
	二〇	二〇	四〇										
	一九	一九	三八										
	一八	一八	三六										
	一七	一七	三四										
	一六	一六	三二										
	一五	一五	三〇										
	一四	一四	二八										
	一三	一三	二六										
	一二	一二	二四										
	一一	一一	二二										
	一〇	一〇	二〇										
	〇九	〇九	一八										
	〇八	〇八	一六										
	〇七	〇七	一四										
	〇六	〇六	一二										
	〇五	〇五	一〇										
	〇四	〇四	〇八										
	〇三	〇三	〇六										
	〇二	〇二	〇四										
	〇一	〇一	〇二										
	〇〇	〇〇	〇〇										
	九九	九九	一九八										
	九八	九八	一九六										
	九七	九七	一九四										
	九六	九六	一九二										
	九五	九五	一九〇										
	九四	九四	一八八										
	九三	九三	一八六										
	九二	九二	一八四										
	九一	九一	一八二										
	九〇	九〇	一八〇										
	八九	八九	一七八										
	八八	八八	一七六										
	八七	八七	一七四										
	八六	八六	一七二										
	八五	八五	一七〇										
	八四	八四	一六八										
	八三	八三	一六六										
	八二	八二	一六四										
	八一	八一	一六二										
	八〇	八〇	一六〇										
	七九	七九	一五八										
	七八	七八	一五六										
	七七	七七	一五四										
	七六	七六	一五二										
	七五	七五	一五〇										
	七四	七四	一四八										
	七三	七三	一四六										
	七二	七二	一四四										
	七一	七一	一四二										
	七〇	七〇	一四〇										
	六九	六九	一三八										
	六八	六八	一三六										
	六七	六七	一三四										
	六六	六六	一三二										
	六五	六五	一三〇										
	六四	六四	一二八										
	六三	六三	一二六										
	六二	六二	一二四										
	六一	六一	一二二										
	六〇	六〇	一二〇										
	五九	五九	一一八										
	五八	五八	一一六										
	五七	五七	一一四										
	五六	五六	一一二										
	五五	五五	一一〇										
	五四	五四	一〇八										
	五三	五三	一〇六										
	五二	五二	一〇四										
	五一	五一	一〇二										
	五〇	五〇	一〇〇										
	四九	四九	九八										
	四八	四八	九六										
	四七	四七	九四										
	四六	四六	九二										
	四五	四五	九〇										
	四四	四四	八八										
	四三	四三	八六										
	四二	四二	八四										
	四一	四一	八二										
	四〇	四〇	八〇										
	三九	三九	七八										
	三八	三八	七六										
	三七	三七	七四										
	三六	三六	七二										
	三五	三五	七〇										
	三四	三四	六八										
	三三	三三	六六										
	三二	三二	六四										
	三一	三一	六二										
	三〇	三〇	六〇										
	二九	二九	五八										
	二八	二八	五六										
	二七	二七	五四										
	二六	二六	五二										
	二五	二五	五〇										
	二四	二四	四八										
	二三	二三	四六										
	二二	二二	四四										
	二一	二一	四二										
	二〇	二〇	四〇										
	一九	一九	三八										
	一八	一八	三六										
	一七	一七	三四										
	一六	一六	三二										
	一五	一五	三〇										
	一四	一四	二八										
	一三	一三	二六										
	一二	一二	二四										
	一一	一一	二二										
	一〇	一〇	二〇										
	〇九	〇九	一八										
	〇八	〇八	一六										
	〇七	〇七	一四										
	〇六	〇六	一二										
	〇五	〇五	一〇										
	〇四	〇四	〇八										
	〇三	〇三	〇六										
	〇二	〇二	〇四										
	〇一	〇一	〇二										
	〇〇	〇〇	〇〇										
	九九	九九	一九八										
	九八	九八	一九六										
	九七	九七	一九四										
	九六	九六	一九二										
	九五	九五	一九〇										
	九四	九四	一八八										
	九三	九三	一八六										
	九二	九二	一八四										
	九一	九一	一八二										
	九〇	九〇	一八〇										
	八九	八九	一七八										
	八八	八八	一七六										
	八七	八七	一七四										
	八六	八六	一七二										
	八五	八五	一七〇										
	八四	八四	一六八										
	八三	八三	一六六										
	八二	八二	一六四										
	八一	八一	一六二										
	八〇	八〇	一六〇										
	七九	七九	一五八										
	七八	七八	一五六										
	七七	七七	一五四										
	七六	七六	一五二										
	七五	七五	一五〇										
	七四	七四	一四八										
	七三	七三	一四六										
	七二	七二	一四四										
	七一	七一	一四二										
	七〇	七〇	一四〇										
	六九	六九	一三八										
	六八	六八	一三六										
	六七	六七	一三四										
	六六	六六	一三二										
	六五	六五	一三〇					</					



(日野第一中学校)

校歌

第一回卒業生作詞
池田友次郎作曲

(一)

むさし野みどり輝く、多摩川の流れにのぞみ
日にはゆる日野の大地をふみしめて我等立たなん

(二)

とことは誠にとめてたどり行く学びの道
はるかなる山の彼方に富士の根を我等仰がん

数九一七名、職員数三二名、事務主事一名、同助手一名、使丁一名で卒業生は現在まで一、四六二名である。

校地坪数一、一八七坪、校舎総坪数七四四坪。

歴代校長

氏名	勤務期間	在職年数
町田勘之助	自昭和二十二年四月 至同二十五年九月	三年五ヶ月
飯塚節三	自昭和二十五年十月 現在に至る	

昭和二十五年に設けられた学校図書館は、逐年充当整備されつつある。



日野第二中学校

本校は昭和二十八年六月日野町上田字高倉の地五、八七〇坪を売却し、第一期八教室の工事に着手し、二十九年二月落成。同年四月六日日野台、豊田両小学校卒業生を迎え四学級編成にて入学式を挙げて開校した。続いて二十九年七月一日第二期工事八教室の増築に着手、目下進捗中である。

生徒数二二〇名、職員一〇名、使丁一名、給仕一名である。

校長 橋本 貴一 昭和二十九年三月一日発令現在に至る。

前任地日野中学校教諭

5 学校図書館

新教育は、子供の自主的な教育活動を重んずるところから、子供の学習の場としての学校図書館が必要なのである。

去る第十六国会に於いて「学校図書館法」が成立し、二十九年四月一日より施行した。(昭和二十五年法律第二一八号)これによると、その第三条に「学校には学校図書館を設けなければならない。」とあり、その裏付として第十三条に、「国は地方公共団体がその設置する学校図書館の設備又は図書が審議会の議を経て政令で定める基準に達しない場合に於いてこれを当該

基準にまで高めようとするときは、これに要する経費の二分の一を負担する。但し義務教育費国庫負担法の適用を妨げない」とありその設置を奨励しているのである。

日野第一中学校図書館

昭和二十五年四月よりその準備にかかり、図書館教育同設備運営等の研究をなし、次に図書の整理新規購入、図書室の整備を進め、又生徒図書委員の選出指導等をなし昭和二十五年十二月一日開館された。図書室は階下玄関右の一室二〇坪が充てられた。

(蔵書数)

昭和二十六年	昭和二十七年	昭和二十八年	昭和二十九年
一二六四冊	一二二六冊	一三六二冊	一四二四冊(十一月現在)

図書閲覧 図書は閲覧者が書架について引出す自由開架式になつてゐる。

館内閲覧 始業前、晝休憩時、放課後、各課の学習

館外閲覧 貸出期間 一週間、貸出冊数 一期間一冊

図書貸出状況 (昭和二十九年)

貸出月	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
冊数	343	851	1521	792	522	641	329	

読書傾向 (最も多く貸出される書物)

あゝ、無情	ワイルヘルム・テル	巖窟王	アルプスの少女	家なき娘
-------	-----------	-----	---------	------

小公女	ジャングル・ブック	鉄仮面	怪盗ルパン	若草物語
-----	-----------	-----	-------	------

他に世界少女文学全集、偉人伝記物語等。
他に町立中学校、小学校共学校図書館の育成利用に努力している。

○農村伝道神学校 日野台字高倉野所在

昭和二十三年四月日本キリスト教団が中央農村教化研究所を設立し、後ち農村伝道神学校と改め、本科四年生三十五名、研究科生二名、外に保育科生(女子)八名、更に予科生五名あり、生徒出身地は、九州、四国、北海道其他となつており、校長は米國神學博士イーエム、クラークである。校地三万六千坪内に教室、寄宿舎牛舎豚舎等があり敷地の一角には幼児保育園が設けられた日野台教会があり信者は八十名程である。他の敷地は牧場農園林野となつてゐる。

この敷地は大正の中頃帝室林野管理局日野苗圃が設けられたところであつたが、戦時中は、東京芝浦電気会社で感恩農場を經營していたのを、經營主滝田氏がカナダ宣教師の団体に譲渡し更に日本基督教団に移つたものである。

○保育園と遊園地

一、保育園

町内に保育園は四ヶ所あり。いづれも私立である。

二、遊園地

遊園地は、十箇所あり、各地に散在し、幼児の遊び場となっている。

6 教育行政及び社会教育

(一) 日野町の教育行政

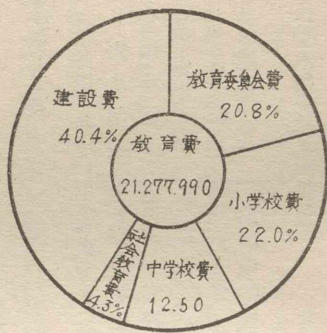
昭和二十七年十一月一日地方教育委員会設置にもとづき、左記の者が日野町教育委員として選任され学校教育及び社会教育全般に互り教育行政を運営して居る。

日野町教育委員

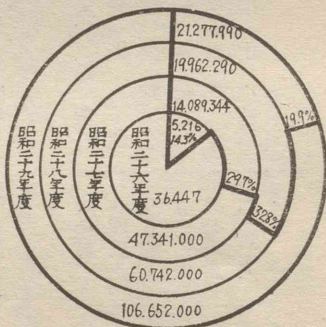
教育委員長	天野敬
副委員長	山内滋
"	滝瀬重治
"	谷口喜夫
"	古谷梅雄

日野町の昭和二十九年年度教育費予算は、二千二百二十七万七千九百九円で、これを費目別に比較すると左表の通りである。

昭和二十九年年度教育費予算比較表



町費に対する年度別教育費比較表



(二) 社会教育

成人学校(第一回より第六回迄の受講生数)

(回)	(期)	(男)	(女)	(計)
第一回	昭和二十六年一月二十二日より三月十六日まで	四五人	七二人	一一七人
第二回	昭和二十六年九月五日より十月十六日まで	六九人	七二人	一四一人
第三回	昭和二十七年六月九日より七月十八日まで	四八人	八六八	一三四人

第四回	昭和二十八年四月二十日より五月三十日まで	三〇人	八八人	一一八人
第五回	昭和二十八年六月二十九日より八月二十九日まで	四二人	八三人	一二五人
第六回	昭和二十八年十一月十六日より十二月十九日まで	四七人	四二人	八九人

各種文化団体

(団体名)	(会員数)	(代表者)	(創立年月日)
日野町婦人会	一、〇〇〇人	野原キク	昭和二十三年四月一日
日野町青年会	五〇〇人	奥住芳雄	昭和二十八年一月三十一日
飛火野会	一一〇人	滝瀬里水	大正十三年五月一日
日野町史談会	三〇〇人	古谷剛次郎	昭和二十六年十月十八日
スケヤードダンス友の会	一〇〇人	田中兼太郎	昭和二十六年十一月一日
ボーイスカウト	一〇〇人	宇田川英雄	昭和二十八年六月一日

小中学校PTA

(学校名)	(事務所在地)	(電話)	(代表者)	(会員)	(創立年月日)
日野小学校	日野小学校内	七三	和田七郎	九四五人	昭和二十四年四月
豊田小学校	豊田小学校内	七〇	高橋春吉	三五四人	昭和二十三年十二月四日
日野台小学校	日野台小学校内	一〇一	清水祿之助	五二〇人	昭和二十六年六月十日
日野第一中学校	第一中学校内	九	馬場末濟	七七六人	昭和二十二年五月九日
日野第二中学校	第二中学校内	五六	田中三郎	二〇三人	昭和二十九年四月一日

昭和二十八年年度社会教育事業

(月)	(日)	(名)	(備考)
四月十日	十二日	巡回映画会	十日第二日野台広場、十一日豊田小学校、十二日下田分校

四月二十日—五月三十日	第四回成人学校開校	第一中学校 一一八名
五月三十日	時局講演会	第一中学校
六月七、二一、二八日	第二回部落対抗少年野球大会	日野小学校々々庭 二十チーム参加
六月二十九日—八月二十九日	第五回成人学校開校	第一中学校 一二五名
七月六日、二十五日	官公署野球大会	日野小学校々々庭 九チーム参加
十月四日	第二回町民運動会	日野小学校々々庭 三四部落出場
十一月十六日—十二月十九日	第六回成人学校開校	第一中学校 八九名
十一月二十九日	講演と映画の会	第一中学校
一月十五日	成人式典	第一中学校 三四六名

社会教育委員

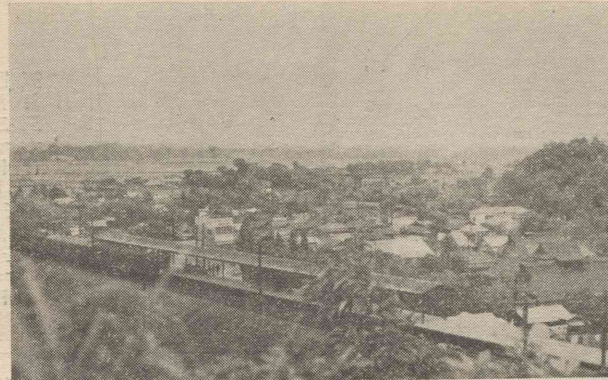
- (一) 社会教育法第十五条の規定により日野町に社会教育委員を置く、定員は三十名以内
- (二) 設置目的 社会教育委員会は社会教育に関し教育委員会の諮問に応ずる。
- (三) 構成

飯沼小 飯沼小
尾崎島 尾崎島
半次郎 半次郎

馬和清 佐奥野古
田橋水 藤住原中
未七春 祿之助
落吉郎 雄助

安龍阿 立永遠 島風 宇田川
瀨西川 本間 中木 下
三信男 太次郎 治助 雅紀
三郎 之 一 二

第七 交通・通信
1 鉄 道



(日 野 駅)

日 野 駅

日野駅の開業は明治二十三年一月六日で、敷地面積は、二万三千七百四十
三平方メートルあり当時の買収価格、八、〇八八円一八銭であつた。昭和十二年現
在の建物に改築した。東京駅を起点として、四十軒八のところにある。
電車の開通したのは、昭和五年十二月二十日で、立川・浅川間単線で運
転した。それが複線となつたのは昭和十二年六月で、立川・豊田間複線運
転開始、日野駅は現在の位置に移つた。

旧日野駅本屋面積は、七二平方メートルであつたが、新駅は本屋面積二三六平方
メートルに拡張、尙駅長事務室は乗降場西末端に別に新築した。

従来は農村の一小駅に過ぎなかつたが昭和九年以降、東洋時計、小西六工
場、日野重工業、神戸製鋼等の各会社工場その他が建設されたので、駅務が
繁多になつた。

旧駅は貨物積卸場となり、各工場の原料並に製品の積卸で多忙である。最近一ヶ月の発送は、セメント管・硝化
綿・機械類等で千二百六十噸、到着は石炭・鋼材其他で九百十噸に及んでいる。

昭和二十八年度の乗降車人員数並に定期券発売枚数・同通用期間別及び行先別の枚数表を掲げて見る。

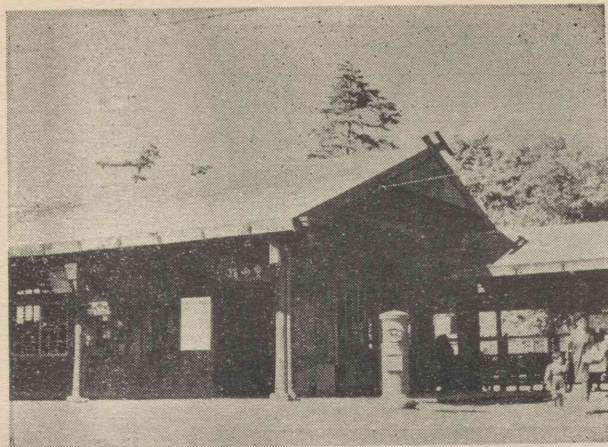
昭和28年度乗降車人員総数			
(乗 車)	(普通券乗車)	(定期券乗車)	(計)
1 年 間	512,398	1,533,530	2,045,928
1 日平均	1,403	4,202	5,605
(降 車)	(普通券降車)	(定期券降車)	(計)
1 年 間	513,089	1,533,530	2,046,619
1 日平均	1,406	4,201	5,607

昭和28年度定期券発売枚数 (通用期間別)			
	(日野駅発売枚数)	(相手駅発売枚数)	(計)
1ヶ月	11,570	10,752	22,322
3ヶ月	3,117	2,131	5,248
6ヶ月	683	1,258	1,941
計	15,370	14,141	29,516

昭和28年度定期券発売枚数 (行先別)		
(線 別)	(発売枚数)	(パーセント)
日 野～新宿間	401	36.2
新 宿～以 遠	266	24.0
日野～以西(下り)	262	23.6
南 部 線	28	2.5
青 梅 線	73	6.6
横 浜 線	19	1.7
五 日 市 線	11	1.0
東 武 線	6	0.5
西 武 線	15	1.4
小 田 急 線	2	0.2
京 王 線	24	2.2
京 浜 線	1	0.1
京 成 線	1	0.1
合 計	1,109	100

新駅開設当時（昭和十二年六月）は乗降客は、一日平均二千八百人位であつた。現在では六倍にも増加した。旧駅は貨物積卸場となり、各工場の原料及び製品の運搬その他で多忙である。

前の表によれば、定期券利用者は会社・官公署・学校等の通学通勤が殆んどである。又その脚どりも大体推測される。



(中央線 豊田駅)

豊田駅

豊田駅は、重要運搬物として、浅川砂利搬出を掲げて運動した結果明治三十四年三月新設されたものである。当時近傍に民家は一軒もなく、その段丘は一面の桑畑であつた。山口平太夫外有志の人々の熱望に依つて設けられ、敷地駅舎も大体寄附になつたものである。昭和六年度の乗降客及び貨物の扱数は、乗客一〇七人、降客一〇六人、貨物発二、着三であつたが現在は次表の如くなつてゐる。

豊田駅二十八年度乗降車人員数			
(乗車)	(普通券乗車)	(定期券乗車)	(合計)
一年間	三三七、一五四	六四一、五七六	九九八、七三〇
一日平均	九七八	一、七五七	二、七三五
(降車)	(普通券降車)	(定期券降車)	(合計)
一年間	三三三、八五五	六四一、五七六	九七五、四三一
一日平均	九一四	一、七五七	二、六七一

此の表で見ると昭和六年頃一日平均の乗降客二百十人余りが、現在では五千四百名余りで二十年前の略々二十六倍にもなつてゐる。

甲武鉄道（中央線）

甲武鉄道布設にあたり東京から甲府へ抜ける路線は幾筋か挙げられたが、結局新宿から八王子までを第一期として着工することになつたものの、甲州街道沿いに線路を布くことになると、沿線の村々では歓迎しないのみならず却つて反対したのだという。「旅人が素通りすることになるので町が寂びれる」「煤煙が桑の葉にかかつて蚕が育たない」といったようなわけである。

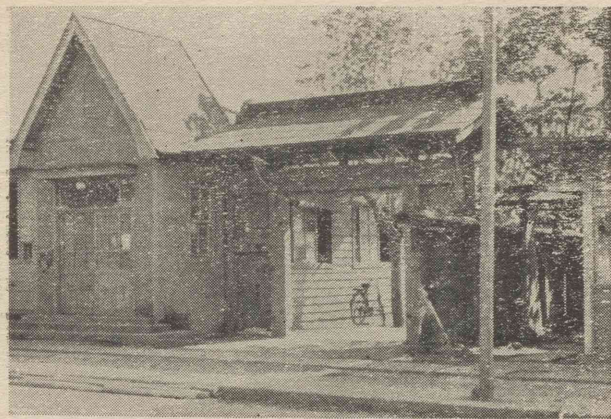
甲武鉄道工事は立川までは比較的安易であつたが切取り、多摩川鉄橋架設、低地の土盛、日野台の切取、築堤、屈曲、また浅川鉄橋架設等相当難工事が連続していた。多摩川鉄橋の基礎沈下にあたり潜水夫が水中に「モグル」のでそれを見物しようとして出掛ける者が多かつた。日野台などの切取土は、築堤土盛に用いた余分は切取個所の左右に高く掻き上げて置いた。赤土の高い土手が今でも少し残つてゐる。

従業労務者は町内に分散宿泊した。その労務者たちを黒鯨と呼んでいた。その者たちが諸国の珍らしい話や事柄を伝えた。

日野は地勢の関係から駅の敷地が求め難く、また旅客の乗降も多くを期待できないので設置計画から省かれていたが、町有志が物資輸送量を巨細にあげて、熱心に要請した結果漸く設置を見たものだという。

開業当時汽車賃は八王子まで五銭、立川まで三銭、新宿まで二十五銭で、汽車の運転は、晝間に限られていた。

2 郵便



(日野郵便局)

日野郵便局

(1) 日野郵便局は、明治七年二月一日七等局として開局。(我国郵便事業の創始は明治四年四月)当時局舎は日野町日野二七六二番地、佐藤信民氏の宅内にあつた。その後明治十一年一月日野町二五三四番地小島半平氏宅に、明治二十八年十二月日野町日野二五一三番地、日野久兵衛氏方に移り更に明治三十三年六月現所在地日野二七六一番地、佐藤俊宜氏宅内に移つた。改築した局舎は大正十五年八月二十五日類焼したので現局舎はその趾に新築したものである。

(2) 歴代局長

初代	佐藤 信民
二代	小島 半平
三代	佐藤 俊宣
四代	佐藤 仁
五代	佐藤 昱

(3) 取扱事務の開始年月

郵便 明治七年二月一日
 為替貯金 明治二十五年五月十六日
 簡易保険 大正五年十月一日
 電話 大正十年十一月十一日
 電話交換事務 昭和三年四月一日

(4)

1、所在地 東京都南多摩郡日野町日野二七六一番地
 2、名称 東京都日野郵便局
 3、種類 集配特定郵便局
 4、局長 特定郵便局長 佐藤 昱
 5、局員 三十六名
 6、取扱事務 昭和二十八年度取扱左表の通り(金額単位千円)

件数	簡易保	件数	金額	電話加入数	管内受持郵政機関	郵便局	簡易郵便局	日野台局
八、七一四	二五三、六一四	二七三	四三二	一八〇	一七	七生局	一	日野台局
三、六二七	一〇七、四一七	五、八三三	四八六、〇四三	九七五、二四三	四、七九九	一一、四一〇		
口数	受金	口数	払金	引受物数	配達物数	発信通数	著信通数	

(5) 其の他

日野台簡易郵便局は、日野町一里塚に設置し日野町長を受託者として、昭和二十七年五月十六日より為替貯金、切手類の売捌並に郵便小包の引受等の窓口事務を開始した。

郵便自動車の運転が開始されたのは、昭和二十五年九月一日で、新宿―八王子間の国道を往復して郵便物を沿道の局に集配している。以前は中央線を利用していた。

3 道路 交通

通行 車輛

昭和二十九年九月二十七日月曜日晴、日野警察調査に依れば車輛の通過量は左の如くである。

車		乗 用		合 計	
自動車・貨物	八王子方面より立川方面へ	一六〇七台	合	計	
乗	立川方面より八王子方面へ	一六三三台	三二四〇台		
荷 車		合 計			
自 転 車	八王子方面より立川方面へ	二二五一台	合	計	
荷 車	立川方面より八王子方面へ	二二二七台	四三六八台		

以上国道八坂神社前で調べたもの、又此の数字を警視庁交通第二課発表の昭和二十九年自動車交通流図によつて他に比較してみると、立川市日野橋北詰ロータリーでは七、五四一で二・三倍になり、八王子市大横町では四、二九五

で一・三倍を示している。自動車の通行は日に月に増している。

又歩行者量は日野駅前調査（昭和二十九年九月二十七日調）

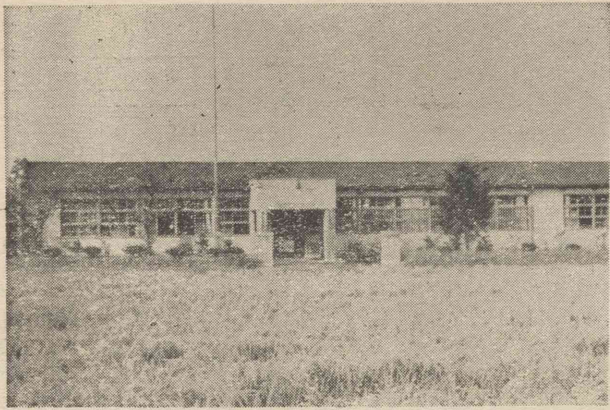
歩行者		合 計	
八王子方面より	四七四五名	合	計
立川方面より	四一〇三名	八、八四八名	

右は双方とも午前七時より午後七時迄の十二時間の調べである。

本年交通事故に依る日野町の死亡者は十一月末現在三名となつてゐる。事故は速度違反に依つて起るのが大多数である。又期節的に見ると、二、三月事故が最も少なく除々に上昇し、梅雨期から夏にかけて多くなり十月から減少する。一日中で一番事故の多いのは午後三時前後である。一般の歩行状態は規則を守つてゐるもの、全体の八十二％（十一月調）で良好の部である。

第八 治安

1 日野警察署



(日野警察署)

日野警察署は日野町及び七生村、多摩村、稻城村の一町三ヶ村を管轄している。日野町には警察署の外、巡査駐在所が日野橋、上宿、東光寺、大坂上、新井橋、豊田の六つある。外に派出所が、日野駅前、豊田駅前の二ヶ所にある。

警察は警察法（昭和二十三年三月公布）に依りその任務機構等が示されている。同法第二条には警察の任務として左の事項が挙げられている。

警察法第二条（昭和二十九年法律一六二号）一、警察は個人の生命身体及び財産の保護に任じ、犯罪の予防鎮圧及び捜査、被疑者の逮捕、交通取締その他公共の安全と秩序維持に当るをもつてその責務とする。

日野警察署の沿革

昭和二十三年十二月、日野町警察署設置に着手、翌二十三年三月警察法發布と同時に自治体警察として開署した。初代署長には、山下隆光氏が就



(巡査派出所の一) (豊田駅前)

任した。

昭和二十六年七月一日警察法が改正せられ、それに基づき本町に於いても日野町警察は廃止され昭和二十六年十月一日を以つて国家地方警察に移つた。昭和二十九年六月八日警察法改正に依り、昭和二十九年七月一日を以つて国家地方警察より警視庁に編入され、警視庁日野警察と改称現在に至っている。

2 日野町消防署

日野町消防署の前身は、警視庁消防部八王子消防署日野町出張所として昭和二十年六月十日、日野町役場前に開所したものである。その当時、消防官吏二十四名が配属され、それに消防自動車一台、三輪自動車及びこれに対する附属器具の配置があつた。

庁舎は日野町役場前の日野町消防団本部（時の警防団）の建物を使用した。

この出張所は、そのままの機構で、昭和二十三年三月六日まで継続した。

昭和二十三年十二月二十三日消防組織法の制定公布により、消防と警察とは全く分離し、消防官吏の身分にあつた職員は、消防吏員となり、自治体の職員となつた。

消防の責任は、地方自治体長の負うべきものであることが明確となつたので、日野町は自治体消防署を設置して、住民の身体生命財産を水火災より保護すべき機構を整えるよう、町議会の議決を経てこゝに日野町消防署は誕生発足した。

発足当時の機構は警視庁消防職員の経験を有する消防署長以下十二名部署につき、警視庁廃庁に伴う財産分与委員会によつて配分された消防自動車三台とこれに附属すべき水管百二十本等の器具一式があつた。

その時の消防自動車々庫は旧日野町役場の入口にあつた。これは明治時代の役場庁舎が一旦巡査駐在所に転用され、更に改築の上本庫に仮用されたものである。

消防署新庁舎

(日 野 消 防 署)

昭和二十四年度に消防署新庁舎を建設すべく町議会の議決があり、現在地に新築、昭和二十五年一月七日移転した。現本庁舎の敷地面積は三〇〇坪 庁舎建坪三十八坪 望楼六五尺。

今や火災の対象となる建造物も漸増し、かたがた町民の要望に應えて、昭和二十六年十二月二十日豊田地区消防警備力強化のため、豊田消防派出所を新設し、消防自動車一台を配備し、消防署員一名を常時配属した。この消防派出所は昭和二十九年に日野町役場出張



所建物内に移転した。更に昭和二十八年十二月二十五日には、日野台地区の消防警備強化のため日野台消防派出所を、日野町役場日野台出張所建物内に新設し、消防自動車一台を配備し、消防職員を常勤せしめた。茲に於いて日野町消防署の人員機械の配置は理想に近いものとなつた。職員は発足当時の十二名では運営至難となつたので五名の増員があり、現在署長他十七名を以つて運営するに至つた。消防署の出動地域は相互応援協定の結ばれている市町村、立川市八王子市などであり、特別に七生村とは協定することになつている。

救急事務

なおまた水火災害の警戒防禦と共に、昭和二十六年度より、救急事務を担当することになり、救急車を運用し傷病者搬送に従事の処逐年その実績を挙げ、町民からその便利を悦ばれている。以上の通りその歴史は浅いものであるが、急速に都市化する日野町であるため、今後これに適応すべく運営と機構の整備活用を期さなければならない。

消防職員

階級	司令長	司令次席	司令補	士長	消防士	主事	計
人 員	1	1	1	1	12	1	17

消防自動車及救急車設備状況

(種別)	(自動車種別)	(年式)	(ボンパ型)	(使用年数)
消防自動車	ニッサン	六〇〇年型	二段バラン	一四年
消防自動車	トヨタ	六〇一年型	スタービン	一三年
消防自動車	トヨタ	六〇一年型	〃	一三年
救急車	トヨタ	一九五一年型	〃	四年

火災状況

年度別	昭和二十三年度	昭和二十四年度	昭和二十五年度	昭和二十六年	昭和二十七年	昭和二十八年
火災件数	六件	四件	七件	五件	五件	一二件
焼失坪数	二〇二坪	三二五、五坪	七五八坪	二二坪	四坪	四二坪
損害額	一、四七八、三〇円	三、二七五、五〇円	六、八七五、七〇円	二、六四、八〇〇円	一、六四、五〇円	一、三六、八四〇円

救急車運用状況

年度別	昭和二十六年	昭和二十七年	昭和二十八年	昭和二十九年
傷病者搬送人員数	一〇七人	三二三人	四四一人	四七六人

消防法 第七条

建築物の新築、増築、改築、移転、修繕、模様替、用途変更又は使用についての許可または確認をする権限を有する行政庁又は委任を受けたものは、当該許可認可又は確認に係る建築物の工事施行地又は所在地を管轄する消防長又は消防署長の同意を得なければ当該許可認可又は確認する事が出来ない。その合議状況を見るに、昭和二十六年九月六件、二十七年一一七件、二十八年一五九件、二十九年一五一件となつてゐる。

消防水利と通路

日野町は大体に於いて、水利に恵まれているがまだ都市計画が出来て居らず、通路も必要に従い処理するといった具合にあるが、須らく道路と消防水利とを並行して調整し、以つて天恵を有利に活用せんと考慮している。

3 日野町消防団

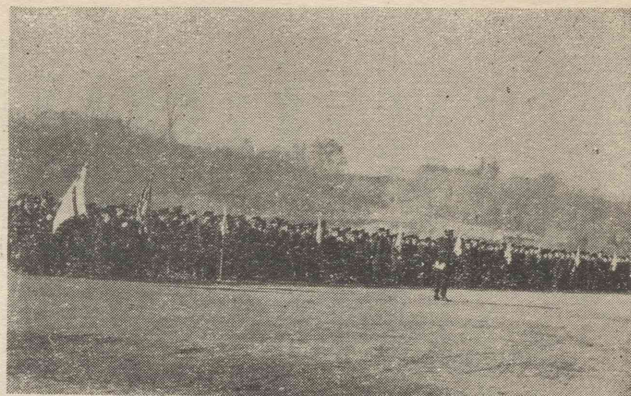
日野町消防分団（消防署を除く）は現在十一分団あり、各地域別に組織されている。分団の外に本団があり消防署と直接行動を共にする様になつてゐる。機具は腕用ポンプ二十二台、自動車ポンプ一台、三輪車ポンプ一台、動力ポンプ四台を備えている。

消防団のその昔は自然発生的で、部落毎にだんだんと組が設けられたものである。部落の住民は誰れ彼れの別なく総員が消防員といった工合であつた。火事があれば手桶の類で水をぶつ掛ける。次には龍吐水という水鉄砲の大きなものを使つた。水が息をついで走り出た。次に龍吐水を二つ組合せ水槽で囲んだのを龍越と呼び、たまに唧筒と書くことがあつた。カッカッと息をつく様な音が出るのでカコッ筒というわけだろう。又舶来的にポンプとも呼んでいた。龍吐水や龍越は江戸から伝わつたもので、大きな邸や寺院などで備付けた向きもあつた。この様な器具なので注水が至つて不十分なため、情況により破壊消防が有利な事があり、草屋根をむしり剝し時に家屋を押倒す様な場合もあり、竹梯子、鳶口、長さ三間もある刺又棒をかつぎ出したものである。

明治二十六年二月二十五日、北風はげしく、暮れて間もなく、仲町の東端から出火し、下町の東端まで両側四十六戸百余棟を焼払つた事があつた。遠い村々からも消防組が駆け付けたが、器具がないので手の着けようもなかつた。南裏の山王様境内の格納庫にあつた襤造り漆塗りの山車屋台も同時に焼けてしまつた。

腕用ポンプの備付では加組消防組が最初（明治二十五年頃）で東京から購入した。小型ではあつたが機械の調子が良く、いまだに使用されている。その後下町の第三部で新式のを買入れ漸次各組とも備付けた。大正の初め頃には日野には十部の消防組が組織され、その後桑田には五部の整備が出来た。

大正の中頃、警視庁消防署は、消防の指導と統制とを図るため、管下に消防団を組織せしめた。毎年春秋二回の



(日野町消防団)

厳格なる点検を行い、消防器具の点検操作放水などがあり、消防団の能率向上に努めた。日野町消防団は、昭和六年秋季の点検に際し、南多摩郡下最初の優良消防団として時の警視總監より表彰された。その後昭和十四年消防団は時局に依りて解体し警防団として再組織された。組織行動も一層規律的になり、軍隊と同様の観を呈するに至った。

消防員の服装は、当初は印半天、腹掛股引、草鞋掛で中には火除頭巾をかぶった者、極く稀に刺子装束を着る者もあつたが、漸次統制されそれに組や役割の記号を附ける様になった。警防団となつてからはその筋の指示もあり、漸次現在の洋装制服に改まった。

消防自動車の備付けは、昭和十一年で三多摩地方の町村としては最初のものであつた。これは大丸組の寄附にかかるものであつた。昭和十九年更に新式消防車一台を増設した。

戦後警防団は消防団と改称して今日に至っている。

日野町消防団役員(昭和三〇、三、一〇)

(分団別)		(職別)		(氏名)		(分団別)		(職別)		(氏名)	
本部	本部長	副団長	副部長	佐藤 豊	馬場 末	四	分団長	平野 義一		平野 義一	
"	"	"	"	遠藤 寿	田中 小三郎	五	"	遠藤 重義		遠藤 重義	
"	"	"	"	齋藤 利喜智	松崎 建雄	六	"	中島 一正		中島 一正	
"	"	"	"	和野 房太郎	和田 右左吉	七	"	関田 幸次郎		関田 幸次郎	
第一分団	分団長	"	"	和野 千代造	和田 千代造	八	"	石川 治甫		石川 治甫	
第二分団	"	"	"			九	"	峯村 菊太郎		峯村 菊太郎	
第三分団	"	"	"			十	"	小沢 藤吉		小沢 藤吉	
						十一	"				

消防行政の円滑な運営を図るため町条例(日野町消防委員会条例)を以て設置す。

委員構成 委員定数 一五名

(議選出五名)		(学識経験者五名)		(消防関係者五名)	
委員長	遠藤 一作	委員長	奥住 政市	委員長	下山 友吉
委員	桑原 正一	委員	渡辺 新助	委員	佐藤 豊
	立川 正次		小島 安藏		馬場 末
	篠崎 雅喜		小野 兼吉		遠藤 寿
	土方 主計		堀田 富之助		田中 小三郎

目的 消防に関する重要事項について町長の諮問に答え又は町長に建議する。消防職員及び消防団員の服務、待遇及び消防施設の改善その他消防に関して町議会に建議する。

第九 厚生

本町の厚生事業は社会福祉事業、保健衛生事業の二方面に大別することが出来る。社会福祉事業の内でも重要な事は生活困窮者に対する生活保護事業である。これは日本国憲法第二十五条の目的（生存権、国民生活の社会的進歩向上に努める国の義務）に則っている。この理念に基づき「国が生活に困窮する全ての国民に対し、その最低限度の生活を保証するとともに、その自立を助長することを目的とする。」と云う様に生活保護法第一条にうたつてある。

日野町に於いても此の法律の定める処により、厚生課に於いて生活保護事業を行つて居り、保護を受けたものを昭和二十八年年度に見ると八十九世帯で町の総世帯の二、一％で保護人員は三〇四人、総人口の一、八％である。これら被保護者を扶助の種類に別けると、生活保護世帯七十五世帯、生活保護人員は二四五人で、医療保護世帯は十四世帯、医療保護人員は五十九人である。

これら保護を要する困窮者に対して町としては生活資金の貸付も行い、二十八年度に於いては、貸付件数、八件、一万六千円、返済件数三件、六千円とである。又中元見舞、歳末慰問などを行つてゐる。

此の外、身体障害者福祉、児童福祉、留守家族遺家族の援護、災害救助、貯蓄、生活の改善その他社会福祉増進に努めてゐる。

1 公益質屋

日野町は、公益質屋を開設し町民へ小額融資を行い生活保護の目的に添わんとする為、昭和二十六年十一月公益質屋法（昭和二十六年三月二十九日法律第四五号）に準拠し町営として開設した。

資金は都借入金壹百万円、町費繰入金壹百万円、一時借入金壹百万円合計三百万円である。貸付は、一世帯八千円を限度とし、質物としては、衣類、装品具、債券等で、利息は一ヶ月三步とし、四ヶ月を期限としている。次にその利用状況を見ると左の如くなつてゐる。

(1) 職業別貸付世帯数

年次	労働者	俸給生活者	工業者	商業者	農業者	その他	合計
二七年	三二〇	二、九八〇	五〇	八〇	六五〇	二七	四、一〇七
二八年	三五〇	三、〇二〇	五〇	八五	六五〇	六三	四、二二八

(2) 職業別貸付点数

年次	労働者	俸給生活者	工業者	商業者	農業者	その他	合計
二七年	二八八	三、四三九	二〇	一六二	四五	五〇	四、〇〇四
二八年	三二五	三、九六六	二〇	一七五	六九	七〇	四、六二八

(3) 質物別貸付点数

年次	債券	業務用具	家具	装身具	衣類	その他	合計
二七年	二	一	一六	一三〇	三、七二九	一二七	四、〇〇四
二八年	五	一	三	一九六	四、〇九七	三二七	四、六二八

(4) 公益質屋一般利用状況

年次	口数	貸付金	口数	弁済金	利用収入	口数	在庫
二七年	四、〇〇四	五、二七、五元	二、五八	三、三六、三三	五二、五元	一、四九六	一、九五、七六
二八年	四、六六八	五、五四、四六	二、九七	三、七九、八八	六六、七二	一、六七	一、八四、六〇〇

2 国民健康保健

国民健康保険事業を見るに、当町の国民健康保険は昭和二十七年六月より町営として発足し、本年度で第三年目に当るが事業内容も急速に向上し、受診率に於いては南多摩郡の最高位にある現状で、昭和二十九年度は次に掲げる予算で運営されている。

事業勘定歳入

歳入合計	一	二	三	四	五	六
	国民健康保険税	一部負担金	国庫補助金	都立補助金	雑収入	雑収入
五、三九一、六〇〇	二、九四六、一〇〇円	三二、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇	一三、五〇〇
一〇〇%	五四、六	〇、〇	二、〇	一、九	二、二	〇、三

事業勘定歳出

歳出合計	一	二	三	四	五	六
	役場給付	保険給付	公債施設費	諸支出費	予備費	予備費
五、三九一、六〇〇	一、〇五二、四〇〇円	三、八六二、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一三八、〇〇〇	二二九、二〇〇
一〇〇%	一九、五	七一、六	一、九	〇、四	二、一	四、一

国民健康保険受診状況 (昭和二十八年年度平均世帯数一、〇二五戸被保険者、四、八九一人)

月別	件数	点数	費用額	受診率
4	547	27,941.1	349,264	11.1
5	669	41,155.6	514,445	13.7
6	642	47,622.2	595,278	13.2
7	691	53,778.8	672,235	14.5
8	670	51,232.8	640,410	13.6
9	606	41,256.8	515,709	12.3
10	634	48,390.7	604,883	12.8
11	527	34,776.2	434,702	10.7
12	589	40,793.3	509,916	12.1
1	508	33,658.7	420,733	10.4
2	493	35,600.6	445,008	10.1
3	618	43,903.2	548,790	13.2
計	7194	500,110.0	6,251,373	147.7

国民健康保険給付状況 (昭和28年度)

種別	件数	日数	点数	費用額
療養の給付	165	2,255	98,291.5	1228,644
一般療養	5890	27,614	356,368.5	4454,607
歯科診療	1139	5,216	45,450.0	568,122
計	7194	35,085	500,100.0	6251,373
療養費	50	1,164	11,142.7	133,557
助産の給付	60			60,000
葬祭の給付	30			60,000
合計	7334	36,249	511,252.7	6504,93

3 保 健 衛 生



(南多摩東部共立病院)

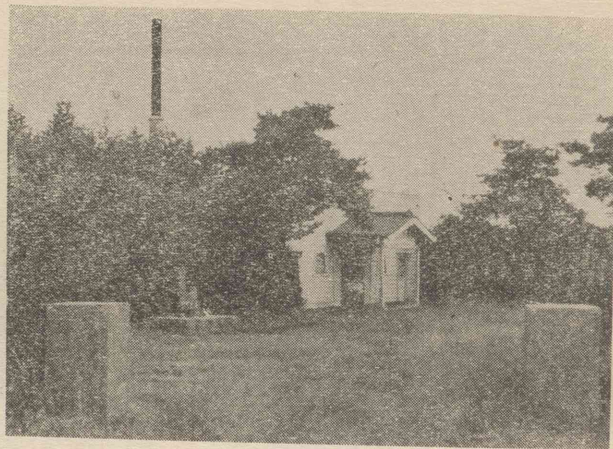
伝染病予防 昭和二十八年に伝染病発生に対処して日野七生・多摩の共立組合病院の設立を見た。従来伝染病発生の際は大体に於いて八王子市の台町病院か立川市の立川病院に収容されたものであった。昭和二十八年四月より開院、三ヶ町村発生の患者を収容し、凡そ年間延二、一〇〇人常時一二〇人〜一五〇人を収容している。この様にして町民の危急に応えている。

予防としては春秋の二期次の予防注射を実施している。

種痘、百日咳、デフテリア、腸チブス、

その他応急的注射を行い又蠅、蚤、蚊等の害虫駆除其の他病原菌駆除の為六月より九月にかけて四ヶ月間町の衛生係及び保健所の職員により消毒薬散布を行う。婦人会は毎回これに協力して伝染病予防に力を入れている。

狂犬病予防の対策として年二回(四月、九月)飼犬に予防注射を行う外保健所と協力し、野犬狩を行っている。



(日野町火葬場) (日野台附近)

塵芥処理 塵芥処理は衛生という面からも、又町内美化の点からも必要なことであるので、昭和二十八年四月から開始し、希望者に塵芥箱を配布し一ヶ月二十円の手数料を受けて清掃を実施している。塵芥処理に当る従業員は五名で三輪車一台をもつて塵芥焼却場(日野町川辺堀之内)へ運び焼却している。

塵芥を放棄せぬ様の標識

主として衛生上の見地から、河川の清浄を図り、塵芥や汚物を捨てぬ様又用水堀では食品類を洗わぬ様にとよびかけ要所に注意の掲示を立てることなども行なつたが、その実行成績はまだ充分とは言えない。昭和の初め出版された、「全国市町村名鑑」という大冊子中にわが日野町も載せてあるが、その特異点という所に『日野の通り筋に出たところが道の両側に清水の流れている溝があり家並も落付いて一見感じがよい。ところが驚いたことにその溝の中には茶碗かけ、罐詰のから、塵あぐた果てはぼろぎれ、ちぎれ草履の類までつがつているのである。同行の呑太ふん慨して杖にてすくいあげ公德心の欠乏甚しい哉と慨歎した。停車場に至れば大瓶に冷水を満しあり、駅長の心尽しはじめて興奮収まつた。』駅長の真心うれし冷水水(ある年の夏桂月誌)

現在吸込という不完全な溜池を各自作つて一時をしのいでいる向きがあるが、住宅の増加と共に汚水の問題も重要

さを加えて来た。

本町に於いては既に日野台方面の汚水を浅川に向つて排水すべく大規模に施工中である。

生活保護

生活保護法による保護世帯の原因調べ(昭和二十九年八月三十一現在)

区分	生 活 保 護 世 帯 の 原 因									
	死亡又は不在	障害	老衰	病院	失業	事業破産減少	家族扶養者の増加	災害	援助減財産の少喪失	その他
計	五四	一〇	三〇	八四	二	一五	二	一	一	一九八
医療	四		五	四二						五三
助産										
葬祭										
生業	九	二四	八	八		三五				三〇
住宅	二〇	四	一七	二二	一一	七				四二
教育	一一	四	一七	二二	一一	七				七三
生活	一一	四	一七	二二	一一	七				七三

生活保護法による保護実施状況(昭和二十九年四月〜八月)

支出区分		世帯		人員		延人員		金額	
民生委員費	七三	三〇	一〇七	三〇五	六九〇、〇〇〇	二、一六三、八〇七			
民生委員費	五三	一	五八	三〇五	二、一六三、八〇七				
助産	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
葬祭	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
生業	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
住宅	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
教育	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
生活	二	二	二	二	二、一六三、八〇七				
合計	二二〇一	六〇二	三、〇一〇	二、一六三、八〇七					

医療衛生機関

診療所一、隔離病舎一、医院六、病院一、医師一七、歯科医院五、歯科医師五、薬局四、薬剤師二二、獣医一、助産婦一〇、看護婦二〇、接骨院一、灸師一、

定 期 種 痘	第一期	第二期	第三期
該当者実施者完了率	二七・一七八・四八%	四六・五四・五五	四三・三三・四二
該当者実施者完了率	二七・一七八・四八%	四六・五四・五五	四三・三三・四二

腸チブス	追加免疫
該当者実施者完了率	五八・八五・八一
該当者実施者完了率	五八・八五・八一

百日せき	
初回免疫	追加免疫
該当者実施者完了率	該当者実施者完了率
五八八三五九	六、一五二四二〇
八、〇	

ジ フ テ リ ア		
第一期	第二期	第三期
該当者実施者完了率	該当者実施者完了率	該当者実施者完了率
三七二二九五	四六五三八〇	四三三三三五
九、四	八、〇	七、一

海外引揚者数調

一般引揚者	軍人軍属	合 計	未復員引揚者
一七六	二、二二〇	二、三八六	一二六

児童福祉施設

委託私立保育園の調べ（昭和二十九年八月三十一日現在）

施設名	目的	収容定数	現在収容児数	経営者	所在地
日野保育園	幼児保育	六三	八八	野原キク	日野 西
日野第二保育園	"	四二	五三	同	オリエント工場内
日野台保育園	"	七〇	九六	室野文一	日野台高倉
至誠学舎保育園	"	六八	七五	稻永ヨシ	立川市錦町
合 計		二四三	三一二		

児童遊園地

（昭和三十年三月二十日現在）

施設名	所在地	面積	施設内容	備考
下町	下町二、八〇八	二七三坪	回転塔一滑台一ブランコ三	
東光寺	東光寺四、八四六	三〇〇	同	
川原	川原一、八六六	一五〇	同	
豊田	豊田一、九五八	三〇〇	同	
日野台	日野台六、八〇一	五〇〇	同	
東光寺	東光寺四、一四一	二二〇	同	
豊田	豊田一、〇四四	三〇〇	同	
"	"	一七五	同	
"	"	三〇〇	同	
日野台	日野台七、四二七	一七〇	同	
谷仲山	谷仲山六、一二〇	二七〇	同	
日野	日野一、〇九六	二七〇	同	
下町	下町二、五四一	二七〇	同	
森町	森町二、五四一	二七〇	同	
豊田	豊田一、〇八〇	二〇〇	同	
東光寺	東光寺三、四七	三〇〇	同	
日野	日野四、三〇七	八〇	同	
合 計	一七ヶ所	四、二七八坪		

妊産婦届出及出産状況

月 別	二八年	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	二九年	二	三	計
妊婦届出数	三四	二六	四一	四二	三三	三五	四六	二八	三五	二九	二八	三四	四一〇
出 産 数	四〇	二九	二八	二四	二〇	三〇	二七	一七	三二	四〇	三七	二九	三五三

乳幼児健康診査成績

月 年 令	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一年	一年二	總計
受 診 数	二二	一九	一八	二六	二七	二一	一四	一九	二三	三六	八	二二八
判 定												
級 外	二	三	一	一	二	四		一	四			一八
上	六	六	八	九	八	三	五	六	七	一一		六九
中	一	八	五	六	八	八	七	八	六	一六		八八
下	一	二	三	七	六	三	二	三	五	二	三	三七
不 良	二		一	三	一	二		一	一	五		一六

法定伝染病発生転帰別表

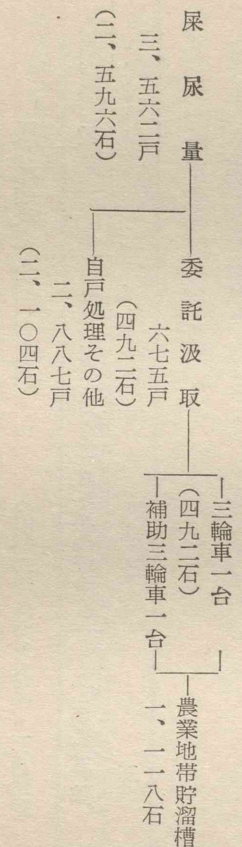
(表中()内は死亡数)

病 種	年 度	二四	二五	二六	二七	二八	全治	死亡
赤 痢		一七(五)	七七(五)	五二	五四	五三	二四三	一〇
疫 痢		四(一)	一六(四)	二一(六)	一七(五)	三二(五)	六九	二一

汚物清掃事業

A 尿 尿 尿 処 理

尿尿処理状況(除農家対象地域)約二七日間 (昭和二十九年八月三十一日現在)



作業対象戸	処 理 量	一日平均処理量	一戸一日平均排出量
六七五戸	四九二石	三〇石	二、七升

運搬車	処理量	一日回数	一台積載量
三輪トラック(一台)	四九二石	六、二回	四、八石

B 塵芥処理

塵芥処理状況(約二七日間)

(昭和二十九年八月三十一日現在)

作業対象戸数	塵芥量	一日平均処理量	一日運搬回数	一戸一日平均排出量
一、五〇〇戸	一二、九六〇貫	四八〇貫	三回	三二〇匁

保健所

保健所は、保健所法に基き全国各都道府県及び政令で定める市が設置し、地方に於ける公衆衛生の向上を図るためのもので、その事業は衣食住の改善及び疾病の予防、妊産婦乳幼児の衛生その他、体位向上を目的とする一切の衛生指導である。従来の取締衛生行政から助長衛生行政への進展を示すものであつて、公衆衛生の新紀元を劃したものである。今その使命を列挙すれば左の如きものである。

- 一 衛生思想の普及及び向上に関する事項。
- 一 人口動態統計に関する事項。
- 一 栄養の改善及び飲食物の衛生に関する事項。

- 一 住宅水道、下水道清掃その他環境の衛生に関する事項。
- 一 保健婦に関する事項。
- 一 公共医療事業の向上及び増進に関する事項。

民生委員

一、日野町管内に十四名の委員を各地区に配置している。委員は次の通りである。

島本松治(委員長)、大貫作蔵、遠藤重義

田中紀子、土方清子、田中兼太郎

古谷梅雄、高木昂、佐野イネ

竹井気栄、加藤正夫、清水祿之助

金子恵、石井富貴子

二、目的、生活保護法に依る各種保護法扶助の基準に応じて実施に当っている。

南多摩東部共立病院

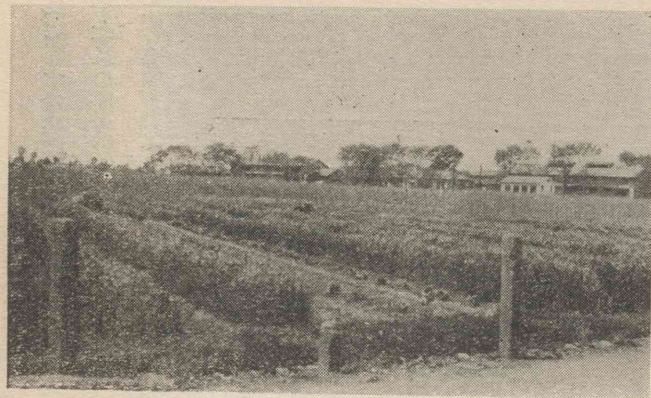
所在地は大宇川辺堀之内八一〇番地小字中大久保である。元の帝室林野局苗圃、今の神学校の北にある。日野町、七生村、多摩村の三町村で病院組合を作り、伝染病患者を収容して治療するところである。敷地は一、三三六坪、建物は一三五坪、平屋建。病室は四室ベット一七で、必要に応じ幾分収容を増すことが出来る。常任医師の住宅があつて常任医師一人。外に看護婦二人事務員一がいる。

經常費は年額百万円で組合町村の人口割で分担支出する。
共立病院町村別患者収容数 (昭和二十九年年度)

病名	日野町	七生村	多摩村	稻城村	計
赤痢	七八	二九	八	三三	一三八
疫痢	三九	二	〇	〇	四四
猩紅熱	二一	五	三	一〇	二九
日本脳炎	五	〇	〇	〇	九
パデラチフリ	二	〇	〇	〇	三
合計	一四八	三六	一四	一七	二一五

第十 農林省試験所

農林省蚕糸試験場日野桑園



(農林省蚕糸試験場日野桑園)

明治四十四年五月農商務省原蚕種製造所が杉並区高円寺に設置され、次いで国内蚕糸関係の枢要地に支所が置かれた。この原蚕種製造所は、その後蚕業試験場となり、更に蚕糸試験場となるにつれ、その規模は次第に大きくなった。

その後高円寺に於ける桑園の不足を補いまた環境地質等の関係もあり、日野町万願寺に桑園を作った。この時小名源平島の篠簾も開拓されて桑園に充てられた。これが日野桑園の始まりで現在の第二桑園である。

その後昭和二年には日野仲田に現在の第一桑園が、昭和十二年には更に接続地河原に第三桑園が設置された。この第一桑園内には蚕室も増築され、その他蚕桑実験室及びこれに附随する建造物が増築されて現在に至った。

現在日野桑園は建造物の敷地約三町歩、桑園十二町歩、道路二町歩計十六町歩の面積で蚕糸試験場に於ける栽桑養蚕に関する試験調査は大部分日野桑園で行われている。職員約百名、蚕及び桑の品種改良、栽桑技術の改

良に関する基礎研究、桑の肥料及び土壤に関する研究、桑の繁殖に関する研究、蚕の遺伝に関する研究、蚕の飼育技術改良の研究、養蚕標準技術の研究、蚕種製造技術改良の研究等も行つて居る。これら諸研究は次第に成果を結び大なる実績を挙げつつある。次の表はその一例を示すもので桑園面積が減少したにもかかわらず、生絲の生産量は向上しているのがわかる。

蚕糸に於ける科学技術向上の実績

	大正4年 1915年		昭和27年 1952年	
		%		%
生糸生産量	252,865	100	256,687	102
繭産額	46,474,280	100	27,545,718	59
掃立卵量	190,440	100	174,819	20
桑園面積	453,802	100	174,819	39

昭和二十九年に、世界中ただ一つという人工結霜装置の一試験室が特設され、随時霜を結ばせ、桑の若葉に及ぼす害や霜の予防についての研究をなしつつある。

農林省淡水区水産試験場

所在地東京都南多摩郡日野町字宮三九九

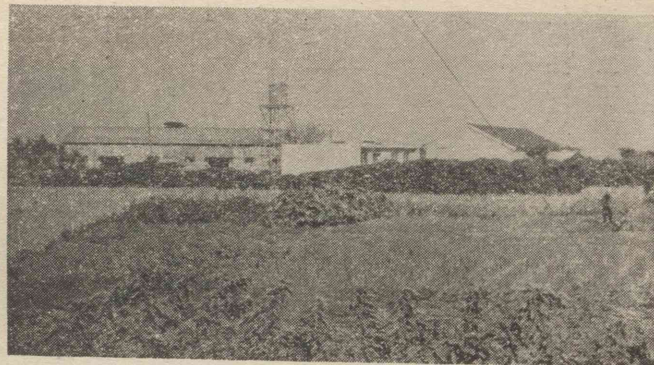
淡水産試験場は昭和二十六年四月水質が良いのと敷地買収が容易であつた為に、現在の処に設置計画を立てて昭和二十八年四月から業務を開始した。都内月島の東海区水産研究所内より分離して現在の所に引移つたのである。

敷地約一万坪、

養魚池五十坪

建物三百坪、

職員三十二名を擁し研究室も第二第三と建設予定にあり、養魚池の拡張なども計画されている。



(農林省淡水魚試験場)

「当面の研究課題は、内水面即ち河川や淡水湖に於ける魚族の増殖並びに品種改良及び河川の開発利用に依つて生ずる障害、農薬肥料に依る害、鉋山の鉋毒、工場の廃水及び一般汚水、その他淡水魚繁殖生育に害ある悪条件についての対策研究である。

第十一 公共企業

電灯・電力

日野町の電灯電力は、東京電力株式会社の配電にかかるもので、日野町（仲町）に「日野の電力」の看板を掲げて八王子営業所日野派出所がある。この派出所では日野町及び七生村の全部と八王子市の一部を受持つている。

日野にはじめて電灯が点けられたのは、大正五年五月で、その当時は東京電灯株式会社といつて相模川上流の駒橋四方津の水力発電所から送電されたものである。送電線は以前から地内を通つて居たが、すぐに電灯をつけるわけにはいかなかった。八王子市は別として郡内では最初の点火であつた。これは有山重世、天野清氏等の奔走の結果といつてよい。当時国道沿い及び四谷方面を説得勧誘の結果漸く二百戸二百九十八燈の申込みをまとめ辛うじて点灯施設を見るに至つたものである。一戸僅かに一灯といった向きが多かつたが、養蚕期に際しその利便を実験し忽ち灯数増加を申込む有様で、東光寺部落に延長を見、次いで大正七年五月、下田、新井、石田、万願寺、宮、上田、堀之内豊田、川原に及び全町に点灯される様になつた。

昭和三十年三月現在で電灯需用者四、三九二軒に及び、そのうち定額利用者は僅かに六四二軒で灯数一、四八二、他は全部従量利用者即ちメートル使用で、その軒数三、七五〇、灯数は、二五、一七九燈に及んでいる。内大口使用者は二十三軒二八二キロワットで、外に業務用電力使用者は一軒仁和会病院用で年間四七キロワット。また普通小口電力使用者一一四軒五〇九キロワットで、これは多く小型モーターの半馬力乃至三馬力を使用し、精米所等の外井水

汲上用給水用ポンプ運転等に利用されている。最近ではネオンサイン、螢光灯使用の向きも漸々増加する傾向にある。電燈引込は通常、業者これを請負い会社で検査する。屋内の諸設はメートル機を新規需用者側で買い取る決めている。

電力使用は当業者及び有志によりて、動力供給方を会社に要請したが、会社では電力需用少額であるにも拘わらず工事費多額で採算がとれないので、容易に応じなかつた。そこで有志及び当業者が醸金して工事費を補助し、且つ組合を作つて、四三軒九二馬力程をまとめた。組合には精米業共同精米所其他小型モーター使用者があり、其他組合費支出のための有志組合員もあつて、有山重世、山本芳五郎、渡辺武兵衛氏などが幹旋に當つた。

動力用として高圧電線を増架し、これを全町内に普及した。

電気及び瓦斯料金にはその一割を町税として賦課する定めで年額七百八拾四万四千円を収めている。

ガス

ガスは東京瓦斯株式会社から供給されている。八王子事業所日野町派出所がある。昭和十四年五月八王子タンクから日野のヂーゼル工場へガスを引いた。次に昭和十六年に立川の瓦斯発生装置が完成したので、そこから日野へ日野橋を渡つて鉄管を通した。これは八王子市へのガス管に接続している。予備として日野台にタンクがある。

ガス使用量は本年三月分約二十五万立方メートルで一ヶ年間料金は約四百二十八万円に達する。ヂーゼル会社の使用量は圧倒的に多い。全国的に見て市政を布いた都市にてもガス供給の設備の無い向きが多く、また人口二万以下位の町には皆無の現状である。日野は此点大いに恵まれており、近く豊田方面へもガスの供給を見る予定である。

第十二 日野町農業協同組合

日野町農業協同組合が設立されたのは昭和二十三年三月であるが、これまでは遠く明治二十九年四月に創設された農会を最初として信用販売購買組合——農業会——農業協同組合という変遷があつたのである。

日野町農会

本農会は町内の農事改良を図る目的を以つて明治二十九年四月当初初めての農業団体として発足し、日野義順氏を会長に会員五百余名を以て結成し、主として耕種改善に力を注いできたが、明治三十三年、新たに農業法が發布されてから、全国的の組織系統が確立され、本会の事業も亦急速に發展して、大正八年農業技術員において農業技術方面の指導に努めた。

日野町信用販売購買利用組合

本組合は農村の経済不況克服のために起つた経済更生運動の結果として昭和十年産業組合法に基づいて設立されたものである。

初代の組合長には古谷栄氏が就任し、組合員総数四百余名をもつて発足し共存共栄の旗幟の下に一致団結して農村恐慌に対処したのである。即ち現在農業協同組合の有する土地、事務所、倉庫、作業場等の諸物件は殆んどが此の時代に建設取得されたものである。

その事業は当初組合員の貯蓄を取扱うと同時に生産資金の貸出しを行う一方、肥料農具の販売に重点を置き、次い

で販売と利用の事業を併せ行うに至り、漸く本組合の目的とする農民相互扶助の経済組織が有機的になり活発な業績をあげた。しかるところ農業の指導機関である農会との統合問題が起り、遂に昭和十九年二月農会と利用組合は解散の上日野町農業会へと移行したのである。

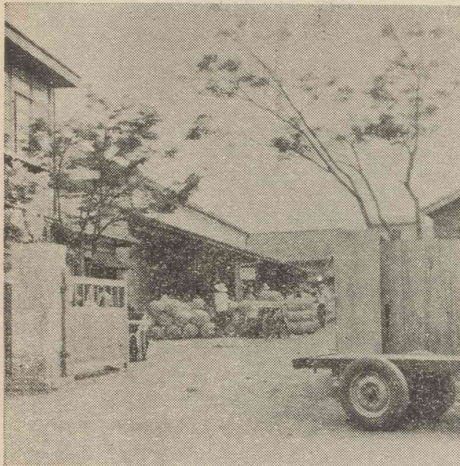
日野町農業会

本会は戦時下国家の要請に依つて農業団体法に基づき設立されたもので、その目的には、「農業に関する国策に即応し農業の整備発達を図り且つ会員の農業及び経済の発達に必要な事業を行う」と規定されている。而して、昭和十九年三月に設立総会を開き会則を決議して初代会長に古谷栄氏を選任し会員一千五十名を以つて発足したのである。

その事業は従来農会が行つて来た指導事業と産業組合が行つて来た経済事業とを同時に併せ行うものであつたが、それらの凡ては戦争目的遂行のための国家の至上命令として行われたものであり、会員の自主的活動は全く認められていなかった。かくて設立以来四年、戦争の終結に依つて国家機構に大変革が起り、占領下農業協同組合法が実施されるに及んで本会は昭和二十三年二月法的解散をしたのである。

日野町農業協同組合

本組合は昭和二十三年三月創立総会を開催して定款を決定し、これに基いて役員を選任し事業計画を樹て、第一步を踏み出したが、



(農業協同組合麦の出荷)



(秋 繭 集 荷)

戦後の社会機構の一変から経済組織の混乱時代にあつたため、その経営は非常な困難を伴つた。即ち上級の系統組織が変つたために組合の運営に甚だしく不便を來たし、事業遂行上円滑を欠く事が多く、且つ組合自体としても基本的な固定資産額と出資金との不釣合、及びその他の諸条件にて組合当事者の苦心にもかかわらず、赤字が漸次累積したためその運営に支障を來たすに立ち至つたのである。ここに於いて町当局の積極的な援助によつて農協再建委員会が組織され数次に互る協議の結果、昭和二十八年八月役員の総改選を行つて町長を組合長とする新陣容により、再建の態勢を整えた。目下役職員並に組合員が一体となつて、不振を挽回し明日への発展の基礎を作るために懸命の努力を続けている。

次に組合の変遷と最近に於ける概況を示す。

一、歴代の会長及び組合長

1、農 会 長

(就任年月)
明治二十九年四月

(辞任年月)
明治三十九年三月

(氏 名)
日野 義 順

2、産業組合長

(就任年月)
明治四十一年二月
大正五年三月
大正九年四月
大正十二年五月
大正十四年十月

(辞任年月)
大正五年二月
大正九年四月
大正十二年五月
大正十四年十月
昭和十九年二月

(氏 名)
佐藤 信 民
天野 清
佐藤 仁
齊藤 文太郎
有山 亮

3、農 業 会 長

(就任年月)
昭和十九年二月
昭和十九年四月
昭和二十年七月
昭和二十一年三月
昭和二十二年三月
昭和二十三年三月

(辞任年月)
昭和二十年三月
昭和二十一年三月
昭和二十二年三月
昭和二十三年三月

(氏 名)
古谷 榮
古谷 剛次郎
生沼 久 作
渡辺 年

4、農業協同組合長

(就任年月)
昭和二十三年三月
昭和二十六年六月
昭和二十八年八月
現在に及ぶ

(辞任年月)
昭和二十六年六月
昭和二十八年八月
現在に及ぶ

(氏 名)
古谷 榮
谷 光 藏
齊野 次 郎

二、農業協同組合現役員（昭和二十九年十月）

組合長理事	齊野次郎	理事	平信吉
副組合長理事	安西信	監事	渡辺新助
副組合長理事	滝瀬為一	監事	阿川勉治
理事	奥住明良	監事	清水芳雄
理事	立川克己	監事	遠藤一作
理事	天野弥七	監事	三浦重春
理事	清水祿之助	監事	金子新太郎
理事	桑原正一	監事	山口高靖
理事	出崎音吉	監事	
理事	篠崎雅喜	監事	
理事	平国藏	監事	

三、事業の概況（昭和二十九年三月三十一日現在）

組合員数	九三二名	（正組合員七〇九名、準組合員二二三名）
出資金	九四九、五〇〇円	（出資準備貯金一三三二、〇〇〇円を含む）
貯蓄金	一、六五七〇、〇〇〇円	（建物、土地、設備物件其の他）
貸出金	五三三七、〇〇〇円	（肥料、飼料、農薬等）
固定資産	四五八三、〇〇〇円	（米、麦、甘藷等）
購買売上高	八七〇九、〇〇〇円	（醤油）
販賣売上高	五五一七、〇〇〇円	
加工売上高	六二三、〇〇〇円	
総利益	五六二七、〇〇〇円	
総損金	三九二七、〇〇〇円	

第十三 神社

◎八坂神社



（八坂神社）

所在地	東京都南多摩郡日野町大字日野二五四一番地（宮司 土淵氏）
祭神名	素盞鳴尊
配祀	櫛御氣野命（素盞鳴尊の別命） 倉稻魂命（食物の神。稻荷様の主神） 大山咋命（山の神）
例祭日	九月二、三日

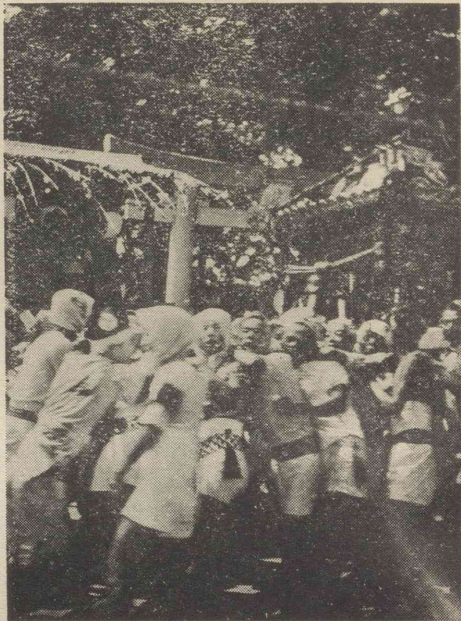
祭神 素盞鳴尊は天照大神の弟といわれる。荒々しい玉神としての伝説、雨あられ、農業神、出雲民族の神、新羅との交渉、疫病神の伝承等、後代仏教の流行に伴って印度の牛頭天王を同神とする説（備後風土記等による。又本地垂迹説による）が、出て来た。山城の国（京都）八坂郷に祀られ祇園社とも云われた。日野では祇園社と云うものはなく一般に牛頭天王の名を取り「天王様」とよんでいた。今は漸く八坂神社と唱へることが多くなった。

由緒 創立年代は不詳であるが、古書によれば古往日野本郷に多摩川の流に沿って深淵があり、それを土淵と云

つた。そのため此の附近を土淵の庄と云つたのであるが、多摩川の洪水の後何か怪しい光るものが数夜の間その淵に見えたので、老翁がこれを拾い上げた処、牛頭天王の神像であつたため、里人は喜んでこれを請け、祠を建て、鎮守として祀つたとしてある。

そして応永五年（西暦一三九八）將軍足利義持の時代、僧義雲（鎌倉時代の高僧義雲とは別人であろう。）が土淵山観音院普門寺を開基するに當つて、この牛頭天王社の別當となつて管理した。永享年間（一四二九―一四四〇年）將軍足利義政の時代に権少僧都智伝が社殿を造営中興し、元龜元年（西暦一五七〇年）足利將軍義昭の時代、現在の位置に境内を定めて奉遷したと云われている。

下つて慶安元年（西暦一六四八年）七月十七日徳川三代將軍家光が天下安全、国土泰平の祈願として社領免除の旨を下し、朱印地十四石を寄進した。家光以來徳川累代の將軍の朱印地十四石を寄進の御朱印写がある。なお享保十七年（西暦一七三二年）將軍徳川吉宗の時代、別當普門寺住職長快が牛頭天王像興立を計画し、佐藤八兵衛忠勝、土方甚八郎等講中と共に江戸の仏師に依頼、翌年六月十八日に完成し、元文元年（西暦一七三六年）六月十二日本殿に安置した。次いで彼は拜殿一字の建立を計画したのである。その計画にもとずき、寛延二年（西暦一七四九）將軍徳川家重の時代十一月第十五世法印権大僧都快伝を中心に日野郷善男善女の寄進によつて拜殿を新しく建立した。その後社殿が荒廢したためか、法印権大僧都尊盛が再建を計画し、次の同盛信の時、寛政十二年（西暦一八〇〇）將軍徳川家齊の時代に完成した。これが現在の社殿ではないかと考えられる。棟札によれば先師法印尊盛と佐藤七郎左衛門の心願にもとずき、普門寺住職権大僧都法印盛信、名主佐藤彦衛門、当所馬場半兵衛、世話人馬場藤七外世話人氏子中の努力によつて出来たもので、武蔵国大里郡上吉見領村の住人、大工須長伊右衛門源国信、須長織衛源信安の父子



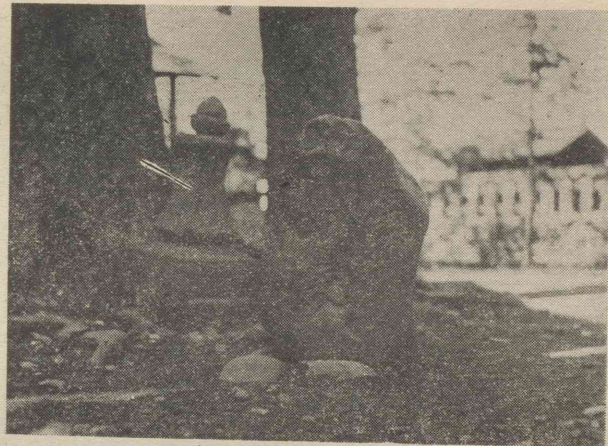
（八坂神社祭礼）

が、棟梁となつて建てた様に記してある。然し彫刻師は誰か良く解らない。これより五十年ばかり前の寛延二年の長快の時の拜殿新建の棟札には上田邑巧匠夫野市右衛門の名があるが、この本殿の彫刻と関係があるかどうか不明である。

慶応三年（西暦一八六七年）十月將軍慶喜が大政奉還、翌年（慶應四年途中より明治元年）、神仏混淆禁止を新政府が出したため、普門寺は別當をやめて、高木吉蔵の弟浜之助が、普門寺の山号をとり、土淵藏人と名乗り祠掌として新政府神祇官に願ひ出でて承認された。

社格設定に際しては氏子四百に満たないと云うので村社に列せられた。明治七年（一八七四）九月佐藤俊正の願ひにより、有栖川宮二品熾仁親王より特に当社のため「八坂社」の三字の染筆をいただいた。現在の社殿及び鳥居の扁額は之を鰺刻したもので真筆は佐藤家にある。この扁額は以前の木造鳥居に先ず掲げられ、龍の彫のある額縁、唐破風様の屋根の附いたものであつたが、大正十二年石の鳥居に建改める際取外された。今社殿に掲げてあるのはそれ修理したもので、石鳥居の額は寒水石の板に新しく模彫したのである。別に「祇園社」と云う立派な額が神輿庫内にあるが、以前は、この額が社殿に掲げてあつたと思われる。

明治中頃迄に各町内で祭礼に當つて習慣だつた奉納大幟には「祇園会」と書いたものもあつた。



(八坂神社筆塚)

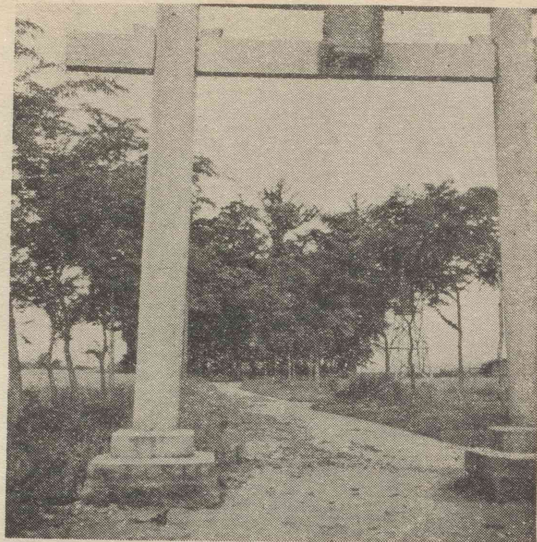
現在の神輿は明治十三年（一八八〇年）九月完成したもので、佐藤俊宣の發起により御飯屋その他の附属品共当時の金で一千円以上かつたようである。鳥居の後にある石燈籠は同年、横町、森町、金子橋、北原の四町内で寄附した。翌明治十四年、土蔵の神輿庫が境内南東隅に出来た。大正四年下河原の溝呂木龜太郎、同力蔵が、本殿前に石造高麗狗一對を寄進し大正八年には玉垣が竣工し、大正十二年に木造袖垣造りの鳥居を石造に改築。昭和三年（一九二七）に覆殿、神輿庫（石造）境内末社八幡社の改築が完成し、現在に至っている。

◎日野宮神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字日野字上屋敷三六七番地（宮司土淵氏）
祭神名 天御中主尊 高魂尊
日奉宗頼 日奉宗忠

由緒 創立年代は不詳であるが、武蔵七党の中の西党の祖日奉宗頼が武蔵国の国司となり、此の附近に城を築き、その孫西内大夫宗忠が西党の始祖となつて、その子孫永く此の地に住み、祖神天御中主神、高魂尊、先祖の日奉宗頼、宗忠を祀つて日野宮権現と称した。日野町の地名とも関係深いものと思われる。武蔵武士、新編武蔵風土記、武蔵名勝図絵、皇国地誌等の古書に日野宮権現の記事がある。

例祭日 九月十三日



(日野宮参道榊並木)

社殿 本殿 流造 柿葺 建坪方四尺
拜殿 寄棟造 亜鉛板葺 建坪五坪
覆殿 切妻造 亜鉛板葺 建坪四坪
工作物 鳥居 神明鳥居 石造 高十四尺 柱径一尺二寸

◎神明社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字日野字東光寺西五〇八二番地（宮司土淵氏）
祭神名 天照大神

由緒 創立年代は明らかでないが、武蔵七党の中の西党の一派立川氏が此の地に住み、伊勢神宮を勧請したとも、和田義盛が執権北条義時に敗れ、その残党がこの地に住み、伊勢神宮を勧請して社を建てたと云われている。

例祭日 九月九日
社殿 本殿 内殿 神明造 板屋根 間口二尺 奥行一尺
外殿 流造 亜鉛板葺 間口四尺 奥行三尺
拜殿 流造入母屋向拜 亜鉛板葺 建坪十坪五合 間口三間半 奥行三間
工作物鳥居 神明鳥居 入造石 高二間 柱間一間半
境内 官有地（現在譲与地）三百八十一坪

往年当時の土淵宮司の案で、神明社の社殿が建造されたが、後、火災に罹り、久しくして現在の社殿が建てられた。以前、境内には杉の大木が生い茂り、近村よりの目じるしとなつて居たのを、昭和二十一年日野小学校の建築用材として伐採し、材木不足の際大いに役立った。古い杉が数本残っている。あとには直ぐにさわらなどが栽植された。

◎神明社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字日野字山下三〇六九番地（宮司土淵氏）
祭神名 天照大神

由緒 元龜元年（一五七〇年）將軍足利義昭の時代、谷伊予という者が、伊勢神宮を勧請して、今の地に社を建て、享保二十年（一七三五年）將軍徳川吉宗の時代、谷源六郎が土淵山觀音院普門寺に寄附し、その後明治二年八坂神社の末社となる。

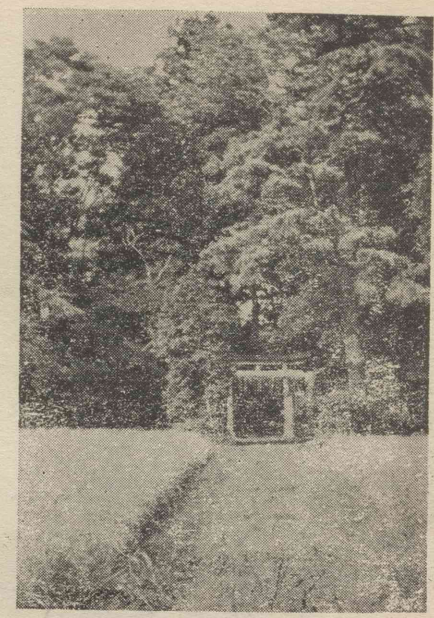
例祭日 九月十九日

社殿 本殿 流造 亜鉛板葺方三尺
覆殿 間口一間半 奥行二間半
境内 官有地（現在譲与地）二百七十坪

◎別府神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字宮字東耕地五二番地（宮司土淵氏）
祭神名 不詳、或云、別府太郎

由緒 むかし、宮村と上田村と土地争いがあつて、宮村地頭別府太郎が身を以つてその衝に当り、遂に勝訴するこゝとが出来たので、里人はその霊を祀つて社を建てたとも云われ、或いは鎌倉時代別府太郎という武士が此の地で戦



（別府神社）

乗馬と共に深田に陥ちて戦死し、里長の夢枕に「我が霊を祀らば此の地を守らん。」と出たので社を建てて之を祀つたとも云う。

例祭日 九月一日

社殿 本殿 流造柿葺 建坪方四尺五寸
拜殿 寄棟造 亜鉛板葺 三坪
境内 官有地（現在譲与地）百二十五坪

◎北野神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字上田字町家四八〇番地（宮司土淵氏）
祭神名 菅原道真

由緒 創建の年月は詳でない。明治初年上田村として神社創建の必要を認め、当所の旧家平野嘉市の庭外私社天満宮を氏神として祀つた。新編武蔵風土記には平野家の社としてある。

例祭日 九月一日

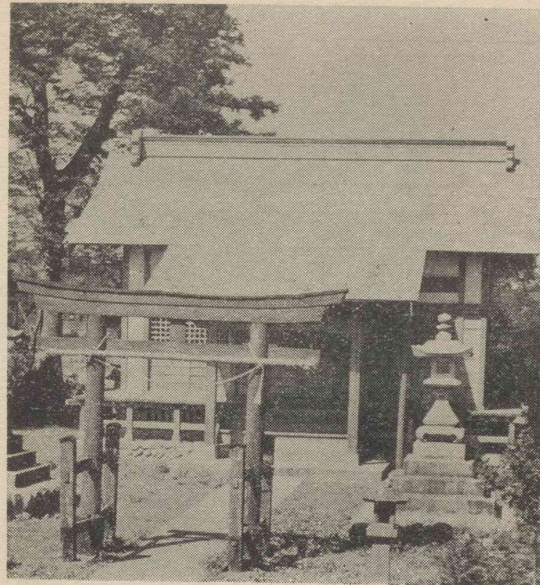
社殿 本殿 流造 柿葺 方三尺
覆殿 切妻造 亜鉛板葺 壹坪
幣殿 〃 〃 〃
拜殿 入母屋造 〃 五坪
工作物 神明鳥居 コンクリート高一丈

境内 官有地（現在譲与地）八十五坪

◎日 枝 神 社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字川辺堀之内字林際五九四番地（宮司土淵氏）
祭神名 大山咋命

由緒 詳ではないが、徳川時代の初に、川辺堀之内村設置に当り、里長が京都の比叡山麓の日吉大神を勧請奉仕して、社を建立し今に伝えたという。



（石 明 神 社）

例祭日 九月一日

社 殿 本殿 流造 柿葺 方三尺

覆殿 切妻造 草葺 五坪

拝殿 切妻造 草葺 五坪

工作物 神明鳥居 石材高一丈

境内 官有地（譲与地）二百十二坪

◎石 明 神 社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字新井字西耕地一四六番地（宮司滝瀬氏）

祭神名 猿田彦命

由緒 創立年代は明らかでないが、慶長二年（一五九七年）豊臣秀吉の頃、寛永二年（一六二五年）將軍徳川家光の時代、寛文十三年（一六七三年）將軍徳川家綱の時代、

元禄十二年（一六九九年）將軍徳川綱吉の時代、享保二年（一七一七年）將軍徳川吉宗の時代、等それぞれ社殿改築遷宮の棟札がある。

神体としては約一尺五寸ばかりの男根形石棒があり、石明神或いは石大明神と通称している。寛永二年の棟札には堀之宮大明神とあるのを見れば、用水の關係の神とも考えられるが、最近宮司滝瀬氏が氏子の旧家を調査した結果、本神社の祭神は猿田彦命であることが明らかとなった。昭和二十七年十月拝殿新築、本殿、覆殿移築遷宮せられた。

例祭日 九月一日

社 殿 本殿 神明造 一坪五合 間口一間 奥行一間半 柿葺

覆殿 切妻造 五坪 鉄板葺

拝殿 切妻造 七坪半、間口二間半 奥行三間 鉄板葺

工作物鳥居 両部鳥居 木製 高一丈四尺

境内 官有地（現在譲与地）二百六坪

◎八 幡 大 神 社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字下田字家生田一八四番地（宮司滝瀬氏）

祭神名 応神天皇

配 神 仁徳天皇

由緒 創建年代は詳らかでない。一説に暦応二年（北朝の年代一三三九年）足利尊氏の頃、武蔵七党の一である西党の祖西内大夫宗忠の弟由井日別当宗弘の孫、田村駄太郎知実が此の地に住んで、男山八幡宮を勧請して社殿を建立し、田村山安養寺が別当となつたと云われる。以来興廃を経たが、昭和二十四年十月境内神木を伐採して、拝殿を新

築した。

例祭日 九月一日
社殿 本殿 流造 二坪二合五勺 柿葺
覆殿 切妻造 四坪 亜鉛板葺
拝殿 切妻造 五坪 亜鉛板葺
工作物 鳥居 木造 八幡鳥居 高一間半
境内 官有地(現在譲与地)二百九十六坪



(豊田若宮神社)

◎若宮神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字豊田字宮根一三〇四番地
(宮司八王子市小泉氏)
祭神名 仁德天皇
由緒 不詳
例祭日 九月十五日
社殿 本殿 六坪二合五勺 間口二間半 奥行二間半
拝殿 十坪 間口四間 奥行二間半
境内 官有地(現在譲与地)千二百二十八坪

◎日枝神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字豊田字梶山一六四五番地
(宮司小泉氏)
祭神名 猿田彦命

由緒 不詳
例祭日 九月十五日
社殿 本殿 間口五尺 奥行五尺
境内 官有地(現在譲与地)八百五十九坪

◎天満神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字豊田字堀込一〇八九番地(宮司小泉氏)
祭神名 菅原道真
由緒 不詳
例祭日 九月十五日
社殿 本殿 間口六尺 奥行六尺
境内 官有地(現在譲与地)四百六十四坪

◎八幡神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字豊田字大芝原七八二番地(宮司小泉氏)
祭神名 応仁天皇
由緒 不詳
例祭日 九月十五日
社殿 本殿 間口六尺 奥行六尺
境内 官有地(現在譲与地)六百三十六坪

◎白鬚神社

所在地 東京都南多摩郡日野町大字豊田字堀込一〇七一番地(宮司小泉氏)

祭神名 不詳。一説には猿田彦命
由緒 不詳
例祭日 九月十五日
社殿 本殿 間口六尺 奥行六尺
境内 官有地（現在譲与地）八百六坪

◎坂上神社

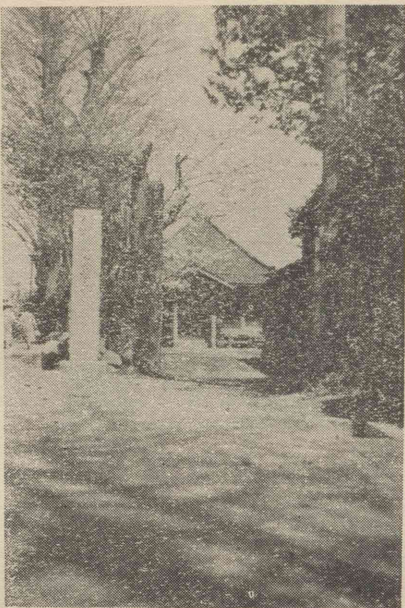
所在地 東京都南多摩郡日野町大字日野字大坂西五七〇三番地
祭神名 不詳。一説には飯綱太郎
例祭日 九月十五日

由緒 不詳。一説には長野県上水内郡飯綱山から、甲州で武田信玄が勧請して信仰していたが、武田家が天目山で滅亡後、勝頼の妾某と共に亡命した家臣のうち此の附近に住むものがあつて、今の地に社を建てて祀つたのがこの神社である。後荒廃したが、佐藤七郎右衛門という人が再興している。

社殿 本殿 間口六尺 奥行六尺
境内 共有地 四十五坪

第十四 寺院

当町に現存する寺院は、真言宗五ヶ寺、天台宗一ヶ寺、浄土宗禪宗各二ヶ寺、法華宗一ヶ寺の合計十一ヶ寺で、別に仏堂の見るべきもの二を存する。



(普門寺)

◎普門寺

普門寺は大字日野字下宿二六一四番地にあり、日野第一中学校に隣接している。土淵山観音院と号し、宗派は真言宗智山派。本尊は聖観世音菩薩である。当寺は応永五年（一三九八年）の開創にして僧義雲の開基に係り、権少僧都智伝法印（文安元年三月七日寂）（一四四四年）の中興する所という。当初の寺域は遙か西方本宿（日野駅北方）と称する附近にあつたが、元龜元年（一五七〇年）清宥法印代に現在の地に転じたと伝えられており、

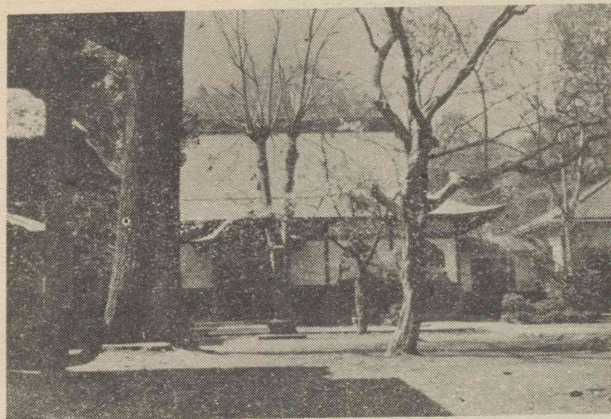
その当初の敷地、井戸等の旧跡は仙慶法印（延宝三年十一月十八日寂）（一六七五年）の代に至つてこれを埋むと古記に記されている。明治元年（一八六八年）神仏分離の行われるまで牛頭天王社（現八坂神社）の別当寺として、四百余年にわたつてその社務を掌り、徳川時代には家光以来社領十四石の御朱印が下附されていた。明治初年には境内

八百五十坪あつて、堂宇も広く、本堂は日野小学校創設に際しては仮校舎となつた。次いで明治十年校舎が建築せられるにあたり、境内は折半され、堂宇も多くは取り払われ、当寺の規模は著しく縮小せられるに至つた。現在の本堂は、下河原一、六二番地にあつた廃寺西明寺の堂宇（三間四方であつた）を当時止むなく移築して旧堂の代りとしたものである。明治末年龍山代に之に改修を加えて拡張をし、続いて大正初頭庫裡の改築があつた。現在、境内は百

九十九坪、本堂は間口四間半、奥行四間、宝形造トタン葺、庫裡は間口四間、奥行二間半、四注造瓦葺、檀家は約八十戸である。

◎宝 泉 寺

宝泉寺は大宇日野（字宿裏）三、二二三番地にあり、山号は如意山。臨済宗建長寺派の禅刹である。当寺は、元徳年間（一二三九―一三三一年）の開創といわれ、開山は鎌倉建長寺五十四世曇芳周応大和尚（応永八年九月七日寂（寿九十九）一四〇一年）であり、師の夢窓国師疏石を勧請開山としている。当初は字姥久保に在つたが、天正（一五七三―一五九一年）の末火災に罹り、伽藍、古記等尽く焼失、その後程なく現在の地に移転再建すと伝えられている。開山以来二十三代を経て今日に及んでいる。その間は小田原、北条氏から寺領が寄せられた由緒により、徳川氏からも三代家光（当山十四世祖関代）以来先規に任せ高八石井寺中



（宝 泉 寺）

山林竹木諸役免除の御朱印があつた。境内は千二百八坪、日野台の裾に倚つて閑寂の趣があり、老樹が聳えている。本堂、間口九間、奥行七間、向き東北。宝暦四年（一七五四）十六世曇瑞代に於ける修繕の記録が存するが建立年月は不明。昭和五年金繩代屋根を入母屋造銅板葺とし、内外大改修が施された。本尊釈迦如来、脇侍文殊菩薩、普賢菩薩の三尊を安置している。

庫裡、間口六間、奥行五間、向東北、昭和五年旧庫裡を取潰して新築。鐘樓、九尺四方、延享二年（一七四五年）十三世大江代梵鐘新鑄の際建立した。因に梵鐘は太平洋戦争で供出、総高四尺外直二尺一寸三分、鑄工は江戸神田西村和泉守であつた。

観音堂三間四方、向き西北。塗籠にして格天井、九柱。文政年間（一八一八―一八二九年）の建築と見られる。本尊馬頭観世音は一尺二寸の石像で、古来持ち上げ観音の名で知られ軽重により吉凶の判断が得られるといつてゐる。現在は本堂と庫裡の間に安置してあり、堂の須彌壇上には代りの石像と十王像とが安置してある。十王像は下河原に在つた西明寺の本尊であつたが、同寺が廃寺となつた為明治十年（一八七八年）八月この堂に合祀されたのである。明治時代には盆の十六日には宝泉寺のえんま様といつて相当賑わつた縁日風景が見られた。

山門、六脚総檼造間口一間半、向き西北。嘉永六年（一八五三年）二十世俊洲代の再建で、百五十三の檀家の他に日野をはじめ近郷の有力者二百余人が喜捨した浄財によつて竣工した。彫刻師は八王子八幡宿小川屋巳之助、石工は相州厚木秋本忠次郎、瓦師万願寺金子元次郎、棟梁は当宿天野巳之蔵、奥住直次郎、八王子八木宿守屋勘吉等で、均勢のとれた優美さがあり、その道の人達から参考とされ高く評価されて来た。扁額「如意山」の文字は江戸小日向龍光大和尚（勅号あり公儀御留筆であつた）九十一齡の手蹟、鏡天井の墨絵の龍は谷保南養寺雲峰和尚鉄磧の筆である。

石橋敷石之記碑、鐘樓前にあり、天保一年（一八四〇年）の建立。撰、書共に靈巖和尚である。記録にある敷石は大正十年既に改められたが石橋は今なお門前の小流に架かっている。この碑には西多摩郡増戸の古刹大悲願寺恵宝法印母智貞尼（当町出身）が両親菩提のため寄進した趣意が記されている。

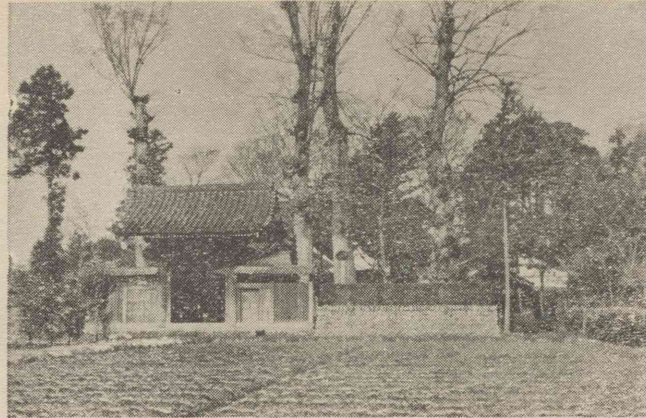
落合滝水之碑、本堂右前に在り。滝水は俳諧を能くし、又手習師匠として子弟を教え日野学校創設にあたり、最初の教員となつた人である。明治二十九年五十二歳で病歿した。碑は門下生により翌年四月に建立されたもの、撰は佐藤俊宣、書は有山一峯である。

中根中尉記念碑、滝水の碑に隣している。中尉は、日露戦争に出陣戦死した。明治三十九年の建立である。檀家は約二百五十戸である。

◎大昌寺

三鷲山鶴樹院大昌寺（浄土宗）（大字日野三、一九八）大昌寺はもと、金峰山と称する天台宗の寺院であつた。この旧跡に大善寺（現在八王子にある）和尚牛秀助給が村民の懇請によつて隠退しこゝに堂宇を創建して大昌寺と号した。

開山は、前に述べた牛秀助給大和尚で、立川村の領主能登守清房の子であつて、貞安上人に就いて剃髪し、存貞上人に師事し、天正十三年北



（大昌寺）

条氏照の帰信を得て大善寺を建立し、ついで大昌寺を建立したのである。慶長十年八十二歳で歿す。墓石は自然石で開山讃上人之墓と素朴に誌してある。

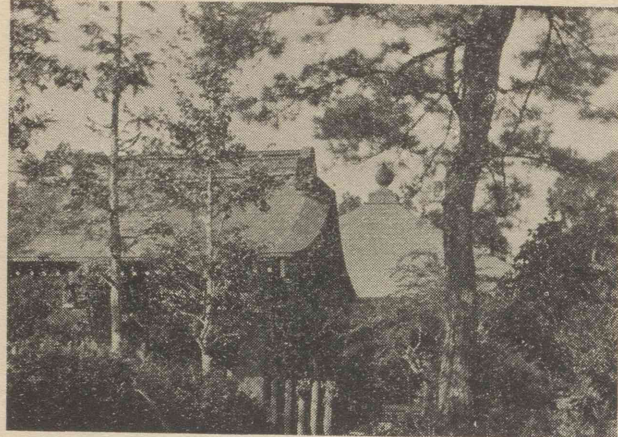
現在の堂宇は、第十五世湛蒼林道大和尚の再建されたもので、その後永い間に腐朽していたうゑに大正十二年の関東大震災の厄に会つたので、三十三世大誓演順和尚が、昭和四年大改築をしたものである。東向き八間に九間、鉄

板葺き玄關は、樺造り向拝立派な出来である。庫裡鉄板葺き四十坪、宝物として、開山牛秀上人の筆になる「説法色葉集」十巻がある。現在浄土宗の宗宝に指定されている。

鐘樓、明治三十六年改築。鐘は太平洋戦争に際し供出された。この鐘は、日野に縁故のある多川民部見歳の鑄造であつた。多川はまた内陣の大燈籠も鑄造した。之もまた供出された。名主で手習師匠であつた佐藤信三之墓碑、維新前から新撰組などの育ての親であり、新政府になつてからは南多摩郡初代の郡長であつた佐藤俊正の墓碑、幕末から江戸で狂歌の絵馬屋四世をついだ玉川居祐翁の墓碑がある。

◎欣浄寺

欣浄寺は大字日野字上宿二四〇六番地にあり、嶺北山碩伝院と号す。浄土宗である。



（欣浄寺）

寺伝に依れば元和六年（一六二〇年）僧積伝がこの地に微々たる草庵を結んだのが寺の基であつて正保元年（一六四四年）に至り増上寺の長老超譽がこれを興隆して一寺となし、欣浄寺と称したという。超譽を中興開山と呼び、爾来今日に及んでいる。

大正七年二月十一日夜回祿の厄に遇い、本尊、本堂、庫裡、古記等一切が灰燼に歸した。現在の堂宇は昭和四年十一月再建成つたもので、十一年間にわたる檀徒の苦心努力の結晶である。境内は四百四十九坪あり、次の建造物が存する。

本堂は南面し、間口六間、奥行五間半、宝形造でトタン葺、本尊阿彌陀如来の一尺二寸の木彫坐像を安置する。庫裡南向き、間口三間半、奥行五間、寄棟造りトタン葺である。

山門四脚間口一間半。大正の火災に焼失を免れた唯一の建物で、天井の一部に微かに火災の痕跡を留めている。建築年月日不明。

日野義貴之碑、山門左手にあり。義貴は江戸に學んで歸り、組頭などを勤め、又家塾を開いてよく子弟を教えた。業を受ける者三百名といわれ文久三年（一八六三年）八月十四日六十三歳で病歿した。碑は元治元年（一八六四年）門下生により建立されたもので、題額は増上寺の闍普教音、文は千人頭河野通聿、書は日野義順である。檀家は約八十戸である。

◎成就院

成就院は大字日野字東光寺四、八四三番地にあり、号は万照山。天台宗である。本尊は阿彌陀如来で木彫二尺許り



(万福寺)

の坐像、慈覺大師の御作なりという。寺伝によれば当寺は嘗つて存した東光寺（日奉氏が居館の鬼門封じに建立、永祿年間に廃絶したと伝えられている寺）の一子院であつて、東光寺と共に久しく廃絶していたのを天正十六年（一五八八年）僧永海が中興建立したものであるという。永海を中興開山と称してをり、爾来法統を継ぐこと十三世にして今日に及んでいる。現在の堂宇は寛政六年（一七九四年）攝明代の建立であつて、本堂、庫裡を通じ間口八間、奥行四間半、南向である。境内は二百八十一坪であつたが昭和二十六年参道に接した西側の畑約三百坪を敷地に加え児童遊園地が設けられた。檀家は約八十戸である。

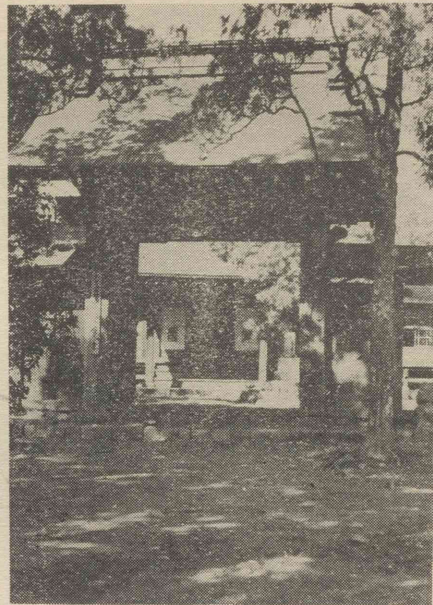
◎万福寺

万福寺は、大字日野字万願寺一二番地にあり、青柳山と号し、臨済宗建長寺派に属す。本尊は薬師如来で、長一尺許りの木彫坐像である。当寺は宝暦年間（一七五一—一七六三年）の開創といわれ、開山を心峰良益和尚という。堂宇は当初三間に四間半の本堂と若干坪の庫裡の二棟で、共に東向きであつたが、明治初年大風にあつて倒壊したので、これを一字に縮めて南向きにし再建したと伝えられている。七間に三間半の現一字がそれで、昭和十二年三月八世忠正和尚代にこれを修補し屋根を亜鉛鉄板に葺き改めて今日に至つた。境内は二百十八

坪。古松二本が堂前に枝を張り風致を添えている。世代は八を数え檀家は約四十戸である。

◎安養寺

安養寺は大字下田三一番地にあり、田村山極楽院と号し、真言宗智山派である、開山、開基、開創の年月を伝えていないが境域の一部に今尙見られる土壘様の跡や山号「田村山」等から類推して、寺域は西党日奉氏の支族田村氏の居館の跡であり、田村安栖がその開基ではないかといわれている。一旦衰頹を見たが法印慶深（正保二年七月二十二日寂一六四五年）これを中興し、慶安元年（一六四八年）には徳川氏から高十三石の寺領が附せられた。古くは寺域が東方の八幡社にまで達していたというが現在では縮小されて八百七十九坪となつてい



(安養寺)

る。

本堂は間口九間、奥行六間、東向き、内陣と外陣とは別の建物を継ぎ合わせてあり、建築年月は不明。大正十一年十八世海印代に大修理を施し、従来の茅葺を亜鉛板葺きに改めた。

本尊阿彌陀、脇侍観音・勢至の三尊を安置する。本尊阿彌陀如来は等身大木彫の坐像で、由緒不詳ではあるが藤原期の作と推定されている。相貌の端麗さ、均整のとれた体軀、芸術的香りの極めて高い仏像である。脇侍の両菩薩は

二尺五寸許りの木彫立像で室町末期の力作である。他に鎌倉期と推定される阿彌陀如来（八寸の木坐像）南北朝期の昆沙門天（四尺の木彫立像）同十一面観世音（五寸の木彫立像）等大小五六体の古仏像をも奉安している。

庫裡、間口五間、奥行四間、東向き、建築年月不明、山門四脚、間口一間半本堂正面にあり、建築年月日不明。薬師堂間口三間奥行二間、東向き、山門の南側にあり、等身大薬師仏を安置する。これも建築年月不明。

宝篋印塔、山門を入った左側にあり、寛保二年（一七四二年）周賢代の建立で、江戸飯島氏の女が施主である。宝篋印塔とは、宝篋印陀羅尼——これを亡者の塔前で唱うれば地獄に墮する者も火界を免れると云う——を中に納めた塔で多くは真言宗天台宗の寺に建てられる。

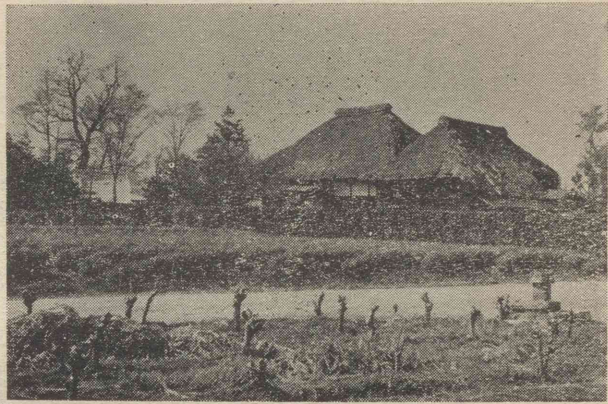
墓地の北側に変形の墓石一基がある。白丁の酒徳利を模したもので、高さ二尺二寸。「了全法師」と記され、なおかくすればかくなるものと知りながらついにわが身は徳利となる」という辞世が彫つてある。門前にあつた正楽院（廃寺、大正中期亮尊代名跡を移して立川に建立現在南部線西国立駅前にあり）の堂守で酒を嗜んだ法師が自ら建立したものである。

なお本堂の南側には明治末年まで辨天池というのがあつたが、その後埋まつて田となり、今では児童遊園地と変つて

ている。
世代は二十世を数え、檀家は約二百五十戸である。

◎延命寺

延命寺は大字堀の内字林際五九四番地にあり、有王山地蔵院と号し、真言宗智山派に所属する。開山、開創の年月



(延命寺)

日等は詳でない、ただ文明三年（一四七二年）の年号を刻んだ板碑一基が存している、その時代には既に建立されていたものであろうと推定される。但し板碑は必らずしも寺院に建てるとは決まっていなかったので堅証ともならない。又古き靈簿に依り徳川時代の中頃まで境外仏堂としての地藏堂一字があつた事を知るが、現在御前立ちになつてゐる地藏菩薩の立像がその地藏堂の本像であつたのだろうと想われる。

明治初年までは隣接山王社の別当としてその社務を掌り、又堀の内村内各社をも管掌していた。本尊は延命地藏尊で長六寸許りの木坐像である。俗に枕返し地藏という。そのいわれは、昔時此の寺に一夜の宿を乞う者心にもなく本尊に足を向けて寝ると、翌朝必らずその位置が転倒してゐたといふのである。秘仏として厨子内深く安置して一代一度の開扉となつてゐる。境内は六百六十坪。東向き本堂、庫裡の二棟がある。

本堂は間口七間、奥行五間、庫裡は間口六間、奥行四間、共に寄棟草葺

で建築年月日は不明。

堂前にセメントで補強した板碑一基がある。文明三年九月二十三日、為逆修善根、一結衆等敬白と記されてをり、種字彌陀三尊の他に天蓋や三具足、机等迄刻んだ華やかなものである。高さ三尺八寸、巾一尺である。文明三年は今から四八六年前のもので、日野町で見られる板碑五十枚位の内で、一番新しいものに属する。また最も手の込んだ美

しい彫りのもので形も大きい。折れたのを縫いで手入れがよく出来てゐる。板碑は石塔婆の一種で死者供養のために建てた。

また参道を入つた左側に阿川又彦先生之碑がある。高さ四尺。先生は甲州上野原石川家の出で阿川家を継ぐ、酔医伯と呼ばれ医を能くする一方家塾を開いて子弟の教育に尽した人。明治二十一年（一八八八年）八月八日卒した。碑

文は、八王子市奥津広の撰並びに書である。

檀家は約七十戸である。

◎薬王寺

薬王寺は大字日野字四谷三四九三番地にあり、日輪山と号す。真言宗智山派。本尊は大日如来で、木彫二尺許りの坐像である。由緒不詳なるも、慶長十年（一六〇五年）僧覚心の中興という。本堂は宝暦年間（一七五一—一七六三）火災にあつて焼失したが、その後再建して現在に及ぶといわれている。高九石五斗の御朱印もあつて、明治初年まで別当として日野宮権現社を管掌して来た。現境内は七百三十坪で、大小の竹木が繁茂鬱蒼としており、建物として、本堂、間口三間奥行三間半、宝形造亜鉛板葺、庫裡、間口四間、奥行五間、山門四脚間口一間半、以上三棟が東向きになつてゐる。なお当寺は高幡金剛寺



(薬王寺)

の隠居寺とも呼ばれてをり、金剛寺住職からこの寺に隠栖する人が多かった。世代は十六七世といわれる。檀家は七戸。昔から極めて少なかったのである。



(石田寺)

◎石田寺

石田寺は大字石田一四五番地にあり、愛宕山地蔵院と号す。宗派は真言宗智山派。本尊は地蔵菩薩で高さ二尺五寸許りの木の立像である。由緒については「新編武蔵風土記稿」（文化文政年間に編まれた書）が寺伝として次の如く記している。（年号住は加入）

康安元年（一三六一年）開山慶興の草創にして、始めは吉祥坊と号せしが、いくほどになく永和三年（一三七七年）の頃より衰微して庵室をかまへ僅に

そのあとを存せしのみなりしが、それも一旦絶えはてしを天文十三年（一五四四年）七月九日洪水の時同郡立川の普濟寺の方より観音の木像流れ来たりて、この岸上に止りければとり上げて古の庵跡に堂を造り安置せり。その後

永祿二年（一五五九）沙門慶心なるもの別当職となり一寺を建立し石田寺と号せりといふ。云々。

他に見るべき古記録等は存しないが寺域から出た多くの板碑（天応年号から寛正年号のもの即ち一三一九—一四六五年位のもの十九板。今堂内に保存）について考えれば、この地が古くからの淨域であつたことが窺がわれる。徳川

時代には御朱印に依り高七石が寄せられていた。

現境内は五百七十六坪。本堂、観音堂の二つが存する。

本堂、南向き、間口八間奥行五間、四注造草葺を亜鉛板で覆つてある。建築年月日不詳。

観音堂、本堂に直面しており、間口二間、奥行三間。十一面観世音菩薩二尺五寸許りの木像を安置している。天文洪水の折の観音像か否か、古い時代から存するものという。

墓地は観音堂の側にあり、幕末新撰組で勇名を謳われた土方歳三の墓碑はこの中にあつて、「歳進院殿誠山義豊大居士」の法名と「明治二巳五月十一日義豊」とその歿年月日、諱が刻されている。

なお堂宇前に聳え立つ榎の大樹は周囲一丈二尺許り、名木とされている。檀家は五十戸信徒三十八である。

◎善生寺



(石田寺の青石塔婆)

善生寺は大字豊田字宮根三一九番地に在り、大久保山と号す。新潟県三条市長久山大成寺末で、法華宗である。当寺は正保二年（一六四五年—三〇九年前）地頭の大久保勘三郎藤原忠良が前年二月亡くした息女善生院殿妙蓮追福のために建立した寺である。妙蓮を開基としてをり、開山は忍性院日足（寛文八年六月七日寂。一六六八年）である。



(善 生 寺)

爾来大久保氏の菩提寺としてその存栄中は大なる外護をうけて来たのであった。またその寺域は土地の旧家山口氏が同寺建立の際地頭に献げた所といわれるが、現在境内は六百九十三坪である。

建物は曾つては本堂、庫裡山門と存していたが、山門、庫裡は腐朽のため明治初年既に取潰され、今では本堂一字が存しているのみである。東南の向で間口六間、奥行七間半の草葺である。

本堂は十界勧請の曼荼羅で、正面中央には日蓮上人の木像を安置している。また左側仏壇上には明治年間廃堂となつた豊田薬師堂の本尊薬師如来を奉祀している。一尺ばかりの木彫の座像である。

墓地は本堂裏手にあり、大檀越大久保氏代々の墓所として高大な五輪塔が五六基並んでおり、更に後方高台の畑中には開山日是的の塔が存する。世代数は十一にして、檀家は四十五戸である。

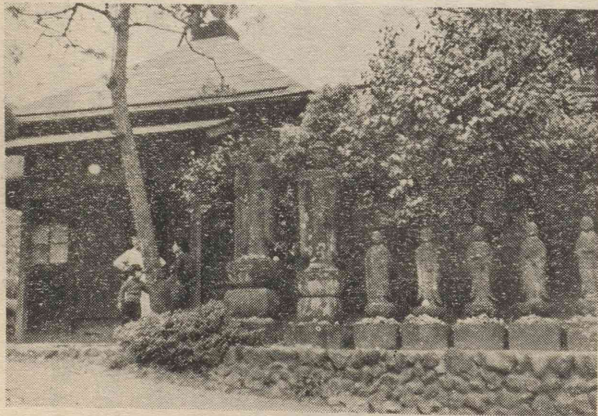
◎薬 師 堂 (東光寺部落)

薬師堂は大字日野字東光寺四八九七番地にあり、往昔日奉氏が東光寺を建立して居城の鬼門を封じたその跡地に建てられたものといわれる。中頃廢絶していたが天正年間(一五七三—一五九一年)円照法師なるもの中興し堂を建立したと伝えられている。明治九年(一八七六年)地租改正の際に再び廢することにはなつたが、今なおしつかりした

堂宇を保持し、本尊は里民の信仰を持続している。現在の堂宇は嘉永二年(一八四九年)焼失の後をうけて嘉永六年に建立されたもので、三間に三間半で、別に庫裡一棟が附属している。本尊薬師如来並に十二神將の像あり、安産薬師として知られ、徳川時代から安産を祈願する者が十月十一日に枝栗を納める習がある。またこの境内西隅には曾て郷倉が存したと伝えられているが、堂裏の葺きおろしの柱にその遺材が用いられている。郷倉は米の年貢を納める土地には普通建てられ年貢米を一旦此処に収納し、後幕府に送つたものである。又饑饉に備えて雑穀を備えておいた。

◎坂下地藏堂

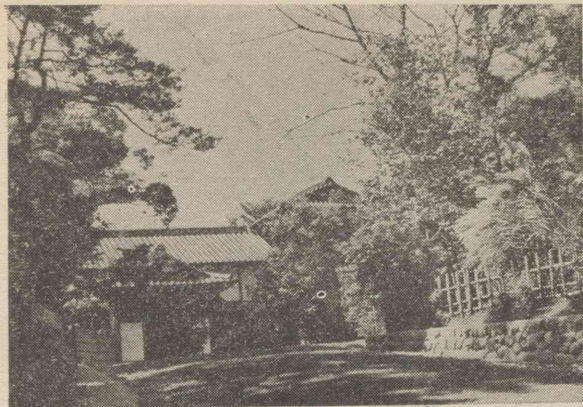
坂下地藏堂は旧甲州街道沿い鉄道踏切下にあり、五間半に三間の堂宇である。本尊延命地藏尊は青銅造り四尺の坐像で、鑄工は江戸神田鍛冶町塙丁目、多川民部藤原見歳と記されている。正徳三年九月(一七一三年—二四二年前)の建立で、江戸小舟町井田八左衛門なる者が釈宗感菩提の為仏供領を寄進し、近郷の祈願者百三十二名の力を得て造つたものである。当初の堂宇は樺造り瓦葺のしつかりしたものであったが、明治三十一年(一八九八年)五月二十八日汽車の火粉を受けて焼失した。以来本堂は宝泉寺観音堂内に仮住居すること三十五年に及んだが、部落民の厚い信仰により現在の堂が落成し、昭和七年四月二十四日入仏供養が行われた。この堂も明治九年地租改正当時廢する



(坂下地藏) (横丁)

こととなつたが、部落民の信仰は変わらず、毎月二十四日には念仏会が続けられている。現在部落持。前記寺院、仏堂の他になお明治初年までは真福寺（宮）、西明寺（下河原）、光徳寺（新井）、長命寺（北原）、薬師堂（豊田、上田、四谷）、地藏堂（宮、万願寺）、観音堂（下河原）等があつたが、何れも小さな寺や堂で、財政その他の理由から廃寺廃堂となつた。

教会



（立正交成会）

嘗て当町には数多く社寺、仏堂があり、各部落には必ず鎮守社と仏堂とが建立されていた。これは土地柄が経済的ゆとりがあつた為ばかりでなく、住民に敬神思想が強く、又仏教の信仰が深くゆきわたつていたことによるもので、この祖先の信仰はそのまま現在にも継続されている。町民の信仰する宗教は殆んどが仏教で、他の宗教としては僅かにキリスト教、天理教等があるが教会らしいものは殆んど存在していない。強いて教会として挙げれば次の二つである。

日本キリスト教団日野台教会、所在地は高倉町五四〇番地。昭和二十四年の設立。農村伝導神学校である。

立正交成会豊田道場、所在地は大字豊田字上原一八四七番地。旧安田邸を買収、昭和二十七年六月の開堂。日蓮上人図顕の大曼陀羅を本尊とし、法華経を基調とする新興教団として信者の獲得に努めている。

第十五 日野町郷土文化財

1 文化財の保護について

およそ文化的価値のあるものを、後々まで残して置きたいというのは自然の人情で、また意識的に之が保護を図るのは文化人としての責務である。

文化国家の建設とか、新しい文化の創成ということは、一朝一夕に出来上るものではなく、まったく民族の伝統の上に成り立つものである。この伝統を保護し身に附け味うことによつて更に新しい文化を生み出す土台が出来、またみづからの郷土について認識を深めるようになる。

このために国では、はやく「史蹟名勝天然記念物保護法」を設けその実績を挙げつつあつたが、更に昭和二十五年「文化財保護法」が制定され、都では「東京都文化財保護条例」が昭和二十七年四月に定められた。

わが日野町でも、郷土文化財の保護と顕表の必要を認め昭和二十九年六月「日野町文化財保護条例」を制定、同時に施行規則が教育委員会で定められた。なお「文化財保護専門委員」の規定を公布、委員の囑託もあつたので郷土文化財の調査を遂げ、昭和三十年三月先づその内十四を第一次指定とし、それぞれ標識板を樹立した。

日野町郷土文化財は条例で次の様に分類している。

- (1) 「町重宝」建築物・絵画・彫刻・工芸品・典籍・古文書・考古学的資料等の有形物。

- (2) 「町技芸」工芸技術・民俗芸術・郷土芸術・郷土芸能の無形文化的所産等。
- (3) 「史跡」文化史上重要な事件及び人物の遺跡。
- (4) 「天然記念物」稀有又は著名な由緒のある動物・植物・鉱物及び特異なる地質学的形態。

第一次指定略解説

一、七ツ塚古墳群（史跡）

所在地Ⅱ大字日野東光寺西南方台上小名七ツ塚

由緒及び現状Ⅱこの古墳は以前は武蔵武士の雄、西党、日奉氏の祖先たちの墳墓であると解するむきもあつたが、実はその時代よりはるかに古い時代即ち古墳時代の氏族住民の首長の墓であるだろうということである。しかし、この地が中心地を遠くはなれた田舎であるというわけで、幾分年次がおくれて、奈良朝の初期ごろまでに築かれたものであるといわれる。つまり七八世期頃、今から千二百年も前、相当長い間に順次築かれたものであらう。

七ツ塚の小名は墳が七基あるところから出たのであらうが、以前にはなお多数あつたものと考えられる。七基の内二基は明治二十六年に発掘し、その土砂を一ヶ所に積み上げ、金刀比羅の御祠をその上に建て、その際出土した直刀数本をその祠中に納めた。なお日野町史談会主催で昭和二十九年六月西方林木中の一基を発掘したが、大刀耆振（長さ二尺八寸）刀子式、鉄製鏃四本が、玄室の位置の床面から出土した。墳は覆土二尺位下に大体南北にわたつてナメの切り石でたんだ玄室及び美道があつた。長さは合わせて十八尺位、幅は三四尺、深さ四五尺位であつた。

以前人型埴輪、曲玉、管玉も七ツ塚地域から発見された。

七ツ塚の北方、東北西の三方眺望の開けた一帯の地は、かつて西党の本拠として日奉氏が居館を築いた所であると伝説されている。また、その辺りからは、石器土器が掘り出され、原始時代の住居跡も埋まつていると認められている。

二、東光寺薬師堂（史跡）

所在地Ⅱ大字日野四、八九七番地（東光寺部落）

由 緒Ⅱ平安朝の中葉、武蔵武士、日奉氏が東光寺南方台上に居館を築き、西党の本拠としたが、その鎮護として東北方に、東光寺を創立し、なお薬師堂を建てた。中頃中絶のすがたにあつたのを、天正年間に円照法印によつて薬師堂は再建された。今のお堂は嘉永六年に改修されたものである。

堂内に薬師像及び十二神将像が安置されている。また従来日奉館址からの出土品は、この堂に納める慣しがあつたが現在それらしい物はない。安産守護というので栗のいがをお礼に献げる。

三、旧東光寺のあと地・成就院（史跡）

所在地Ⅱ大字日野四、八四三番地

由 緒Ⅱ武蔵七党の雄西党日奉氏は本拠を東光寺台上に定めて居館を築き、なお鬼門除けとして東光寺をその東北方に建立した。其後日奉氏の衰亡と共に東光寺もすたれてしまった。天正十六年僧永海が旧東光寺のあと地を求めて現在の万松山成就院を建てたのである。

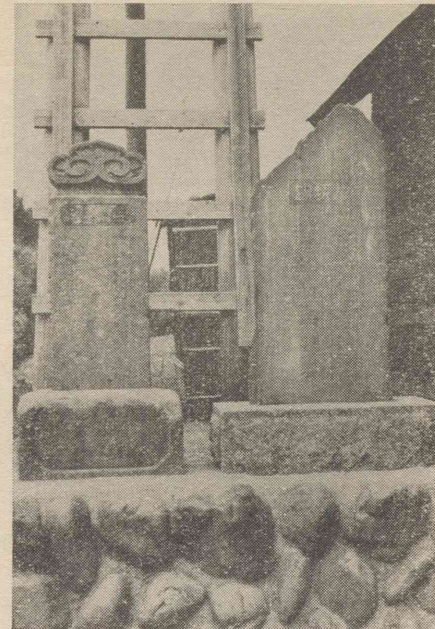
四、東光寺大橋の碑

所在地Ⅱ大字日野五〇六四番地、大橋の北詰に大坂之碑とならんでいる。

この碑は、同所の日野用水堀に架けてある大橋が度々架けかえられた事実を記念して建てられたものである。橋の
変遷と村民協力の状況がよくわかる。弘化三年の建立である。（百年位前）伊豆石で頭部が擬宝珠形になっている。
漢文であるが、文面の大意は次の様である。

石 橋 碑

武州日野駅本郷東光寺に用水堀があり、之に土橋を架けて往来していた。その四隅に楓の樹を栽えてあつたが、年がたつにつれて枝も繁り幹も太り、車馬の通行のさまたげとなるようになった。天明四年その中の一本を伐つて板橋に造りかえた。しかしこれも長くもたないので、石橋に造りかえようと隣邑にも協力をたのみ、残りの三本の樹を売つて文化成辰の年石橋を架けた。ところが石質が疎悪なため天保年間にくずれ落ちた。そこで弘化丙午の年村民は、成就院法印了慧とはかり、遠く伊豆の石を求めて橋を架けかえた。これで永久に役立つだろうとよろこんだ。弘化三年丙午の秋九月之を建つ。



（東光寺石橋碑）

かる俗に石橋又は東光寺橋と呼ばれるものである。現在はまだコンクリート造りに改まつている。

五、竹間加賀入道の墓（史跡）

所在地Ⅱ大字日野小字四ツ谷三、七二五番地あたりの田圃中にある。地積三坪程。自然石の三尺ばかりのが立つて

いる。

竹間加賀入道は、小田原北条氏の部将で、埼玉県鉢形城の守備に当つたことがある。日野あたりを知行したこともあつたと老えられる。現に日野佐藤仁氏方に伝わる古文書に「於当郷竹木伐儀被停止畢云々。日野惣郷并に立川領東光寺境より谷町屋まで。平野豊後守、福島右近、竹間加賀入道」とある。

紀元二千六百年昭和十五年二月に、八坂神社北側の竹間家で右墓側に碑を立て、左記の如く彫んだ。

『加賀塚 竹間加賀入道源正延入道了海 天正十八年二月八日卒三百五十年祭。昭和十五年二月 三百五十年祭十四代弥宗次建立。』

六、坂下地藏本尊 鑄金座像（史跡）

所在地Ⅱ日野大坂小字裏宿五、七〇三番地、坂下地藏堂。

坂下地藏堂は、正徳三年約二百四十年前に創立された。本尊鑄金座像は、正徳三年に江戸小舟町の井田八左右衛門が釈宗咸信士菩提のため日野は勿論八王子・青梅・立川・大神・福生・由木にわたり二百三十二人の合力を得て奉造したと第二蓮座に彫つてある。また第三蓮座には、奉建立地藏尊施主法界導師大昌寺十五世湛誉上人、多川民部藤原見歳造、鑄工江戸神田鍛冶町老丁目正徳三年癸巳九月日とある。見歳は大昌寺の釣鐘、燈籠、谷戸の念仏講の鐘同所善光寺仏像を鑄た。（甲府善光寺の仏像も鑄造したと）

見歳の祖は甲州武田の臣であつたが、武田滅亡の後土着し、程経て兄弟手を携えて江戸に志し、兄は江戸に鑄物師となり、弟は日野の谷戸に留まり農を営み、谷と改姓相当の産をなし、今日その後は続いている。

地藏堂の大地蔵尊像及び六地藏尊像外に回国記念塔がある。共に江戸小舟町井田八右衛門の名が彫つてある。

七、八坂神社本殿（建造物）

所 在 大字日野二、五四一番地（森町）

本社々殿は、総檼造り、流造、唐破風向拜、建坪八坪七合五勺、間口二間半、奥行三間半総高五間屋根下総坪数二十坪五勺、床面及び階段を除くの外全面にわたって彫刻が施されている。精細、巧緻、また雄渾の美を極めている。

社殿は棟札によつて寛政十二年に再建されたものと推定される。（一八〇〇年徳川家斉の時代）棟札によれば、八坂神社別当普門寺住職法印尊盛と佐藤七郎左衛門の心願にもとづき、普門寺住職権大僧都法印盛信名主佐藤彦衛門当所馬場半兵衛世話人馬場藤七外世話人氏子中の協力によつて出来たもので、武蔵国大里郡吉見領村邑村の住人大工須長伊右衛門源国信同信安の父子が棟梁となつて建てた様になっている。彫刻師は誰か明らかでないが、これより五十年ばかり前の寛延二年別当長快の時代拜殿新建の棟札には上田邑巧匠天野市右衛門の名が記してある。



（八坂神社、社殿彫刻）

出来した。当時の金で九百円三銭九厘を要し。内、金五百七十七円八十五銭を一般氏子の寄附とし不足分は発企人佐

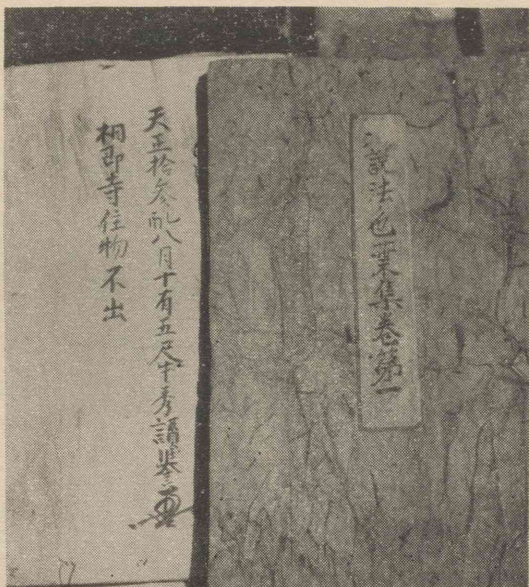
附 神輿 大きいのと彫刻のよいので有名である。十年近く工作にかかつて明治十三年九月にお旅所の御飯屋と同時に

藤俊宜支出、と書類に記してある。

八、大昌寺開山、讃誉上人墓、同説法色葉集

所 在 大字日野三、一九八番地（仲町南うら）

大昌寺開山 応運社讃誉上人牛秀助給大和尚の墓は、自然石で高さ四尺ばかり、ただ讃誉上人之墓と素朴に記してある。

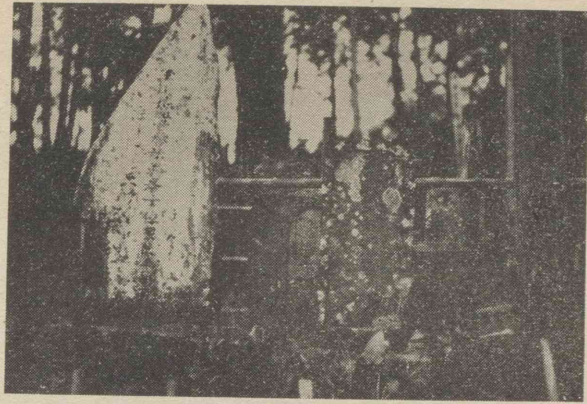


（説法色葉集 開山讃誉上人著十巻）
（大昌寺蔵 浄土宗々宝）

讃誉上人は、武蔵領主能登守清房の子、天正十三年北条氏の帰信を得て、八王寺大善寺を建てたが現八王子が建営されるに際し、城山城下から大横山に移し建てた。日野の住民の招請によつて、大善寺を退隠してもとの金峯山の旧地に現在の大昌寺を建てた。上人は慶長十年六月十二日八十二歳で大昌寺で寂した。

説法色葉集十冊 先年浄土宗の宗宝に指定された。天正十三年讃誉上人が自ら筆をとつて、宗義を四十八項目に分けて解説したものである。四百年近くも前に書かれたこれほど纏まつた著述が完全に遺つてゐることは珍重すべきものである。

九、玉川居祐翁墓碑



(大昌寺内玉川居祐翁の墓碑)

墓碑は、大昌寺墓地の奥にある。祐翁は日野町大字日野下町の中村半兵衛の次男(天保八年生)で、年少で江戸麴町の某呉服店に奉公したが、文学を好み、狂歌師絵馬屋額祐に師事し、即吟の才を愛せられ遂に絵馬屋四世を継いだ。後絵馬屋号を麻布の質屋業の某に譲つて郷里の日野に帰り、佐藤俊正氏の門脇に小料理屋を営み、庖丁を揮いながら、玉川居祐翁を号として東都の文人と交遊し、また郷里の同好を指導し、狂歌俳句に広くその名を知られた。その後日野の停車場に茶店を開き、店を妻女に任せ、自らは、雀に巢を与え、囲碁を楽しみ、月雪を友として過ごした。青年時代には剣を近藤勇の道場に修め新撰組に加わった。

明治三十七年八月五日病にたおれるまでの六十七年、全く恬淡洒脱^{てんたんしゃだつ}の境涯であつた。

墓碑は白色寒水石の三尺計りのもので、左の文字がある。

玉川居響誉祐翁居士

月雪や花にと取りしちび筆の

思はず時のきゆるいのち毛

涼しさや西へ行く身の旅ひとり

なお祐翁の墓碑の北方に隣つて、祐翁の実兄で狂歌師として江戸の判者だつた、呉龍軒那歳(御量見なさい)の墓

碑もある。

十、甲州街道万願寺一里塚(史跡)



(万願寺にある旧甲州街道一里塚)

所在 旧甲州街道日野万願寺地内に道をはさんで南北に向い合つてゐる。南の塚は、日野町大字下田塚越四九番地岩沢哲夫氏宅地内に、北の塚は大字日野三番地生沼喜三郎氏宅地内にある。

塚は双方共に、径一丈五尺、高さ八尺ばかり、南側のは築山風に手が入れてあり、北側のは一部崩されて小砂利が現われ、そばには竹が繁つてゐる。一里塚は一里毎に公道の両側に設けられ、上に榎の木を植え、里程を明らかにして行旅に便したものである。

慶長年間に、江戸幕府が五街道の一つとしての甲州街道を開くにあたり日野はその駅次に列り、日野駅となえ、問屋場が置かれて府中と八王子

との間の継ぎ場となつた。

その街道は、はじめ府中から低地を西に向い、谷保村の西から多摩川を南に渡り、こゝの万願寺を通つていたものであつた。それでここに一里塚が築かれたものである。ところが街道はいつか西の方立川地先まで高台を通ることになり、旧渡船場の道に変更されたのである。

なお、一里塚は日野台にもあつた。その国道南側のものは、昭和二十九年店舗敷地として取崩されてしまい、北側のものは、はやく鋤きならされて僅に土地が盛り上つてゐる程度であつたのを、昭和七年国道大改修に当り道路敷と

なつてしまつた。

一里塚は以前は国有であつたのを、明治十年頃横地丈量の際民有地に移つたものであらう。現在旧甲州街道中には完き形の一里塚は無いだらう。都内滝の川の西が原には俗に二本榎と称した一里塚によく手入れが出来、碑を立てて保存されている。これも国道改修に当り、あぶなく取払われようとしたのを故渋沢栄一氏等の尽力で保護されたのである。



(安養寺本尊阿彌陀如来坐像) (東京都重宝)

十一、安養寺本尊 木造阿彌陀如来座像 (東京都重宝)

所 在 日野町大字万願寺三一番地、安養寺(真言宗、田村山極楽院) 都重宝である。

この阿彌陀如来座像は、高さ三尺寄木造りである。漆塗で金箔押がおちているが様相端麗平安時代の様式を存するものと認められ、東京都内寺院にある仏像彫刻中製作優秀なものである。

昭和二十九年十一月三日東京都教育委員会が都重宝に指定された。

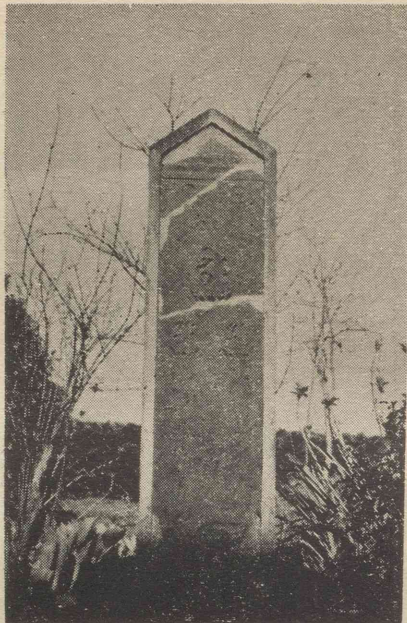
なお、同寺の他の仏像その他につき左のように判じられている。

右阿彌陀仏の光背は別に取付けたものらしいが同時代の優れた作である。昆沙門天像(木彫)は鎌倉末期か室町初期の作で中々の力作である。

小さな木像仏がほかに五六体あるが、鎌倉期、南北朝期と認められるものあり、また信仰の対象として素人が製作したと思われる千体仏もあつて

それぞれ時代色を現わしている。

十二、延命寺の板碑(建造物)



(延命寺の板碑)

所 在 日野町大字川辺堀の内五九八番地附近延命寺域内 この板碑(青石塔婆)は高さ三尺八寸巾一尺程、種子阿彌陀三尊・天蓋・机・燈火・香爐・華瓶・真言光明などが彫られ「文明二年九月廿三日逆修善根のため一結衆等敬白」の文字がある。

日野町の各所に散在せる青石塔婆五十余枚の内最も年号が新しく大形でまた一ばん彫りの手がこんだものである。四百八十年も前足利室町時代応仁の乱がはじまり、義政が銀閣を建てた頃には造られたものである。文面

から見て同志幾人かが相ばかり死後の冥福を祈り、九月二十三日お月見の晩にお日待をして供養したものであらう。板碑は塔婆の一種で、死者供養のために建てた。また逆修と記したものがあがるが生きている時に建てたのである。秩父産の平たく削げる青石を使つて関東地方に多い。板碑に記された年号から数えて鎌倉時代の中頃にはじまり、南北朝室町と今から七百二十年から三百八十年位前の間、凡そ三百三十年間にわたつて建てられたものといふことがわかる。

板碑は、上部を三角形にけずり、その下方に二条か三条の横線をほつて、塔婆の形を示し、表面上部に梵字または

仏像経文などを刻す。なを下部に花瓶・宝塔・年号・法号などを彫るである。鎌倉時代には高さ四尺から六尺、南北朝、室町時代にはずつと長大となつた。文亀天文頃にはまた小さくなつた。

近く七生村平には高さ七尺計り文永年号の長大なのがある。

十三、梵天山横穴古墳（史跡）

所 在 小名梵天山の東南谷ノ上、四五一番附近。

昭和初年大昌寺坂上農道改修の際口が開いた。赤土を掘り抜いた室の底、石たたみの上に人を葬つたと見られる。入口は道路の南に通っている。ほかになお一つ昭和十三年鉄道複線工事の際開口したものがあつた。共に古墳時代終末期のもので千二百年前のものであるとされている。

この南を流れている黒川に沿うた地には、古代の住居址や古墳が数多くあると推定されている。

十四、豊田の耕地整理

所 在 大字豊田二〇一番地、豊田小学校北に高札橋というのが用水堀に架かつている。このあたりを中心として豊田地内水田は悉く区劃整然、水準平均まことに気もちよく眺められる。ここに大きな仙石石で豊田耕地整理の碑が建ててある。大字豊田内水田地一帯にわたり約六十三町を整理して、耕作に便し、収益を増し、協力の美を挙げた経過を記してある。

東京府知事従四位勳三等法学博士井上友一篆額、明治四十一年戊申詔書之旨を奉じ、南多摩郡日野町大字豊田及び川辺堀之内の有志相謀つて耕地整理組合を組織し南多摩郡豊田耕地整理組合と称した。四十三年六月起工し、大正二年二月に竣工した。其の費すところ実に三万円であつた。乃ち田甫及び新開地を合わせて六十二丁九反余歩を得

た。之を旧地に比較すれば六反二畝歩の増歩となつた云々大正四年十月とある。

3 日野町史跡其他（文化財第一次指定以外のもの）

一、西党 日奉氏居館址（史跡）

大字日野小名東光寺西（東光寺部落南方の台地、セツ塚の北方一帯の畑地）

平安朝の中頃武蔵の国司であつた日奉宗頼が、日野郷土淵庄に土着し、その子孫が武士となり、東光寺上に居館を構えて西党の本拠とした。一族繁栄遂に武蔵七党の雄に数えられた。源頼朝鎌倉幕府創設にあたり大功あり、支族廿数家に及び、それぞれ多摩川・秋川の沿岸地方に居を占め、民政上にも業績を挙げた。

二、石器土器の蒐輯（遺品）東光寺より出土の石斧・石皿・土器・石鏃等（立川松雄氏所蔵）

三、四谷神社（史跡）（日宮大権現）

日奉氏の祖宗頼を祀つたといわれる。しかし今御神体は虚空蔵菩薩である。そしてうなぎがお使いだといつて氏子はうなぎを食べないという。社頭に一丈五尺ばかりの御影石の鳥居がある。

明治三年氏子中とあるが、部落の組頭天野清助等発企人となり、東京にあつた材を六郷から筏で多摩川を上せ、それから「ころ」「挺子」「引綱」で引張つて来たものだという。当時はあたり一面の田甫であつて見はらしがきくので、一俣観で目についたものである。

四、姫 森

大字日野四、四〇八小字姥久保の田甫中に在り、二十坪ばかり、杉及び雑木数本がある。小祠があつて中に石塔が

あり、日奉氏の後室を祀つたものであるとの言い伝えがあり、たたりがあるとこわがる向きもあるが、現今児童の遊び場になっている。

五、坂上神社（飯繩大権現） 大字日野裏宿五、七〇二あたり

高尾山の飯繩権現は、ここから飛んで行つたのだと言われている。日野の庄屋佐藤七郎右エ門が文政十年旧跡に進一百十余段の階段を登つた社屋があり、道中の名所になっていたが、明治二十一年甲武線（中央線）布設の際、境内を線路敷地に割り、社殿を低く遷して改修した。

六、八坂神社境内（樺の林叢）

八坂神社の創立は明らかでないが、はじめは現在の社地よりは西方に在つたのを元龜元年今の境内に遷したという。それは三百八十五年前ということになる。今境内には樺の大木廿六本、外に杉・檜数本等があつて美事な林叢をしている。

七、筆塚

八坂神社境内社殿右側にある。自然石三尺ばかり。行書で筆塚の二字があり、右下に文栄とある。裏に文化九年九月日寄進上宿若者中とある。彫平作。文栄は、小名谷の玉南文栄といつて手習師匠をした者があり、時代も合つているが上宿若者とはどんな因縁があつたか分らない。日野の筆塚は此所ばかりである。手習子が筆のちびて使えなくなつたのを集めて埋め、天神講の日などに供養をしたものである。

八、皇太子殿下お手植の松

大正十年十一月十七日、陸軍特別大演習（第一日）の際、皇太子殿下（今上陛下）御名代として、日野台傘松御野

立所附近に於いて統監せられた。三尺ばかりの雄松一本を御手植あつた。現在式丈余に成長、翠色彌く濃かである。

附 御駒之松

大昌寺坂右中途にある。皇太子殿下前記陸軍特別大演習御統監のため、横浜の大本営より列車で日野駅に御着。それから乗馬で傘松御野立場に向はせられたが、日野台に登る急坂下で下馬せられ、それから徒歩で御野立場まで進ませられた。御乗馬を繋いで置いた場所に時の町長斎藤文太郎が雄松一本を植えたのである。これがまた、現在二丈計りに伸びている。

九、明治天皇御小休所

明治天皇は、山梨・長野・三重の各県地方に行幸の際、日野佐藤俊宜方に御小休せられた。この朝、府中の御宿泊所をお立ちになり、八王子に向はせられる途中で、御乗物は馬車であつた。また翌十四年二月二十日、八王子の狩場より連光寺の狩場に向はせられる際にも御小休せられた。ここから愛馬金華山にお乗りになり、白雪に被われた野道を進ませられた。

十、竹間加賀入道等署名、竹木伐る儀停止の触れ書

日野・佐藤仁氏所蔵（厚紙横一尺四寸三分、縦九寸六分）

当郷に於て竹木切る儀 停止せられおわんぬ。誤つても一本なり共切る者、之れあるに付ては、従類共にはり付に懸けらるべき旨仰せ出さるものなり。仍て件の如し。

（天正十四年） 「丙午三月九日（印）」

日野惣郷

立川領東光寺境より谷町屋迄

平野豊後守

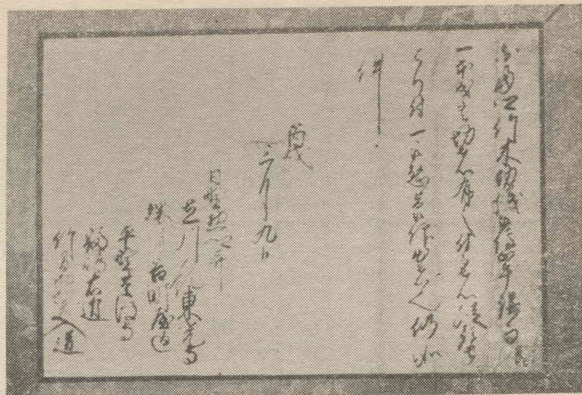
福島 右近
竹馬加賀入道

平野・竹間等は皆北条の臣である。北条氏の民政は諸方面にわたつて頗る見るべきものがあつたが、山林竹木等をも保護して濫りに伐採することがないようにした。けだし今日の保安林の源をなすものか。というように大正二年九月東京府刊行の東京府民政資料中に記してある。

また、この嚴重過ぎるような触れ書きは、中部で勢威をあげた豊臣秀吉が更に關東へ手を延ばそうとする情勢なので、北条の威厳を示し、物資の浪費をいましめた軍政上の見地からだと思ふべきがある。

十一、日野渡船場址

日野渡船場は、甲州街道が万願寺道から日野渡船場道に移つて以来、大正十五年八月二十五日、現日野橋開通まで永い間の渡船場であつた。多摩川筋では下流の六郷と日野の渡し場の二つだけが街道にかかつていて、他の間道や作場道の渡船場とはちがつて重要に考えられていた。大小二艘の平底船が常備されていた。但し秋の末水流の定まるのを待つて板橋を架けた。国から若干の補助もあつたろうが、日野在住者を除き旅人から船賃をとつた。渡船の取扱は日野町に委託されていたのだが、実際の取扱人は年々入札の上請負寄せた。江戸時代には、「さす又、袖がらみ、鳶口などを立て列ねて威厳を示し、舟賃取極の高札も立ててあつた。



(日野郷郷竹木切儀停止之状)
(竹間加賀入道外二人署名) (佐藤仁氏所蔵)

高札文

定

当年五月より辰四月迄中

一年之間間船賃三割増

菅人 十一文

本荷駄口付共二十文

輕尻馬一疋口付共十六文

右の通可取之若相背者可為曲事もの也

天保五年午五月奉行午五月

明治三年日野郷郷の教官岡村笠城が渡船場を仲田北の堤防からながめた漢詩がある。

幕末古川仙八翁が、鮎ずしをにぎつて評判高く、江戸の粹人がわざわざやつて来るので、離れ座敷を建て増す。

さては大名や、徳川大奥の勝手元まで送りこむようになった。

鮎漁の玉川亭 明治の中頃、天野要蔵親分が玉川亭を開店した。鵜飼をやり遊船を浮べた。妻女おとく姉御が、鮎の即席料理の天婦羅、塩焼、酢のもの、魚でん、また石焼など独特の味を出したので、東京其他からの遊覧客でにぎわつた。その後、川敷の砂利をとつたり、水かさが減つたりし鮎がとれなくなつたのでやめになった。

十二、昔の多摩川堤防のあと

多摩川に近く国道の東西に所々堤防のあとが残っている。昔多摩川の流れが、洪水で南に北に度々移り変つたので当時の人々は堤防を築くのに苦勞をし、水防に骨を折つたことである。

十三、下万願寺の開墾

往年多摩川洪水によつて下万願寺地先がその害を被つて、良田若干を流失し、荒蕪地のままになつてゐた。明治十二年一月有志者相謀り荒地を区劃し、約六町八反歩を得て篠崎定右衛門等共同して開墾し、なを二十九名にて分割し漸次開墾をつづけて明治四十二年全部の開墾を終つたという。これは稻荷社内にある開墾記念碑に記してある。この様な開墾事業は各地方に多数あつたことである。

十四、**豊田若宮神社** 狛犬その他

同神社の狛犬は、近代的に胸をそらすことなく、横這いの様子を見せ、顔のすがたも変つたところがある。鳥居も輪がついており袖もあり手のこんだものである。社殿の前にある杉は樹齢三百年位の大木である。

十五、日野台の富士塚

幕末、埼玉の鳩ヶ谷近在の富士講中が四十人位で甲州街道の道普請をした。その時塚を築いて富士浅間の遙拜所としたという。

十六、上人塚

今デ―ゼル工場内に取り込まれたが、大体原形を存している。大形のもので径七八間高さ丈余上に径三尺位の大楕一本と他一本の楕がある。古昔烽火台に使われたものだと言く者があるが、古墳であつたのだらう。この東方に並んで小さな塚が二基あつたのである。また上人塚の名は狐が狸かがばけて上人のすがたをするのではじまつたのだという。

わが日野町の年表

[illegible]

本日と世界

[illegible]

年 表

時代 世紀					原 始 時 代
6	5	4	3	2	1
五三 五八		三二	二六		
法隆寺建立。 聖德太子撰政となり諸政改革。小 野妹子を隋に遣わす。	仏教が朝鮮から伝わった。	このころ大和朝廷の勢力が強くな った。日本軍が朝鮮に行つた。仁徳天皇 の陵が築かれた(世界一の大さ)	倭の女王が使を魏に送つた。		縄文式文化がはじまつた。 (縄文式土器、石の道具、狩や 漁りの生活) 弥生式文化が起つた。 (うすい土器、平地に堀立家を作 る) このころ小国家が分立していた。
(代時化交墳古)				1	
	東光寺上、堀之内の原村、豊田原などに古墳が築 かれた。				日野町の できごと 日野合の周辺に原始時代の住民がすまいをした。 なかでも東光寺上豊田堀之内の上には永い間かな りたくさんな住民が居たことは石器土器石たみ などのあることで考えられる。 住民が高台から低地に下りて稲を栽培するようにな つた。村のような住民の集りができおもに同一 民族の人々がかたまつて住んでいた。
					それで氏族の長などが死んだときは塚を築いて葬 つた(古墳)

時代 世紀					
12	11	10	9	8	7
二八五 二八五 二九三 建久 3	二〇五 二〇五 二〇五 天喜 元	九〇五 九〇五 九〇五	八九四 八九四 八九四	七二七 七二七 七二七 延暦 三	六五五 六五五 六五五
源頼朝、鎌倉に幕府を開いた。	平清盛大政大臣となる。 保元の乱、平治の乱 平氏が源氏に亡ぼされた。	紀貫之等が古今和歌集をえらんだ 八幡太郎義家陸奥守兼鎮守府將軍 となる。	遣唐使をやめた(六三〇—八九四 ・二六〇年間)	大宝の律令が出来上つた。 和銅三年都が平城京(奈良)にう つた。	大化の政新、翌年政新の詔が出 た。
二九三 正治 1					
坂上神田(飯縄大権現)鎮座、後一、四二八高尾 山に飛んで行つたという。	保元平治の戦には西党日奉氏の一族は源氏に味方 して、手柄を立てた。日奉氏の一族である平山季 重は、木曾義仲を討つ義経の軍中であつて、宇治 川で先陣をなし、平氏のこもつた一の谷の城攻め にも氣焔をあげた。	八幡太郎の勢望が盛んとなり、自ら進んでその家 人だという者があつた。 日奉氏の一族も次第に多摩川秋川の沿線に勢力を 伸ばし西党と称え武蔵七党中の大勢力となつた。	この頃日奉宗頼、国司となり国府で政をした。任 終つて土着しその孫の宗忠は、日野東光寺上に居 館を造り日奉城と呼んだ。	今の府中市に武蔵の国府が置かれたので、多摩川 を越して往来した。 国分寺を建てるのにその人夫に出たり、屋根瓦を 寄進した住民もあつたであらう。	

18			17				16							
七〇三元祿 七〇九宝永 七四〇延享	16 6 15	赤穂浪士の仇討 新井白石將軍家宣に用いられる。 青木昆陽蘭字を学ぶ。さつまいも の栽培を伝えた(八代吉宗)	一六五二承応 一六五四元祿 一七〇〇元祿	2 7 13	玉川上水が通じた。 卑猥の書出版処罰、芭蕉歿。 徳川光圀歿す。	一六〇〇慶長 一六三三慶長 一六七七寛永	5 8 14	関ヶ原の戦い。 徳川家康が江戸に幕府を開いた。 五人組制を厳にする。 島原の乱起る。 鎖国が厳重になった。ヤソ教厳禁	一五〇〇天正 同 年	18 15 10	(元)八王子城が秀吉の部将前田利 家上杉景勝等に攻め落された。 秀吉が小田原北条氏を亡ぼした。 今の八王子の市街が前田利家の命 で長田作左エ門等によつて開かれ た。	一五〇九永祿 一五七〇元龜 一五七〇天正	12 1 14	武田信玄が澁山城を囲む、城主小田原北条の氏輝 山下神明社を谷伊予が勧進した(伊勢神宮) 小田原北条の部将、竹間加賀入道、福島右近、平 野豊後守の名で日野惣郷並に立川領東光寺境より 谷町屋迄竹木伐る儀停止の触書が出された。
一七三三正徳 一七五五宝暦	3 3	横丁坂下地藏尊像、江戸小舟町井田八右エ門の発 願で日野にえん故のある江戸鍛冶町、多川民部が 鋳た。 万福寺建立、心峰良益和尚開山。	一六六八寛文 一六八八貞享	8 1	老中阿部豊後守が日野駅の助郷として近郷三十八 ヶ村伝馬組合を定めた。	一六〇二慶長 一六三〇元和 一六七七宝永	7 1 14	大昌寺建立、八王子大善寺住職讀上人が開山。 慶長年間江戸幕府が五街道の一つとして甲州道中 を開く。その時日野はその一駅となつた。 北原の欣浄寺が建つた、碩伝開山、日野久兵衛世 話、後正保元年に僧上寺長老超誓再興。 代官近山与左衛門、高室四郎左エ門検地して、田 畑百二十七町六段余、高、二千二百二十五石余と なつた。 豊田の地頭大久保勘三郎の女妙連が善生寺を建て た。	同 年	18 15 10	織田信長明智光秀に殺さる。 豊臣秀吉が聚楽第を造つた。	一五九六天正 一六〇〇元龜 一六〇六天正	12 1 14	武田信玄が澁山城を囲む、城主小田原北条の氏輝 山下神明社を谷伊予が勧進した(伊勢神宮) 小田原北条の部将、竹間加賀入道、福島右近、平 野豊後守の名で日野惣郷並に立川領東光寺境より 谷町屋迄竹木伐る儀停止の触書が出された。

封			建			時			代			(期 前)		
13			14			15								
二二承久 二三貞永	1 2	頼朝が諸国に守護地頭を置く。 承久の変 御成敗式目(貞永式目)を定めた 秩父青石を用いて、供養卒塔婆が 立てはじめられた。(板碑のはじ め)	二三元弘 二三建武 二三暦応	1 3 3	鎌倉幕府がほろびた。 建武中興 足利尊氏が幕府を開いた。	二四七応永	4	金閣ができた。 応仁の乱がはじまる。 銀閣ができた。 この頃各地に一揆がおこった。農 民の代表たちが神社などに集り申 し合せをなし、領主に税を軽くす るようななどと訴えた。	二四八文明	10 1	一五三天文	12	ポルトガル船が種子島に来て鉄砲 を伝えた。	
二三建暦	3	五月頼朝の大功臣前侍所別当和田義盛が北条時政 に排斥せられたので、兵を挙げたが却つて討たれ た。日奉氏の一族及び横山党など和田に味方した 者が多かったが共に亡ぼされた。和田の味方した 日野でも板碑を立てはじめた。古いのは、東光寺 の文永、宮の延慶、石田寺の建武、以上は、六百年 前のものの最後のものは延命寺の文明二年。	二四〇元徳 二四〇元弘 二四〇暦応	元 3	宝泉寺創建、曇芳周広大和尚開山。當時は西の方 姥久保の地にあつたが天正年間に現在地に移つ た。下田八幡神社創建源氏の守護神	二五〇永祿 二五〇文明	2 6	八坂神社中興 延命寺に文明二年九月二十三日逆修とある板碑が ある。日野一大きく彫りが手がかんてありまた新し いもの。	二五九永祿 二五九元龜 二五九天正	12 1 14	武田信玄が澁山城を囲む、城主小田原北条の氏輝 山下神明社を谷伊予が勧進した(伊勢神宮) 小田原北条の部将、竹間加賀入道、福島右近、平 野豊後守の名で日野惣郷並に立川領東光寺境より 谷町屋迄竹木伐る儀停止の触書が出された。	二六二慶長 二六二元和 二六二宝永	7 1 14	大昌寺建立、八王子大善寺住職讀上人が開山。 慶長年間江戸幕府が五街道の一つとして甲州道中 を開く。その時日野はその一駅となつた。 北原の欣浄寺が建つた、碩伝開山、日野久兵衛世 話、後正保元年に僧上寺長老超誓再興。 代官近山与左衛門、高室四郎左エ門検地して、田 畑百二十七町六段余、高、二千二百二十五石余と なつた。 豊田の地頭大久保勘三郎の女妙連が善生寺を建て た。 老中阿部豊後守が日野駅の助郷として近郷三十八 ヶ村伝馬組合を定めた。
二五三正徳	3	横丁坂下地藏尊像、江戸小舟町井田八右エ門の発 願で日野にえん故のある江戸鍛冶町、多川民部が 鋳た。	二五三寶暦	3	万福寺建立、心峰良益和尚開山。									

封 建 時 代							
19							
一八一七 天明	一八一八 天明	一八一九 天明	一八二〇 天明	一八二一 天明	一八二二 天明	一八二三 天明	一八二四 天明
1	2	3	4	5	6	7	8
高田屋嘉兵衛が得撫島日本の本拠を建つ。本居宣長が伊能忠敬に伊豆相模武蔵常陸等測量を命ず。間宮林蔵がカラフト探検、間宮海峽発見。	外国船打払令を発す。	大塩平八郎乱を大坂に起す。翌月自刃。	アメリカ合衆国のペルリが浦賀に来た。	日米通商条約が結ばれた。尊王攘夷の論沸騰して世の中が大いに騒がしくなる。	井伊直弼大老となり独断情勢止むを得ずとして5ヶ国と条約を結ぶ。安政の大獄志士を捕えて刑す。翌年桜田門外で井伊大老殺さる。将軍家茂入京、処士を募つて新撰組をつくる。	蛤門の変。正月鳥羽伏見の戦。	蛤門の変。正月鳥羽伏見の戦。
一八二五 文久	一八二六 文久	一八二七 文久	一八二八 文久	一八二九 文久	一八三〇 文久	一八三一 文久	一八三二 文久
3	4	5	6	7	8	9	10
日野宿を中心として多摩農民が組織された。	近藤勇、土方歳三等新鋭組に入隊。三月將軍家茂入京に際し中山道より京都に入る、やがて解隊し、新に新撰組を組織。	六月十二日、日野農民主となり、秩父百姓一揆の支隊を築地河原(小宮町北方)で撃退した。	江戸に帰つた近藤勇、土方歳三等は甲州鎮撫隊二百五十名の主将として甲州に赴く途次、日野の佐藤宅に休憩、日野春日隊は別隊として同行した。(三月三日)	函館五稜廓に拠つた土方歳三五月十一日、馬上でたおれた。	北原欣浄寺本堂に日野郷賢を創めた。	神奈川県の管下になつた。廃藩置県で県下第三十二区に入る。	下田小学校安養寺本堂を仮校舎として開設。
一八三三 文久	一八三四 文久	一八三五 文久	一八三六 文久	一八三七 文久	一八三八 文久	一八三九 文久	一八四〇 文久
7	8	9	10	11	12	13	14
日野小学校山口平太夫長屋を仮校舎として開設。(三月廿五日)	豊田小学校山口平太夫長屋を仮校舎として開設。(三月廿五日)	日野小学校普門寺本堂を仮校舎として開設。(五月五日)	日野小学校安養寺本堂を仮校舎として開設。	下田小学校安養寺本堂を仮校舎として開設。	神奈川県の管下になつた。廃藩置県で県下第三十二区に入る。	北原欣浄寺本堂に日野郷賢を創めた。	函館五稜廓に拠つた土方歳三五月十一日、馬上でたおれた。

近 後 (期)							
20				19			
一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治
37	38	39	40	41	42	43	44
日英攻守同盟成る。	二月十日日露戦争起る。	愛国婦人会生る。	山口図書館ではじめて巡回図書館を行う。	九月一日日露国交回復、条約調印。	韓国統監府開庁。	米国で日本人排斥問題起る。	十月十三日戊辰詔書頒布。
一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治
37	38	39	40	41	42	43	44
王政復古の論告、慶喜將軍職を解く。江戸を東京と改む。(明治元)	学制発布。東京横浜間鉄道開通。	十月廿六日「君が代」樂譜制定。	憲法発布。	三多摩神奈川県から東京府に移つた。	明治三十七八年戦役。	四月下関条約十一月遼東還付。	産業組合法発布。
一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治
37	38	39	40	41	42	43	44
日野小学校々舎を新築す。普門寺敷地を折半。	十一月多摩郡を分けて東西南北の四郡となし、佐藤俊正第一代の南多摩郡長となる。	六月十六日、明治天皇山梨三重御巡幸の途、佐藤宅に御小休になつた。	二月廿日、明治天皇八王子より鬼嶺のため連光寺への途次同じく御小休。	七月、日野宿及び宮上田新井石田万願寺を合せ戸長役場を置く(二十六年に日野町と桑田村となつた)。	二月十二日、甲武鉄道新宿立川間開通、八月十一日八王子まで開通。	二月、日野下町に大火。	日野町農会、農会法によつて創設。
一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治
37	38	39	40	41	42	43	44
日野義順等の首唱で養蚕法を研究する扶桑社結成。	大昌寺本堂で絹糸品評会を開催。	日野町農事調査附町是を印刷頒布。	二月甲武鉄道豊田駅が開設。	四月日野町桑田村合併して日野町と称す。	六月十日甲武鉄道八王子より甲府に延長。	十月入営壮丁のため教練講習開始。	日野補習夜学会を日野町立日野実業補習学校に改む。
一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治	一八七〇 明治
37	38	39	40	41	42	43	44
五月東京電燈株式会社の電燈国道沿い及四谷二百戸三〇〇燈つけた。	三月廿一日日野町青年会を組織、四月六日同淑女会を組織。						

1922	44	諸外国との条約が全く対等となつた。
1923	45	明治天皇崩御。
1924	3	第一次世界戦争参加。
1925	9	第一回国勢調査。
1926	12	メートル法実施。郡制廃止。関東大震災。
1927	14	普通選挙法定まる。
1928	6	満州事変起る。
1929	8	国際連盟脱退。
1930	12	日華事変、砂糖、マツチ、小麦粉米穀等配給初まる。
1931	16	大平洋戦争起る。
1932	17	衣料点数切符制実施。
1933	20	大日本婦人会創立。
1934	21	東京初空襲。ボツダム宣言受諾。農地改革指令。
1935	22	新憲法が出来た(五月三日)。
1936	23	六・三制教育実施。
1937	24	湯川秀樹中間子理論によりノーベル賞を受く。中華人民共和国生る。
1938	25	警察予備隊設置。朝鮮動乱。
1939	26	サンフランシスコ対日講和条約。日米安全保障条約調印。
1940	27	テレビジョン放送開始。

1940	9	後男女合同日野町青年団と称す。
1941	10	十月第一回南多摩郡青年団運動競技大会(八王子富士森)に於て庄倒的好成績で優勝旗を得、続いて三箇年連勝。
1942	15	三月七日から十日間明治神宮造営工事奉仕団に入名参加。
1943	18	十一月十一日日野郵便局電信開設。
1944	19	電燈は七年五月に下田、新井、石田、宮、堀之内、豊田、河原に点火された。
1945	20	十一月十七日皇太子殿下御名代として陸軍特別大演習御統監。日野台傘松附近で御観戦。日野郵便局に電話が特設された。
1946	21	八月廿五日国道日野橋開通式。
1947	22	乗合自動車立川高幡間運転開始。
1948	23	四月日野電話開設三〇口、後日野桑園及七生村役場に延長。
1949	24	十二月二十日中央線電車運転開始。
1950	25	十二月廿二日日野町農会経営優良の故を以て表彰された。
1951	26	国道大改修成る(現在のもの)。
1952	27	十二月吉日時計日野工場仲井の水田中に建設。
1953	28	十一月日野町青年団文部大臣より経営優良社会教育に貢献の故を以て表彰。
1954	29	六月一日日野新駅開所。複線開通。
1955	30	東京都制実施、大達茂雄初代長官、杉村光膺次長二月十日日野小学校東方用水堀に米軍爆弾投下。
1956	31	二月品川区大井第一国民学校児童二百名町内寺院その他に疎開分宿。
1957	32	八月、空襲。六月十日八王子消防署の出張所が日野町役場前に置かれた。

1946	29	MSA四協定調印。米の水爆実験によるビキニ被災。
1947	30	五月十六日豊田小学校独立校となる。
1948	31	豊田日野台に日野町役場出張所が置かれた。
1949	32	日野町警察署が(自治)開署された。
1950	33	四月日野小学校現在の位置に移転。
1951	34	六月十日日野台小学校独立校となる。
1952	35	十一月一日町教育委員会設置。
1953	36	四月日野第二中学校設置。

編纂を終えて

本誌は、編纂委員会で編纂方針を決め、分担して記述に当つたが、頁数や期間の制限もありかたがた、項目の選定配列に当を得ないところもでき、庶民のはたらきとか民俗とかの方面は大分省略の余儀無きに至つた。

あらためて将来学術的調査研究を遂げたものを編纂するよう希望するものである。

挿入の写真は、その会社工場側の提供にかかり、また委員の提出によるものがあるが、大部分は、日野町役場内の写友会同人の撮影になつたものである。ふかくその労を多とするものである。尤も頁数の関係もあり割愛したものがほかに多数ある。

写友会	撮影者氏名
大貫 武	滝瀬 篤
中村 亮助	村野 春雄
	加藤 一郎
	大藏 健
	宇賀神 央

“ ” “

日野町誌
編纂執筆者

古 土 杉 本 飯 小 齊 土
谷 方 浦 田 塚 池 藤 淵
剛 賢 俊 節 嘉 静 英
次 郎 一 弘 三 一 也 夫

川 端 下 一 二 三
藤 山 仁 亮

委員 委員長 副委員長 常務委員 委員 顧問
問 与 員

日野町誌
編纂委員

齊 野 野 天 古 宇 杉 本 日 中 土 齊 飯 小 安 土 谷 瀧 山 古 土 土 古
野 野 谷 津 浦 田 野 島 淵 藤 塚 池 西 方 口 瀨 内 谷 方 方 方 古 土 土 古
次 剛 雅 一 俊 義 英 静 節 嘉 主 喜 重 梅 賢
郎 郎 郎 祐 弘 利 穰 二 也 三 一 信 計 夫 治 滋 雄 一 康 榮

日野町商工業名鑑

屋根用厚型スレート日本工業規格合格工場

製品課目 厚型スレート万年堀
街灯用コンクリートポール

日野セメント工業株式會社

社長 仙波 政 信

南多摩郡日野町日野七七七三

電話 (日 野) 1 0 6 番

建築設計施行

一級建築士

横尾 満 夫

横 尾 工 務 店

南多摩郡日野町豊田

(都知事登録済。ハの九八四九)

業 負 請 築 建

設 建 村 中

郎 太 豐 村 中

地 番 462 町 下 町 野 日

番 061 (野 日) 話 電

業 負 請 築 建

錄 登 事 知 都 京 東

治 直 島 寺

地 番 931 井 仲 町 野 日 郡 多 南

番 212 (野 日) 話 電

賣 材 疊 · 負 請 一 事 工 疊

店 指 定 事 工 疊 區 地 摩 多 三 庁 規 警

達 用 御 庁 官 諸

社 會 有 限 業 產 摩 多

一 喜 沼 生

番 702 (野 日) 話 電

賣 販 製 木 腕 銘 及 材 築 建 一 般

承 用 御 木 腕 使 用 電 力 京 東

所 工 木 材 製 崎 宮

方 精 崎 宮

地 番 352 町 仲 野 日 郡 多 南

番 25 (野 日) 話 電

土 木 一 般 請 負 業

多 摩 産 業 有 限 会 社

生 沼 寅 吉

東 京 都 南 多 摩 郡 日 野 町 下 田 一 八 二

電 話 (日 野) 2 0 5 番

竈 長 州 風 呂 水 道 配 管

井 戸 家 庭 用 自 動 ポ ン プ

コ ン ク リ ー ト 基 礎 及 タ イ ル 工 事

菱 山 徳 平

南 多 摩 郡 日 野 町 仲 井

和 洋 壁 一 式 請 負
タ イ ル 工 事

谷 左 官 工 業 所

谷 栄 吉

南 多 摩 郡 日 野 町 宮 3 0 8 番 地

庭 木 の 植 込 手 入 又 は 刈 込

垣 根 ・ 袖 垣 ・ 間 根 ・ 四 ツ 目 垣

み の 垣 ・ あ ず ま や ・ 草 花 造 園

其 の 他 一 式 請 負 工 事

植 木 職 小 島

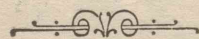
小 島 峯 吉

南 多 摩 郡 日 野 町 北 原 2 4 0 2 番 地

Hi-Fi

ハザマの電気音響機器

- | | |
|-------------|-----------|
| ◆シネマスコープ | ◆ボイスフィルター |
| 立体音響再生装置 | ◆LP電蓄再生装置 |
| ◆高音用低音用 | ◆テープレコーダー |
| 各種ラウドスピーカー | ◆工場学校高声電話 |
| ◆高音用セルラーホーン | ◆一般拡声装置 |
| ◆低音用パツフル | ◆電気音響機器一切 |
| ◆ネットワーク | |



ハザマ電気株式会社

東京都南多摩郡日野町 3339 電話日野 110~5
神戸支店 神戸市生田区浪花町 59 朝日ビル 416 号 電話元町(4) 7391 番
京都出張所 京都市中京区釜座通り三条上ル突抜町 電話本局 1876 番

東京都知事登録第(3) 7766号

家屋移転曳方工事
重量物移動工事コンクリート及鳶工事

株式会社 日野大野

三代目 大野熊吉

南多摩郡日野 2456 番地

電話(日野) 28 番

土瓦・セメント瓦下葺

各種屋根工事請負

小林屋根店

南多摩郡日野町下田 404 番地

電話(日野) 201 番

和洋家具製作販売
和洋建具製作販売

池田建具店

南多摩郡日野町仲町

電話 (日野) 203

どうぞ

御引立願います

有限会社 齊藤材木店

齊藤謹之助

電話 (日野) 149

木材・竹・小丸太・ベニヤ

星印 罐壇詰製造元

南多摩郡日野町日野三、三八一番地

藤野罐詰株式会社

電話 日野 (三四番)

金亀印

ぬい糸ミシン糸

金亀糸業株式会社

(御気に召さぬ場合は殆んど御使用後の場合でも新品と御取換はご購入の店で致します)

本社 東京都日本橋富沢町一番地
工場 南多摩郡日野町日野三三八番地

ボーリング用機器製造
精密機械の製造

豊田製作所

所長 松井 命

日野町豊田 1090
電話 八王子 3475

時計部品及附属品
写真器部品及附属品
各種精密器製作

株式会社
大松製作所

取締役社長 大松勝利

南多摩郡日野町
日野 347番

精密機械並器具製作

有限会社

桐生製作所

所長 桐生 清太郎

印刷と製本

岩田印刷所

岩田 栄三

南多摩郡日野町日野 一一三一

電話(日野)七七番(呼)

火の見櫓の建設の御用は
蛭田工業所へ

営業種目

鋳金製罐配管
各種ラヂエーター
製作並修理

営業所

南多摩郡日野町上田 133
電話（日野） 140番

村野電気商會

東京電力電球交換所
電灯電力工事申込所
ラヂオ修理販売
東京電力公認

青果食糧品
武藏屋商店

日野台一区六八〇一番地
田中小三郎

株式會社 七和精機製作所

沿革 昭和十年七月和田工場創立開業
昭和二十七年二月七和精機製作所に変更

生産品目 精密機械製作並に自動車部分品

取締役社長 和田七郎

東京都南多摩郡日野町日野三三八七 電話 3

時計部品及附属品の製造
写真機部品及附属品の製造
精密機械の製造

日東時計株式會社日野工場

南多摩郡日野町下河原

麵類一式製造販賣

風間製麵株式會社

代表取締役 風間 竜之助

南多摩郡日野町二七七八

電話 (日野) 1 2 7 番

栄養食なら新鮮なる当店オトーフから

各所病院御用

田中豆腐店

南多摩郡日野町日野台厚和寮前

田中文平

各種学校用放送設備
テレビジョン受信機
テープレコーダー
安定定電圧電源装置
各種電子管測定機

設計
製作
販賣

日野無線社

東京都南多摩郡日野町日野7169番地

電話 日野 154番

研究品試作品応受注

西條 芳 麻

ラヂオ電氣器具販売
東京電力公認電氣工事

高野電氣商會

日野町豊田一〇五八

高野 誠 一

腕時計用宝石及
半加工原石製造

鈴木宝石研究所

日野町谷戸

鈴木 勝 雄

營業品目

美術化粧箱・機械箱・折疊箱

ダンボール箱・パツキンケース

紙製品印刷

有限会社

多摩紙器製作所

社長 小柳津梅次郎

日野町日野台七四二七番地

電話(日野) 六四番

緑屋製パン株式会社

八王子市横山町総本店 電話 861

八王子市仲町売店

八王子市千人町売店

八王子明神町売店

南多摩郡日野町日野台売店 電話 196

瓦煎餅各種製造

丸松製菓工場

松澤順吉

南多摩郡日野町西町
電話(日野) 二五番

果実・野菜

平野青果店

日野町三三五七

和菓子・パンとケーキ

慶弔式菓子

御菓子司

中

村

屋

日野駅前 電話(日野) 一一六

武
藏
屋
へ

仲
町
大
通
り

お 食 事 は

中 華 蕎 麦
め ん 類 類 ば
井

靴 運 動 靴 ゴ ム の 倉 藤
特 約 店
靴 の 御 用 命 は 信 用 ある

喜 久 屋 靴 店

山 内 菊 造

日 野 町 日 野 台 6 7 4 3

餅 煎 種 各

有 限 會 社 齊 藤 商 店

社 長 齊 藤 市 重 郎

南 多 摩 郡 日 野 町 下 田 4 0 6

電 話 (日 野) 2 0 2

御 祝 儀 用 御 引 菓 子
御 進 物 用 菓 子 類

有 限 會 社

相 模 屋 菓 子 店

日 野 町 森 町 電 話 (日 野) 一 一 五 番

社 長 和 田 兼 作

榮養

豊富な

お豆腐の御用命は

天野豆腐店

日野町金子橋

電話(日野) 一四四番

天野作藏

料理菓子
和洋

すけい

池田喜一郎

中央線豊田駅前 南多摩郡日野町豊田一〇四〇

二十年の歴史と経験を誇る
親切誠實のクリーニング工場

有限会社 オザワクリーニング店

日野チーゼル工業株式会社

小西六写真工業株式会社

各官公庁御用承

代表者 牛村清治

南多摩郡日野町日野駅前 電話(日野) 一〇八

創業六十年

呉服と洋品

伝統と・信用と・趣味の店

仲町大通り

古谷呉服店

靴の御用命は信用ある

戸崎靴店

日野町仲町高幡通り

書籍雑誌文房具
事務用品教材石鹼類

有限会社 黒田書店

豊田駅前通り一、〇六三

黒田喜夫

呉服太物

伊勢屋呉服店

豊田駅前

教科書・書籍・雑誌・文具類・たばこ

有限会社 伊藤書店

日野町日野二六一九

代表取締役 伊藤茂

電話(日野)三三番

文房具・玩具
写真材料

有限会社 昭文堂

代表取締役 古谷福次郎

日野町二六三〇番地

綿御布団の御用命は

三多摩一安くて信用ある当店へ
綿毛布蚊帳布団御仕立綿打直し

中島綿布団店

日野町仲町郵便局前

新規開店及び御仕入には何でも間に合う
当社卸部を御利用下さい
卸小売皆様の御店

井上ボタン

化粧品・糸類・裁縫用品・ナイ
ロン靴下・石鹼類・雑貨・毛布
東京アタリヤ石鹼三多摩総代理店

電話(日野)一六四番

洋品

日華ゴム特約店

洋傘

ゴム靴

雨合羽

履物

大村屋商店

日野町金子橋

志村幸太郎

パーマメントウエーブ

コールドウェーブ

婚禮着付

多摩川美粧院

豊田駅前

ドライクリーニング承り

戸向クリーニング店

戸向

南多摩郡日野町万願荘

蒲團仕立迅速丁寧の店

綿打直し

日野小学校際

守屋製綿工場

靴靴靴……

新調と修理の店

親切丁寧に致します

仲町大通り

坂口靴店

豊田駅前通り

ラッキー理髪店

鈴木太郎

板金加工一式
文化生活の家庭金物は

大貫金物店へ

日野町豊田一〇五七番地

煙草・雜貨・日用品

成井商店

日野町宮

營業品目

家庭建築金物・刃物・工具・針金・
釘・トタン板・ボールドナット類・
特殊金物製作

須藤金物店

日野町仲町 電話(日野)一六五番

税務相談青色申告指導

齋藤經理事務所

計理士 齋藤 明

東京都南多摩郡日野町六、八〇一番地
電話(八王子)三〇八六番

共存共榮

- 貯金は農協へ！
- 肥料・飼料農薬等の購入は農協から
- 米・麥・果實・乳・野菜等の販賣は農協へ
- 醬油・精米・麥・精粉等の加工利用は農協で
- 生産資金は農協から
- 農協の發展は農協の全面利用から

日野町農業協同組合

東京陸運局第一の二〇四号認証

普通一 自動車分解整備工場

東京都第七〇五号承認自転車サービス店

山口自転車
宮田自転車
クラブ自転車
各地区代理店

スタンダード石油会社特約店

株式会社

馬場商會

取締役社長 馬場元衛

電話（日野）六番

ハイヤーの御用命は

電話（日野）161番

日野交通株式会社

社長 一ノ瀬喜代治

本社西町3750番地

日本一軽い
ヒドリの自転車
山口の自転車
ゼブラの自転車

工場直結代理店

株式会社 阿川自転車商会

自転車リヤカーの御用命は

是非当商会へ！

南多摩郡日野町日野一、五三二 電話（日野）四三番

酒類の御用は
白鷹特約店

大坂屋酒店

本店	日野町日野二四四
TEL (日野)	七七
分店	日野町日野台六八〇一
TEL (日野)	一四八
支店	八王子市追分町三
TEL (八王子)	三九一六
	八王子市小安町二ノ一五四
TEL (八王子)	一〇五

荒物各種・燃料・煙草

味噌・醬油・酒類

齊藤商店

日野町万願寺 123

電話(日野) 206番

酒類・味噌・醬油・燃料

精米加工・荒物雜貨

株式会社

森屋商店

電話(日野) 20番

和洋菓子
御進物調製

マルエス菓子店

日野町豊田駅前通り

菅野憲三郎

薪炭石油
食料品

豊田驛前山口商店

燃料の大口は卸値で致します

山口保助

旅館御料理

日野館

南多摩郡日野町西町

電話 一七番

酒類・たばこ・食品・雜貨

平野商店

毎度有難う存じます

南多摩郡日野町日野 2737

電話(日野)117番

平野銀作

洋品雜貨
燃料履物商

小賣販賣店

有限小島商店

日野町二五三四
電話(日野)一二九

取締役
社長 小島安藏

たばこ酒
有限公司

大貫商店

豊田駅前

日野町豊田一〇五八

青果・海産物・食料品

恵比壽屋商店

豊田駅前通り

守屋茂

豚・カツ・コロッケ・ハム

増田牛豚肉店

豊田駅前

増島チヨ

豊田駅前通り

藤屋商店

洋服新品

洋品中古

雜貨掘出物

大勉強の店

何でも間に合う
誠實な店

陸海産物・乾物・瓶罐詰

調味品・海苔と鰹節

天野食品店

電話(日野) 一五六

味噌・青果物

醤油・食料品

御菓子

(森屋支店)

株式会社 一ノ瀬商店

日野町西町

電話(日野) 一六一番

酒類・たばこ・調味料

日野町仲町

扇屋商店

電話(日野) 十四番

鮮魚仕出し

魚常

日野町豊田駅前通り

銘酒・白扇直売所

有限会社 ナカノ商店

日野町西町

電話(日野) 一七七番

銘茶・乾海苔・菓子

藤森園

日野町豊田駅前通り

おとうふなら

豊田の

小林豆腐商

日野町豊田三九六

青果物・食料品・荒物・雑貨

池田屋商店

豊田駅前通り

食料品一般御用命は

専門の店当店へ

末廣屋本店

日野町仲町二七七四

電話(日野)一二三番

雑貨・鮮魚・酒

味噌・醬油・薪炭

北田屋商店

日野町石田

土方武夫

青果物
海産物

食料品

大崎屋

豊田駅前

土屋好雄

靴の御用命は

信用ある

喜久屋靴店

鮮魚仕出し

豊田駅前

魚辰

山崎辰五郎

江戸前

鮮魚

佃煮

何時も新しい品を

何時も安く売る店

石井商店

雜貨・味噌・醬油・食料品

多摩屋商店

日野町第二日野万一〇八四

TEL (二〇〇)

鮮魚仕出し

日野駅前

中島魚屋

米穀・薪炭・飼料

有限平澤屋商店

社長 平 英一

日野町日野一〇八五番
電話(日野) 二一五番

日野国民健康保険運営委員
東京都民生委員児童委員
八王子市南郡歯科醫師会副會長

高木齒科醫院

高木 昂

東京都南多摩郡日野町二六九七
電話(日野) 六六番

輸 出 用 造 花

吉 沢 造 花 製 作 所

南 多 摩 都 日 野 町

万 願 荘

吉 澤 清

文具と紙製品のデパート

日 野 町 仲 町 (小 学 校 通 り)

中 村 文 具 店

三 美 ノ ー ト 発 売 元

サ ン 印 ソ ロ バ ン

各 種 有 名 文 具 事 務 用 品

学 校 教 材 卸 ・ 小 売

保 險 医
齒 科

日

野

醫

院

社 会 保 險
保 險

日 野 町 豊 田

日 野 義 利

日 野 町 金 子 橋

須 田 齒 科 醫 院

須 田 亮 平

東 京 都 南 多 摩 郡 日 野 町 豊 田 九 八 〇

内科・外科・小児科

土方醫院

医師 土方彦太郎

南多摩郡日野町石田一一九番地

電話(日野)40番

日野町助産婦會

町民の皆様の御利用を切にお願いいたします

<○>

日	〃	〃	日	〃	〃	〃	日	〃	日	〃
野			野				野		野	
町	〃	〃	町	〃	〃	〃	町	〃	町	〃
豊			日				日		日	
田	〃	〃	野	〃	〃	〃	野	〃	野	〃
岡	菊	谷	塚	佐	小	高	三	成	国	横
野	地	崎	木	藤	堀	橋	沢	沢	友	関
セ	フ	フ	静	ヨ	ヒ	ッ	ミ	正	ち	は
ツ	ミ	ジ	江	シ	デ	ル	ヤ		か	る

内科 小児科
外科 X線科
(結核予防指定醫)

日野醫院

日野 徹夫

東京都南多摩郡日野町金子橋

電話 日野(二七番

内科・小児科・レントゲン科

外科・産婦人科

(手術・分娩・入院設備アリ)

花 輪 醫 院

院 長 花 輪 音 三

醫 師 森 本 敬

醫 師 小 林 節 男

醫 師 阿 部 多 門

助産婦 佐 藤 ヨ シ

本 院 日野駅前 電 話 61 番

分 院 日野台停留所前 電 話 105番

内科・外科・眼科・小児科

天 野 醫 院

日 野 町 四 谷

天 野 敬

電 話 (日 野) 18 番

土木建築施行請負

中島音治

日野町西町三七六二番地

はる命用御の薬
ある信用

多摩薬局

日野駅前

化粧品

病氣は軽い内に
なをしましう
豊田薬局

豊田一〇三六

吉田仲子

保険醫

社会保険
国民保険

高橋齒科醫院

高橋正秋

東京都南多摩郡日野町三二九六番地
自宅 南多摩郡日野台六八〇一番地

営 業 品 目
和 菓 子 洋 菓 子
パ ン 引 菓 子 類

近 江 屋 菓 子 舗

日 野 町 仲 町 高 幡 通 り
電 話 (日 野) 114

完 全 保 管
た か く あ ず か り ま す

 質 相 模 屋

日 野 町 西 町 よ り 入 る

皆 さ ま の

振 興 信 用 組 合

組 合 長 小 山 省 二

本 店 八 王 子 横 山 町
395
電 話 (八 王 子) 771
1406

支 店 南 多 摩 郡 日 野 町 (駅 前)
電 話 (日 野) 155

— < ▲ > —

営 業 案 内

普 通 貯 金	普 通 定 期 貯 金
日 掛 貯 金	割 増 金 付 定 期 貯 金
月 掛 貯 金	当 座 貯 金
据 置 貯 金	大 黒 貯 金

毎 度 有 難 う 御 座 い ま す

牛 豚 肉

ハ ム ・ ソ セ ー ジ

コ ロ ッ ケ 味 自 慢 ト ン カ ツ

齊 藤 肉 店

本 店 日 野 町 下 町

支 店 駅 前 マ ー ケ ッ ト

電 話 (日 野) 1 4 5 番

味 噌 ・ 醬 油 ・ 食 料 品

燃 料 販 賣

有 限 公 司 日 野 坂 屋

中 央 線 日 野 駅 ガ ー ド 西

舌 代

- (一) 当店では良い品を安く販売する事が真のサービスであると言う信念の下に、現金薄利店頭販売を立前として掛値無しの正札販売を実施しております。
- (二) 菓子は嗜好品でありますので、いくら安くても不味いものを販売しては、永く顧客の信用を持続する事は出来ませんので、当店では常に品質の確実性と新鮮度を第一条件としてをりますので粗悪品の価格とは比較にならない事を御了解下さい。
- (三) 良い菓子を正しい値段で奉仕する事が菓子業者の使命でありますので以上の販売方法の下に何卒一層の御理解と御引立を御願致します。

株式会社 石坂屋菓子店

店主 石坂 吉 藏
(電 話 日 野 五 十 五)

銅 鉄 商

丸 十 商 店

林 清

日 野 町 日 野 橋 南 詰
電 話 (日 野) 三 九

産業東京本社

朝刊時事新報

週間サンケイ

サンケイグラフィ

日野専売所

所長 増田 廣吉

日野町森町

産経東京本社

千代田区大手町

TEL 銀座五、一二一(代表)

社長 前田 久吉

金物雜貨

問屋

株式會社 廣瀬屋商店

社長 馬場 末濟

日野町森町
電話(日野)二一番

貸席割烹料理

旅館

甲 源

日野町仲町役場隣
電話(日野)一三八番

須田 源次郎

毛糸・縫糸の御仕入は是非

中村商事有限會社へ

オニ印徳用縫糸発売元

トリア毛糸・クレハ毛糸

てまり毛糸・キューピー毛糸

鐘紡カタン天下一印絹ミシン糸

代理店

南多摩郡日野町六七四八

電話(日野)一五二番

雜貨・食料品

履物・家庭用品

有限
會社

近藤商店

日野町日野台 TEL 153 番

食品・菓子

日用品 雜貨

有限
會社

富士屋

赤塚磯吾

日野町日野台 6801 番地

TEL 151 番

營業課目

電氣工事 一般請負

ラジオ
テレビ

及家庭電化器具販売

足立電氣商會

農薬バクタモン南郡代理店

日野駅前電話（日野）一四一番

足立竹次郎

小間物化粧店

藤屋商店

日野町日野三三四〇 TEL 一六九番

加藤慶一

出前迅速

壽し勝

須崎勝次

日野町日野三・三四〇 TEL 一六九

土木建築請負

家具建具襖 ウ・インドケース
知事登録(3) (6539号)

森 勝 吉

日野町日野台6743番地

硝子の御用命は張替硝子店へ
建築用硝子及鏡類

張 替 硝 子 店

日野町日野台6748番
電話(日野) 214番

薪炭販売卸

渡邊商店

日野町上田80番地

高級紳士服・婦人服

小西六特約指定店

山上洋服店

日野町日野台6801番地

TEL(呼)八王寺 3086番地

牛 豚 鶏 肉

ハム・ソーセージ

アイスキャンデー

井上精肉店

日野町日野3341番

日野町食糧販賣企業組合

幹	〃	〃	理	理
事	〃	〃	事	事
川	山	清	遠	長
久	本	水	藤	佐
保	正	喜	信	伯
五	夫	一	吉	武
十				雄
雄				

南多摩都日野町

日野二五三一番地

TEL(日野)一二四

食品・雑貨・調味料・罐詰類

日の坂屋商店

日野町 4 3 4 4 番地

疊の御用命は

佐伯寅吉

日野町 森町

酒類調味料

大野屋商店

日野町 下町

井上保十郎

笹屋商店

新鮮と勉強をモットーとする店
海産物・食料品・調味料・雑貨
煙草・菓子類・化粧品
御用命は日野町万願莊

笹川幸作

電話 一七八番

類穀料飼外内

山 本 商 店

地番六五七二日野町日野

番 2 1 1 (日野) 電話

品家庭用品糧食・雜貨

有 限 公 司 近 藤 商 店

番 3 5 1 (日野) 電話 台 日野町日野

食品・菓子・日用雜貨

有 限 公 司 富 士 屋

地番一〇六台日野町日野

番 1 5 1 (日野) 電話

酒 類 及 調 味 料

関 口 酒 店

番 1 〇 6 台 日野町日野 電話

上下水道用には定評ある
日本工業規格品

羽田ヒューム管株式會社

社長 仙波信三郎

本社

東京都中央区銀座東四丁目七ノ九
電話(京橋) 五〇一八・四四二〇・七五一六

日野工場

東京都南多摩郡日野町日野一〇九七
電話(日野) 一五・四五

熊谷工場

埼玉県熊谷市大麻生二、〇〇〇
電話(熊谷) 八七七

斯界の最高水準を行く

富士印篩絹

日本篩絹株式會社

取締役社長 北村 信男

東京都南多摩郡日野町豊田六八五番地
電話(八王寺) 〇三一九・二四二七番

製造品目

製粉、澱粉、其の他の
プリント捺染刷用の

粉末、工業用篩絹
ステンシルク

製品

ディーゼルバス・トラック・全輪駆動車
トロリーバス □ ディーゼルエンジン
ルノー四CV型乗用車

日野ディーゼル工業株式會社

本社 東京都中央区日本橋通二丁目四番地

電話 和田倉(20) 代表四五二一四五九番

工場 東京都南多摩郡日野町日野七、三一九番地

電話 (八王子) 七〇一—七〇五番

創立明治三十五年

營業品目

写真用フィルム・印画紙・乾板
写真機其の他の光学製品

小西六寫真工業株式會社

社長 杉浦六右衛門

本社 東京都中央区日本橋室町三ノ一

工場 淀橋・日野・小田原・小山・諏訪・平賀分工場

富士工業計器

温度計 汽罐自動燃焼制御装置
 流量計 各種自動制御装置
 ガス分析計 各種遠隔測定装置
 液面計 各種自動運転装置
 その他 各種工業計器および調節計

富士電機製造株式會社

本社 東京都千代田区丸の内二の六
 工場 東京都南多摩郡日野町豊田一、八八〇

電氣・機械器具製造販賣

神鋼電機株式會社東京工場

東京都南多摩郡日野町日野六五六五
 電話(日野)四一 (八王子)七二・七五〇

本社 東京都中央区西八丁堀一丁目四
 支社 東京・大阪・名古屋・福岡
 営業所 広島・札幌・富山・門司
 工場 鳥羽・山田・東京

味の店

親 天 生 壽
子 所
井 井 ば し

日 野 駅 前

有 限 公 司 登 美 屋 本 店

電 話 (日野) 6 5 番

代表取締役 細 見 静 太 郎

写真のことなら何でも

写真撮影とカメラ材料

ベ ッ テ イ 寫 真 館

日 野 銀 座 通 り

TEL (日野) 216番

腕時計 オリエントスター
八日巻 高級置時計
時計検定器 オリエントグラフ

オリエント時計株式會社

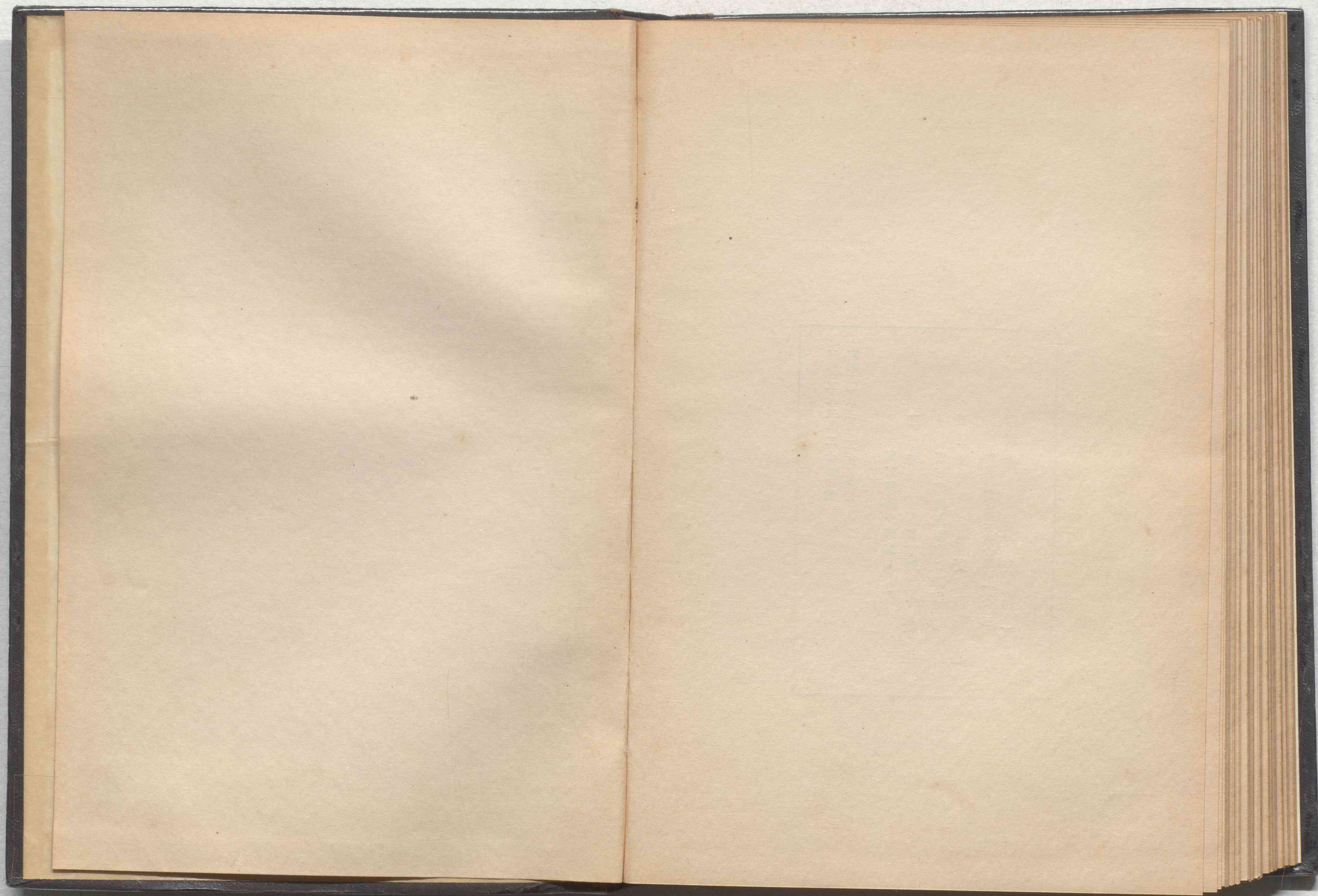
本 社 東京都中央区京橋三丁目四番地
工 場 東京都南多摩郡日野町三四七番地

昭和三十年三月二十日印刷
昭和三十年三月二十五日発行

著者 東京都南多摩郡日野町 役場

発行所 東京都南多摩郡日野町 日野町役場

印刷者 東京都新宿区下落合四ノ一六〇五 国府慎一郎





日野市立図書館
042-586-0584



00042 8055 8